フェイト～キアラがママっ？！

罪袋伝吉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アミダアミデュラヘブンズホール、って入ったのは良いけど出さないのかな、とか思ったらなんか思いついたので。

胎蔵界って言うんだから、ほら、そうなるとおめでたもあって良いじゃない！というわけでキアラさんにお母さんになってもらうことにしました。

なお、バトルとかあんまし考えてません。

主人公は赤ちゃんなマスターです。

なお、エロは無いがおめでたとか出産とか授乳とかはあるかも知れないのでＲ１５ですかねぇ。

なお、コメディです。

目次

プロローグ ―――――――――――――― 1
マスター語り。私はこうしてハメられました。 ―――――――――――――― 8
わーい、君たちは陰謀が大好きなサーヴァントなんだね?! ―――――――――――――― 22
マスター語り。キアラの胎の中。 38
ペッパーボックス・ナイチンゲール 52
女性サーヴァントの怒りと黄金の王と太陽の王。 ―――――――――――――― 62
お葬式。 ―――――――――――――― 72
メフィストフェレスに関する考察。 82
マタニティ・ライフ。 ―――――――――――――― 92
マスター語り。十月八日目。 ―――――――――――――― 102
手持ち無沙汰なママと母〜十月九日目。 ―――――――――――――― 111
出産〜十月十日・前編。 ―――――――――――――― 122
出産〜十月十日・後編 ―――――――――――――― 133
マスター語り〜出産後〜 ―――――――――――――― 142
カルデアだよおっかさん（原初の母という意味で） ―――――――――――――― 151
母の愛より強いものは無いらしい。 162

マスター語り～マーリン死すべし。事件 172
モリアーティ語り～母に感謝、父は知らないケド。 184
殺生院キアラの貴重な授乳シーン 194
エミヤの労い～征服王とウェイバー君 201
マスター語り。お風呂 213
新統括理事・ヴラド三世。 220
マスター語り～生きていたマーリン。 228
番外編。フィニス・カルデアの所在地に関する考察。 239
魔性ママ菩薩とは。 242
コロンブスの卵とは、卵を立てる事ではない。 252
マスター語り～どう足掻いても手のひらの上。 266
マスター語り～おっぱいと着ぐるみ。 272
撮影とご開帳。 284

プロローグ

「……ああ、すまんな。そうか、もう私には時は残されていないのだな」

病床の老人が、掠れたような声でベッドの脇に付き添っている一人の看護士にそう言った。

病室というには古く、そして様々なアンティーク調の家具や調度品、地球儀や何に使うのかすらわからぬ、しかしながらやはり古めかしくも存在感を放つものの並ぶ部屋。

おそらくはこの老人の部屋なのだろう。

灯りは眩しくないように薄く、看護士のその姿もまた影を帯びてはっきりとはしない。

「あなたは、正しく健全でありました。病も無くあなたを蝕んだものは何も無かったというのに健康なままにあなたは死に逝く。しかし……いえ、それは運命、なのでしょう。治療も何も必要ないままに、治療の手段も無いままにあなたは老いて死に逝く」

「はは、ははは、君は私に病気であって欲しかったのかね？はははは、残念ながら老衰はなんともしようがない事だ。１００を越えて今まで生きれた。妻を看取ることも出来

た。これはこれで幸福な生だったと言えるだろう?」
「……そう、なのでしょうね。あなたはそう生きた。いくつもの世界の病理、世界を蝕む害悪、誤りを正した。最後のマスターにして人理の守護者。しかし……。納得、出来ません」
　看護士は朗々とまるで何か小説の一説を読み上げるような無感情で抑揚のない話し方で続ける。
「ほう?納得、いかないかね?病理も病態も無く、ただ老いてあの世に召されるだけなんだがね?」
「病や治療の話では、ありません。心の話です、マスター。私は、私達は貴方と別れることを望んでいない。貴方が亡くなってしまえば、召還されその生涯尽きるまでと契約をした我々は英霊の座へ還りますが、しかし貴方は……」
「……天国か極楽か、どこへ逝くのかは知らないさ。そうだね、その辺は三蔵ちゃんか誰かに聞いてくれよ。……英霊の君達とは別の所に行くのだろうけど、しかしそれは仕方ない。寿命がもう無いのだよ」
「……やはり納得は出来ません」
「鉄の看護士、フローレンス・ナイチンゲールにそういってもらえたなら、ある意味凄いことだね。なに、縁があればまたみんなに会えるだろうよ。とは言え、人理修復とかは

もう勘弁して欲しいかな。あの頃は必死だったけれど今思えばみんなムチャクチャだったなぁ、本当に。だが……。妻が居て、みんながいて、ははは、楽しかったなぁ」

「……悲しい、です」

「……君は妻の事を考えてくれているのだろう？あれはおそらくは亡くなってから、英霊の一柱になって座に行ってしまった。違うかね？」

「……貴方の赴く場所に、貴方の最愛の人は居ないのです。また、人理が全て修復されて以来、サーヴァントの召喚の成功例は無いのです」

「……あの頃が異常だったのだよ。そう、全ての境界線が等しく狂っていた。無かった現実に有り得なかった現象。全てがね。我々の記憶にある活動の思い出も、我々以外の誰も知らず覚えてはいない。そう、ほら、シェヘラザードやアンデルセン、いや、シェイクスピアの書く悲劇かな？そういう物語のような事だったからね。とはいえ我々の現実も悪くは無かっただろう？何しろ思い出せば辛いことも多かったが、概ね楽しいことだらけだったんだから」

「……」

「……はぁ、バーサーカーの君が泣くなよ。君はいつもの鉄面皮で自他共に厳しくしてくんなきゃ。調子が狂ってしまうよ。そんなんで座に還った時に人々を見守れるのかねぇ」

「……酷い言われ方ですね、マスター。なんど、なんど立ち会っても、人との別れは慣れるものでは無いと言うのに」
「……すまんな。君が泣いたのはこれで二度目か。マシュの時もそうだったな」
涙を流すも表情を変えないナイチンゲールに苦笑しつつ、老人、カルデアの最後のマスターは手を伸ばす。
その頭に手をやり、ぽふっ、と軽く撫でるようにしてやると、孫にでも言い聞かせるように、老人は言った。
「まぁ、今日明日と言うわけではないだろう。君は私の専属の看護士なんだから、まだまだ話は出来るさ。……今日は少し、疲れた。寝かせてくれないかね？」
「……はい、マスター。では、また」
フローレンス・ナイチンゲールは少し名残惜しそうな素振りではあったが、しかし老人の身体を慮ってその場を後にし、部屋から出て行った。

――――――――――――――――――――――――

さて、この物語は、かつて人の世を護らんと戦ったカルデア最後のマスターのその後、

死の時を間近にした老後の話である。
そう、彼の命はもはや尽きかけていた。
「とーは言え、それでは物語はつまらなーい。この物語は始まりから終わってしまう、はっきり言って大ハズレのようでございますよ?」
テラ子安な声が、暗闇から聞こえて来た。
「やはりそれでは面白くなーい。そう、物語は再生を、そうでございましょう?そうであるべきなのでーす、ふはははは」
「うるさい、このメフィストフェレスめ。マスターはもう下らない騒ぎにも何にも出来ない程に老いて弱ってしまったのだ。というか騒ぐな!!」
セイバーの誰かが言った。それも闇の中である。
「いえいえ、マスターは弱った、それがとても面白く無いと言っているのでございますとも。我々はそう!奇跡すらも起こせるサーヴァントなのです、そうですとも、多くの知恵、多くの力、多くの奇跡、そして私などは悪巧みならばこれこの通りな英霊でございましょ?」
闇の中でメフィストフェレスはまるで三文芝居の如くに大袈裟な物言いをしつつ嘲笑する。
「だからと言って、人の死は何とも出来ぬ。それとも貴様はマスターの死体にカンカン

ノーでも踊らせるつもりなのか？マスターが亡くなれば我らとてこの世から居らぬようになるのだぞ！」

「マスターの命運はすでに尽きかけた。マスターはそれを受け入れた。そこに何も我らが為す術はない」

キングハサンとマスターに呼ばれた山の翁が闇の中でも爛々と輝く鬼火の目でメフィストフェレスを睨みつける。しかし、かの山の翁であってもメフィストフェレスの言う真意を掴みかねているのか、やや戸惑うような声だった。

「山の翁さんはお堅い、お堅過ぎる！いえいえ、人理を守護せしマスターなれば、若返りの薬も死者の復活も望まれぬでしょう。聖杯などあっても以ての外でしょうとも。しかし、もうすでに策は万全、仕掛けもしっかり、全国のぢょしこぉせぇのみなさーん、ほれポチッとなっというぐらいに、事はすでに成ってしまって居るのでございますの事ですよ、ははは」

「貴様、マスターに何をしようと言うのだ!!事と次第によってはただではすまさんぞ!!」

チャキッ、とセイバーが聖剣を抜く音が聞こえた。それに呼応するようにあちこちからも抜刀や抜剣、槍やら弓やらなんやらかんやらを構える音が一斉に鳴り響く。どうやら増殖しまくってしまった、アーサー王のバリエーションなサーヴァント達やら他の槍な聖女バリエーションやら、全てのサーヴァント達が獲物を抜いたようだった。

「おお、怖い怖い。なに、我々がマスターを失わない為でございますよ。そう、そして人の世の理を外さず、然るに自然な形でマスターをこの世にあるようにするための一つの冴えたやり方でございます。そしてこのままの関係で」

メフィストフェレスはニタリと嗤い、そして言う。

「そう、死があるならば誕生もあって然るべし。人の魂は流転し、輪廻は廻るものでありましょう。ならば輪廻転生を我々の手で。契約を途切れさせず再び産まれて頂くのですよ。命途絶える前に、速やかに産まれ出でていただくのですよ」

メフィストフェレスは高らかに、まるで劇場の名俳優の如く両腕を広げて言った。

「そう、合い言葉は『天国の穴からこんにちはベイビーマスターぁぁぁぁーーーーっ!!』」

テラ子安の絶叫。

そして、彼らのマスターの部屋から、女の高らかな声がひびいた。

「アミダアミデュラヘブンズホール!!」

「どわぁぁぁぁぁぁぁっ?!何をするっ、おい、キアラっ、うわぁぁぁぁっ!!」

マスター語り。私はこうしてハメられました。

私は様々な所でグダオと呼ばれているが、自分では何故グダオと呼ばれているのか、よくわからない。

グランドオーダーのグとダに男を付けた、という説が有力らしいが、まぁ、今更なんと呼ばれても構わない。

ただ、本名はそのような名前ではない。

というかよく考えて欲しいがその名前はシェイクスピアやアンデルセンなどが当時のあの大冒険をフィクションな小説として編纂した際に私の実名などを使うのは不味かったので仮に付けたもの……いや、私の本名がとても平凡過ぎたという説もあるが……であったりする。

まぁ、それらはラノベにダウンサイジングされたり、マンガになったり、アニメになったりしたが、それらの主人公の名前も当然私の名前は使われてはいない。

まぁ、主人公が女性に置き換えられている場合もあるが、もちろん私は男性である。

というかその後作家系の連中はそれでかなり稼いだようで、私とマシュは焼肉とか寿司とか奢って貰ったりしたのだが。

まぁ、昔の作品であるので覚えている人は少ないかとは思うがね。

私は現在、床に伏せっている。

病気ではない。老衰という奴だ。グランドオーダーの大冒険を妻、マシュとともに繰り広げたあの頃からすでに８０年ほど経っており、そりゃあ歳も食うというものだ。

はぁ、あの時はキツかったり辛かったり悲しかったりぐだぐだだったり、いろいろあった。様々な時代へと行って様々な人……というか英霊や神達と出会って、そして戦ったり助けられたり、助けたり一緒に戦ったり。必死で出来ることをやって。

頑張れたのはみんなが居たから。そしていつも隣にはマシュがいた。そう、妻が居たからだ。

そうして、妻と共に出会った英霊達は、未だにこのカルデアに居たりするのだが、いやはや毎日が賑やかだ。

そう、今でも賑やかなんだよ。

召喚したサーヴァント達はほとんどが残ってくれていた。

グランドオーダーの終了後にダ・ヴィンチちゃんはほとんどが英霊の座に帰ったような事を言っていたが、大半が残っていた。

みんな私やマシュがほっとけなかったようだ。

円卓の騎士達は全員いるし、ジャンヌ・ダルクにジルドレェ、シェイクスピアにアン

デルセン、ハサン達はキングハサンまで残ってくれている。あのゴルゴーンも、それに殺生院キアラ、あとは、ドクターロマン……じゃなかった、真名を呼ぶとネタバレするので言わないが彼もサーヴァントとして何故か帰って来てくれてたりする。普段はあのロマンな姿なんだけど、マシュは彼の帰還を泣いて喜んだっけ。

私がこうして老いてベッドに伏せってしまってからは少々彼らも気を使ってくれているのか騒ぐのは自重してくれているようだが、毎日誰かしら来てくれている。

主治医のソロ……いや、ドクターロマンにパラケルスス、専属看護士のナイチンゲールは当たり前だが毎日私の様態を診にくる。

エレシュキガルは『私の冥界に来るように！』とか三蔵ちゃんは『仏の弟子になるのです！』とか言う。オジマンディアスやニトクリスは私の為のピラミッドを作っているとかなんとか。

というか、ピラミッドになんて眠りたくないよ。それにミイラにもなりたくないし。

なんだろう、私は死んだらどうなるのやら不安だ。というかみんな私が死んだら英霊達の座に帰ってしまうのだが正直なところそんな遺物が残された場合どうなるのだろう。つかそんな墓標は嫌だと思う。

あと、ノブナガが死んだら位牌に焼香ぶちまけてやるとか言っていたが、いや死んだら君は還らなきゃいけないからね？

はぁ、と溜め息一つ吐いて私は妻の形見とも言えるあの盾をベッドに横たわったまま、首だけ向けて見る。

壁に掛けてある盾は、亡くなった妻が使って居たものだ。これだけは残った。

『円卓の盾』

旧姓マシュ・キリエライトは、グランドオーダー作戦発動直後に起こった爆破テロによって瀕死の大怪我を負った。その際に、彼女と融合していた円卓の騎士のギャラハッドが彼女に力を貸し、彼女はデミサーヴァントになった。

彼女はいわゆるデザイナーズチルドレン、つまり人工受精やバイオテクノロジーによって作られた実験体であり、その命は長くないはずだったのだが、彼女はグランドオーダー作戦を生き延びて、そしてつい五年前まで、つまり９０数歳まで生きる事ができた。

その原因については私も当のマシュにもわかってはいないが、何にせよ長生きできたのだ。それは良かったと思っている。

私達の間には子供は出来なかった。原因は全くわからない。英霊の現代医学の父、パラケルススにさえもわからなかった事だ。仕方は無い。

子供は居なくても、それでも私は幸せだった。

彼女は死後、英霊の座に逝ったらしく、もうすぐ私が赴く場所には居ないようだ。そ

れは少し残念だが、私は悲観してはいない。
またいつか逢えるという予感、いや、確信があるのだ。とはいえ状況から判断しておそらく今生ではなく転生したどこかでだろう。その時にはまたマスターとサーヴァントの関係になるのだろう。
「……途方もなく先の再会かね」
そう独りの部屋で呟く。
だが人の世はまだまだ続く。だからまた逢える。
「私達の守った可能性だよ、マシュ。だから、また逢えるさ」
そう、盾に語りかける。
この盾は、彼女が亡くなった後もなおここに残り続けている。ともすれば彼女がまだここにいるような気すらするのだ。いや、見えないだけで盾を通じて見守り続けているのではないかと思う。
彼女はとても心配性だから。あとああ見えて嫉妬深いから。
「はぁ、とは言え次に逢えるとしたら、また人理の危機とかそういう大事に巻き込まれるんだろうかねぇ？」
それはそれで厄介だと思うも、マシュと二人なら大丈夫だという確信がやけにする。
なんだかんだ言っても私はいつも信頼しているんだよ。そして彼女もそう思ってい

ると確信している。
相棒にして私の専属サーヴァント。そして最愛の妻。かけがえのない私の大好きな、マシュ。
何年、何十年、それこそ何百年経ってもそれは変わらないと自負している。
いや、どんなけマシュ好きなんだよ?!とか言われてもそれは致し方なかろう。夫婦なんだから。
「ふう、さて寝るかね。お休みマシュ」
私は彼女の盾とデスクの上の妻の写真にお休みの挨拶をすると、手元のスイッチを切って部屋のライトを消そうとした。
と。
「あら、もうお休みですの?マスター」
「む……?」
ふと、声のした方へと目をやると、いつの間にか一人のサーヴァントが私の寝床の横に居た。
頭に頭巾を被った仏教の尼のような格好をしたサーヴァント。アルターエゴ、殺生院キアラである。
「ああ、キアラさんか。ふむ、寝るつもりだったが」

彼女は私がこうして伏せってからはめったに顔を見せることなどなかった。
と、言うか彼女は単体で私に面会する事を他のサーヴァント達から禁じられており、必ずアンデルセンを伴ってもう一人戦闘力の高い誰かと共に来なければならないと決められている、このカルデアでは最も危険度が高いサーヴァントなのだ。
だが、何故彼女が私のところに来るためにアンデルセンを伴わねばならないか?と言えばキアラとアンデルセンの間に、かつて何かあったらしい。
詳細は私にはわからない。
かつて彼女が真性悪魔になった事件の時の事らしいが、その彼女と戦ったサーヴァントであるギルガメッシュは特に教えてはくれなかった。それに私も聞く気は無かった。
ただ、ギルガメッシュは一言横柄な感じで。
「あやつらのそれは、子供の色恋沙汰よ。つまらん!」
であった。
確かに二人を見ていると、両者共に何故かお互いに嫌うような素振りを見せる癖にどことなくツンデレ感溢れる感じであり、素直になれない中学生のこじらせた恋愛的だったりしたので、ああなるほどと私とマシュはそっとしておいた。
それにキアラもかなりの意地っぱりで、めったにアンデルセンと接触しようとしない。

そこを安全装置として滅多に私と接触させないようにされた訳であるが（発案はギルガメッシュである）、しかしドアのところを見ればアンデルセンとシェイクスピア、そしてマーリンがいた。

つまり、彼女は話し掛けたく無いと言っていたアンデルセンに話し掛けてまで私に会いに来たのだろう。

彼女はなんというか義理硬い一面がある。またけして情の無い人間……サーヴァントではない。

だが彼女が私のところへ来るということは、もうすぐ私の命は尽きてしまうということなのだろう。

いや、というかそれはもう確定なのだろう。何故ならサーヴァントではない、最果ての塔の引き籠もり魔術師本人がここに来ているのだから。

「というか、マーリン?!何故あなたまで?!最果ての塔に居るんじゃ無かったのか?!」

「いやぁチャリで来た！徒歩だと辛いしね？」

「……いや、最高峰の魔術師がチャリで来るなよ。つかチャリでどうやってこの雪山登って来たんだよ」

カルデアは険しい雪山の山頂付近にあるので、はっきり言ってチャリで登るのは無理である。つか、今は冬なのだ。山の麓につく前に自転車ごと雪に埋もれてしまうだろ

う。

「なに、今はもう上に登るためのロープウェイあるからね」

「いや、今の季節はロープウェイも止まってるからね?!」

そう、冬真っ只中の険しく高い雪山なのだ。ロープウェイがあってもこの季節には止まっている。なによりもう夜なのだから止まっているはずだ。

あはは、と彼は笑ったがおそらくは最果ての塔からこちらに空間を繋げて無理矢理に直通で来たのだろう。それもこのカルデアの厳重な魔法防壁や空間防壁をすり抜け、監視網にも引っかからずに、だ。

なんでもありだなこの人も。

「フォーッ、マーリン死すべしフォーッ!!（ドカッ!!）」

「ぶへぁっ?!あいたたた、君、僕を見ると跳び蹴りして来るの、止めないかな」

マーリンは部屋のどこかに居たフォウさんに跳び蹴り食らわされた。どうもフォウさんはマーリンの事が嫌いらしい。

フォウさんは幻獣であり、後で聞いた話だが、人の悪い感情などを食らって大きくなる存在だとか。

とはいえ、フォウさんは今も昔も大きさは全く変わっていない。あのままの姿である。

やっぱりかなりの知性あるんじゃないか？とか思ってしまうがフォウさんはフォウさんだから気にしない。妻が亡くなってからもフォウさんはいつもずっと私の側のどこかに付いて居てくれている優しい子なのだ。

私は苦笑いしつつ私は上げた頭を枕に落とした。

いや頭を上げるのだって辛いんだよ、この身体は。なんてったって１００歳越えてるんだよ。

「そうそうたるメンツだねキアラさん」

「ええ、アンデルセンはどうでもいいというかむしろ見劣りしてますけれど。シェイクスピアはヘタレなアンデルセンが締め切り間際の彼を無理矢理連れ出してきたのですわ。マーリンさんはお部屋の前でお会いしましたけれど」

……相変わらずのツンデレだね、この人。

「俺も締め切り間際というか、俺達はもう執筆出来る時間が限られてるんだ。書き残したいものはまだまだ沢山あるのに、この女が泣きついてきて『マスターに会いに行かせて下さいまし』などと……」

「誰が泣きつきましたか！」

アンデルセンの毒舌もいつもの調子だ。昔、初めて会ったのはたしかロンドンだったと記憶しているが、その姿と声のギャップに驚いたものだ。

私は目を細めて二人を見る。お互いに気があるのは傍目から見てもよくわかるのになぁ。というかキアラが現代でアンデルセンが執筆した新しい童話を買って、そのファンレターを楽しそうに出したりしているのはみんな知ってるのに。

あと、それをキアラからだとわかってて嬉しそうにその返事をアンデルセンが書いて出してるのもみんな知ってるのに。

というかもうお前ら結婚しちまえよ。

「はぁ、犬も食わないとはこういう事ですかな、マスター。というか正直なところマスターにはまだまだ長く生きていただきたいものです。モーツァルトとコラボした歌劇映画のシリーズもようやく最終シーズンに突入、撮影もとうに始まっておるところなのですがねぇ」

シェイクスピアはそういって嘆く素振りをした。その手にはつい先ほどまで執筆をしていたのだろう、ペンのインクがついている。

そういえばシェイクスピアは様々な芸術系のサーヴァント達やエジソンやテスラなどの技術系のサーヴァント達と組んで現在、映画監督として活躍していたりする。

私もその映画は今まで見て来たし楽しみにしていたが、最終話まではもう見れないようだ。それは少し残念だ。

「ふぅむ、出来るだけは生きていたいが、こればかりはどうしようもない事だから」

「……はぁ、本当に君は欲が無いってもんだね。悟りなど開いてもいないのに悟ったような事を言う。いかなる偉人でも足掻いたり不死の霊薬を探したりしてきたというのに。他でもない、このカルデアのグランドマスターが、だよ？ギルガメッシュ王や不死伝説にまつわるサーヴァントも一人や二人では無いというのに、何故それをしないのかな？」

マーリンはそう真顔で言う。

「不死伝説に出てくる人物達も今はサーヴァント、つまり英霊になっている。そういう事さ。それに私に悔いは無いよ。マシュも見送れた。子供は出来なかったが、だが人の未来は紡げた。このカルデアも若者達が維持して行くだろう。私は役目を終えて逝くべき所へ行くだけだよ、マーリン」

「……本当に君は美しい人生を織っている。ずっと覗いて見て知っているけれどね。だが敬愛すべき我が友よ。それではあまりに悲しい。そして納得が行かない者達もかなり多いのもわかってくれたまえ。そう、視聴者サービスというものが全く最近無いのが僕には不満だったとも付け加えておこう」

げしっ！げしっ！とフォウくんがマーリンを蹴りつづけているが、彼はお構いなしにペラペラとろくでもない事を言い続け……いや、本当にろくでもないな、この人は！

「いや、人の事をテレビか何かの番組みたいに言わないでくれ。というか私にどうしろ

と言うんだよ。もう死にかけの老人なんだよ、私は」
と、よく考えてさっきから会いに来たのに静かなキアラの方から何か不穏な物を感じて振り向くと。
キアラが、静かにぶつぶつと念仏というか呪文というのか、つまりようするに、アレである。
しかも何か大股を開いて、つかパンツ履いてねぇ?!
「……ブツブツブツ。大悟も解脱も我が指ひとつで随喜自在。行き着く先は殺生院。あぎとの如き天上楽土」
「なんとぉぉぉっ?!つか殺す気満々?!つかマーリン!!いや、アンデルセンっ!!シェイクスピアっ?!なんじゃこりゃあああああっ!!」
くぱぁ。何かが開き、有り得ないほどに裂けた。
「ああ、大丈夫だよ。また十月十日(とつきとおか)後、新たな君の誕生日にまた会おう」
「うっふふ。マスター、私に還りなさいませ?記憶を頼りに、優しさと夢の源へ……?」
「それ、途中から某エヴァの主題歌やがなぁぁぁっ!!裏切りやがったな、マーリン!!」
「いやぁ、僕はどちらの味方でもないって昔言ったよね?　それにボクは悲しい別れとか大嫌いだ。意地でも死に別れなんかするものか、ともね。だから彼らの計画はとても好都合だったんだよ。そう、僕は君のファンだからね」

「チッキショーメェ!!つか、吸い込まれるぅぅぅっ!!」
「着床、なさいませ?快楽天・胎蔵曼荼羅（アミダアミデュラ・ヘブンズホール）。孕み孕み孕みQ～っっ!!」
「うっぎゃあああああああああああっ!!」
　吸い込まれる最後に、マーリンの声が聞こえた。
「ああ、安心したまえ、父親は君でもう登録してあるし、法的にも遺産相続や様々な手はずはモリアーティやホームズ達がしているからねー?元気にまた産まれてくるんだよ～?」
「てめぇ、覚えておけよぉぉぉっ!!つか、ぎゃあああああああああっ!!」
　すっぽん!と、私はキアラの中にずっぽりハマって意識を失ってしまった。
　というか、なにこの現象っっ?!

わーい、君たちは陰謀が大好きなサーヴァントなんだね?!

話は数週間前に遡る。

カルデアのあまり誰も来ない一角。ある意味嫌われ者のサーヴァント達が潜むその区画では、数人の嫌われ者というか厄介者というのか、カルデアの職員達からすればあんまり関わり合いになりたくないような、お友達になりたくないような連中が集まっていた。

【厄介者その①】ジェームズ・モリアーティ教授。

彼はかの有名なコナン・ドイルのシャーロック・ホームズに登場する悪の教授であり、そして宿敵でもあった人物であり、ホームズに匹敵する頭脳を持ち、こと犯罪計画を立てるにおいて右に出るもの無し、という非常に難儀な人物である。

なお、ネタバレになるが『新宿のアーチャー』を名乗っていた事もあり、その時のマスターを気に入ったのか、事件解決後の召喚でほぼホームズと同時期にカルデア入りしたのである。

「えーと、すまないがこの【厄介者その①】という紹介はなんだね?!老眼から涙が出てきてしまうぞぉ?!」

……無視無視。

【厄介者その②】ジル・ド・レェ（キャスター）。

かつてジャンヌ・ダルクと共にフランスを救国せんと戦ったはずの高潔な騎士の成れの果て。

全てに絶望し魔術に傾向し多くの子供達をやたらめったらと殺害したりした後処刑されたという経緯を持つ、変態ジャンヌスキー。

かつて聖杯によってジャンヌ・ダルク・オルタ（通称・邪んヌ）を生み出したり、クリスマス前にはサンタなチビジャンヌオルタを作ってしまったりした、笑えるけれど業の深いロンパリ変なエリマキ野郎である。

先に召喚されたジャンヌを追うようにして召喚されたときは先に呼ばれていたセイバーのジル・ドレェを絶望させた。

「いささか、失礼な紹介ではありますな、いやはや」

……無視無視無視。

【厄介者その③】メフィストフェレス（自称悪魔）

変態ビザール風もっこり声がテラ子安（変態）。
「……いや、テラ子安とはなんです?!中のひとは関係無いでしょう?!というか紹介になって無いでしょう?!」
……めんどくさいので超無視。というか子安さん頑張りすぎでしょう。
【厄介では無いけど呼ばれた人】パラケルスス。
現代医学の祖にして偉大なる錬金術師。
とはいえ、錬金術を薬品の合成に応用したり、四大元素云々を提唱したり、ホムンクルス作ったり、鉄や鉛を金に変えたりとなんとなく本当に現代医学なのか?と疑いたくなるけれど、現代医学の祖。
逸話は多いがサーヴァントになってからは現代医学にも精通し、名前を伏せて未だに医学論文を執筆し、貢献している人（サーヴァント）でもある。
厄介では無いけど厄介な人ではある。本名はテオフラトゥス・ホーエンハイムとか何とか言うらしい。
「……まぁ、いいか」
……良いのかよ。
何故にこの四人がこのような所に集まっているのかといえば。
「……ふむ、なかなかに興味深いがしかしそれでマスターは納得してくれるのカネ?正

直なところ私は駄目だと思う」
　鼻ヒゲを指で弄りながらモリアーティ教授は少ししかめっ面でメフィストフェレスを見ながら言う。
　その横でうんうんとジル・ド・レェも頷いている。
「この中で一番マスターとの付き合いの長い私でも、無理なのではと、推測いたします。ええ、無理ですね」
　ここぞとばかりにマスターに召喚された時期を自慢するように言うが、確かに彼が召喚されたのは『オルレアン』の後、セイバーの方のジルや聖女の方のジャンヌダルクが召喚された少し後ぐらいなので実際付き合いは長い。
「ふふふ、確かに承諾が必要ならば無理でしょうとも。そう、無理でしょうとも。ですが皆様お忘れですか?我々はそもそもからして承諾など取るような人物でしたかね?」
「む?」
「は?」
「考えても見て下さいよ、プロフェッサー。あなたはかつて犯罪を計画する前に、被害者宅に赴いて『すみません、あなたのところで今度大きな犯罪をする予定なので承諾していただけますか?』などと言った事はありましたか?ムッシュウ青髭、あなたは『お宅のお子さんを連れ去って惨たらしく殺しますがいいですか?』などとはまさか親御さん

には言ったりしなかったでしょう?」

ふはははは、とメフィストフェレスは嗤いつつその目を爛々と輝かせて言った。

「もちろん私は悪魔、契約によって動く事は動く訳なのですが、彼は善良過ぎて、しかも数多の善性の神格にも近い英霊達にこよなく愛され、かつてのファウスト博士以上にその魂を横取りされる可能性が高いのですよ、これが。そう、それには特に異論はありませんし、私とても彼が天界へ召されるというのには反対はしておりませんとも。むしろその方がお似合い」

「では何故に彼を延命しようなどと私に持ちかけたのです?メフィストフェレス。ロンドンでも仲間でしたがかつての貴方は単なる鬼畜な殺人鬼のような男だったと記憶していますが……?」

パラケルススがとても気味の悪い物を見たような目でメフィストフェレスを見る。彼もまた『ロンドン』ではメフィストフェレス同様に敵方のサーヴァントであったのだが、その時にはこの悪魔を自称するサーヴァントが人の寿命を延ばそうなどと、よもや言うようになるとは思っていなかった。

しかし、パラケルススの問いかけにメフィストフェレスは首を振って答えた。

「つまらないからでございますよ?わかりませんか、ドクターパラケルスス。このままではあまりにつまらない。ああ、我らのマスター。普通ならば忌み嫌われる者としての

我らのようなサーヴァントを嫌いもせずあるがままに接し、そして我らのような極悪なる者達と友好的に接しているというのに悪にも邪にも染まらず、ついにはもう天界の門すら彼の為に開かんとする、そのような人物が、只、安らかに穏やかに死を待つばかり、そんなのは我々のマスターに相応しくない、そうは思われませんか?」

非常に屈折した事をいうメフィストフェレス。つまりコイツは何のかんの言いがかりをつけてでも自分の『お気に入り』のマスターに死んで欲しくないのだと一同は彼を分析した。

存外、かのファウスト博士を地獄へと堕ちようとする瞬間にわざと救わせたのは他でもない彼自身なのではないか?などとも疑ってしまいそうである。

しかし、言いがかりをつけたところで人の死はどうしようもない。これでは単に駄々を捏ねている子供のようである。

「いや、それは誰もが夢見る大往生なのではないかね?三蔵法師などは悲しみつつもかくあれかし、的に納得していたケドネ?」

モリアーティ教授は軽口を叩くように彼に言ってみた。聡明な悪のプロフェッサーにも、彼がなんの仕掛けも策も用意せず、無駄話をするようなサーヴァントではないとつくに分かっていた。

ただし、そんな彼であってもどのようにしてメフィストフェレスがマスターの命を長

らえさせようとしているのか全く分からなかったのである。

故に面白く無い。だからつついてみたのである。

考えられるとするならば呪物か宗教関連の様式や伝説の再現を使った復活ではないか？とモリアーティ教授は推測したのであるが……。

「宗教関連のサーヴァントなんざ、ぺぺぺのぺーでございます!!面白くない、つまらないと言っているのでございますのことですのよ、ぺーーーっ!!このカルデアではトラブルこそが命！マスターは酷い目にあっても最後は大団円、サーヴァントが持ち込む笑いの厄災に慌てふためき、そして最後はタハハと苦笑する。それがあのマスターでしょうとも!!……何十年我々は、あの頃のマスターのあの苦笑しつつもなんでも許すような顔を見ていないのでしょうか。また、再び見たいとは思いませんか？否、誰もが見たい!!誰もが願っているのはもう言うまでもないのですよ!!」

「……どうでもいいけど君の語り口調はなんか長くないカネ？まぁ、確かにそれはそうだけどねぇ（ふむ？宗教関連のサーヴァントの伝説再現では無い？）」

「そうでしょう、そうでしょうとも！ゆえのマスター延命計画、ゆえのカルデア再生計画なのですよ!!」

そう、この集まりはマスターを延命させてしまおうという計画をするための集まりなのであった。故に近代医学の父、現代医学の祖と言われたパラケルススも巻き込まれて

いるのであるのだが……。

「だからといって、私には何もできませんが? 如何なる現代薬品も太古の霊薬も彼には効かない。未だに彼の奥方の盾はそういう悪影響があるものや副作用があるものを防いでいるのでしょう。病を防いでいる反面、そういう物も効かないとなると、手の施しようが無い」

パラケルススは首を横に振って残念ながら、と言った。

そう、マシュがギャラハッドから受け継いだ盾は未だに健在なのである。若き日のマスターの側には常に彼女がおり、そして彼女が人並みの寿命を経て亡くなった今も彼を護るようにその盾はあらゆる害悪を未だに寄せ付けないのである。それはたとえ薬剤であれ霊的な災いであれ。

故に現代医学もオカルトも彼には効かなかったのである。或いはビーストクラスの魔力ならば突破は可能かも知れなかったが、そのような存在はそれこそとっくの昔、過去に事件を解決する際に倒してしまっていたし、協力などしないだろう。なんにせよ無理な話である。

皆、一同に黙りこくり、そして俯いてテーブルのクロスをのぞき込むようにした。

「……無理ですか。我々は奇跡すら起こす英霊の集団、なのにただ一人のマスターすらその命を長らえさせれない」

ジル・ド・レェはぼそりと弱音を零した。
「否、否、否否否バゥアーーーッ!!ドクターパラケルスス、あなたには延命が無理なのは良く知ってるし私も全っ然、期待もしてまっせーん!!ケケケケケ!!良いですかぁ?全然期待してまっせーん!!」
落ち込む三人、しかしメフィストフェレスのテンションは変わらない。というかなんと失礼な。
「では、何に期待すれば良いのだ?この悪魔め!!」
ジルドレが珍しく静かに怒りの瞳を向けた。彼がこのように真面目に怒るのは誠、ジャンヌダルクの事以外では非常に希有である。だが、それをモリアーティ教授が制した。
「まぁまぁ、待ちたまえよ。私が思うにこの自称悪魔のお人好しはもうとっくに解決策を用意していると見える。悔しいかな我々が思いつかなかった方法で」
違うカネ?とニヤリと笑って見据えて、メフィストフェレスに話すように促す。
「なんと?!」
ジルドレのロンパリ気味の目がギョロリと見開く。パラケルススも驚きの表情だ。
「そーうです、そのとーり!!マスターの奥方の盾は災い、呪い、毒、諸々の害悪に対してはおそらく最高クラス!!ですが祝福、加護、その他のものに対してはまーったく働かな

い!!そう、ではオメデタならばいかがでしょう?」
「「は?」」
「いえいえ、マスターは男性でもう老人です、オメデタするのは不可能ですし、オメデタさせるのもお年で機能がホレもう無理ですよもちろん。さて、皆様はとーっくにお忘れかも知れませんが、このカルデアにはかつてビーストだったアルターエゴ、しかも今回の策略にはうってつけのお方がおられます!!まぁ、最近は新しいイベントでかなーり影が……げふんげふん。ではお入りいただきましょう!!なんでも子宮にしまっちゃうよおねぇさん!!殺生院キアラさんどぇーす!!」
「はーい、アルターエゴ、殺生院キアラ、まかり越しましてございます。あと、その異名とか影が薄くなったとか言った方、後でカルデアの体育館裏、ですよ?」
「うへぁっ?!いえいえいえいえ、それはご勘弁を!?」
「……そう言えば、いたねぇ」
「うーむ、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨ以来ですなぁ」
「まぁ、翁祭り終わってからはまた新しいイベントが、ね」
「散々な言われようですわね。こう見えてお色気とかその辺は他のサーヴァントにはまだ負けておりませんと自負しているのですが?!」
「……まぁ、じぃじの方が多分人気はあるかと。それに『死にたくない』さんとか『Ωア

ビゲールちゃん』とか『エレちゃん』とか色々、ねぇ」
「ああ、作者さん無課金で『シバちゃん』とか『アルテラさん』出したらしいよ？」
「ああ、『褐色ケモミミ巨乳むちむちぃ～!!』とか『銀髪美女五つ星いぃ～!!』などと夜中に叫んでお隣さんに朝、『はよ嫁もらえええ年こいてからに』などと言われたとか」
　いや、作者の事はほっておけ。
　それはともかく。
「……しかし全くわからん。確かにビーストＩＩＩだった頃のキアラクンならば奥方の盾の防御を崩せたかもしれん。しかしだからと言ってそれでなんとかなるわけではあるまい？」
　モリアーティ教授が首を傾げたその時、部屋のドアが開いた。
「崩す必要は無いのだよ、モリアーティ」
　部屋に入って来たのは誰あろう、名探偵。不敵に笑いながらパイプ片手にかつての宿敵のところまで悠々と歩いて来た。
「む、ホームズ？はて、何故君がここに？」
「面白そうな悪巧みを君たちがしていると聞いてね。不穏な事なら止めさせようと思っていたんだが、なかなか似つかわしくない談義をしているじゃないか。かのモリアーティ教授が人の命を永らえさせようなんてね」

「ふむ、キミは邪魔をしないつもりカネ?君こそどんな風の吹き回しダネ?」
「なに、マスターの事を思っているのは君達だけではないということだよ、モリアーティ。それに今回、私には依頼人が居ないのだ。私立探偵は依頼人が無ければ成り立たないのだよ」
「……居なくても昔は散々人の事を邪魔していた癖に」
「何か言ったかい?まぁ、それはそうとして……。ミス殺生院。しかし本当に良いのかい?」
「ええ、女として産まれたからには、やはり人並みの幸せというものに憧れるもの。これはマスターへの思慕、そして愛。そう、愛とは躊躇わない事ですもの!」
ぐっ!とキアラは右手を握り、そして何かを決断したように気合いたっぷりにして言った。
そのホームズとキアラのやりとりで、パラケルススやジルドレはメフィストフェレスが考えたマスターの延命方法の正体を知った。
モリアーティ教授などは、あ〜、などと額に手を当てて天井を見たが、キアラに向き直って、
「本音は?」
モリアーティ教授は胡散臭げなものを見るように言った。

「妊娠!そして出産ショー、開脚台に乗せられて、足を縛られ、あらぬ姿で……産道を通る我が子、その痛みもまた……今まで知らなかった快感でしょう、じゅるり」

モリアーティ教授はダメだこの女、と言わんばかりの視線をキアラに向けた。

概ねホームズもジルドレもパラケルスも同じ感想だったようであるが、ただメフィストフェレスだけはケタケタ笑っていた。

「……あ～チェンジで。というかゴルゴーンさんでは無理ナノカネ?」

「ティアマトと感覚を同一していた時なら或いは可能だったかも知れないけど、だけどマスターをラフム化させたいのかい?」

「……それはダメですな。しかし」

「ハイハイ、皆様静粛に!異議はみとめまっせーん!というか、もうこの手段しかございません。様々検討して参りましたが、これが最後の方法なのですよ。はい。今日集まって貰ったのは、キアラさんを云々する為では無いのです。ええ、マスターを再生した後の事を今から話したいのですよ」

「……なるほどわかった。法的な処理、すなわちミス・キアラのお腹に宿ったマスターをマスターの子供として認知させ、さらにはマスターの資産等を引き継がせ、そしてこのカルデアで育成出来るようにしろ、というわけだね?」

ホームズはニヤリと笑いつつ、初歩的な推理だよ、とモリアーティ教授を見ながら

言った。そしてその後を継ぐようにモリアーティ教授が、
「書類偽造なら任せておきたまえ。なに、世の中には９０歳でも子供を女性に産ませたという『オールド・パー』という人物もいたぐらいだ。それにドクターパラケルスス。あなたの診断書にＤＮＡ鑑定も付け加えれば信憑性は格段に上がる」
と、言った。
まさかコナン・ドイルすらも予想しなかったであろう、ホームズとモリアーティ教授が手を組んで犯罪計画を共謀するとは。ワトソンもおそらく卒倒するであろう。
「……えーと、それは良いのかね?というかドクターロマーニは許さないんじゃないかな?さすがに彼もあの時ほどの力は無いとはいえ……」
「彼は今、マスターの後任となる次の所長の育成に掛かり切りになっている。法務上や事務的な手続きも今や若い職員達が行っている。それに彼は昔のように高精度での千里眼は使えない。さらに彼を欺瞞する為の人物はとっくにこのカルデアに到着しているんだよ」
ホームズはパイプを取り出して、やはりニヤリと笑った。というか本当に彼はホームズなのか?と思いたくなるが正真正銘のホームズである。
この共謀はホームズとモリアーティ教授の計算の解が同様であった為に起こった。
彼ら二人の解は、こうである。

『マスター亡きカルデアは後数十年も保たない』

最初はホームズもモリアーティ教授もどちらもそれは仕方ない。人の世では全てが移り変わるのだから、と納得しつつも諦めていたのだ。

だが、カルデアが無くなればもう人理の守護は困難になるだろう。何しろこの世界の人理を脅かすだろう事象はあのグランドオーダーの件で最後とは思えないからである。対抗出来る設備を再び作ろうにもそれこそ国家予算級の費用がかかり、さらに人員の育成だけでも途方もない。

その時にこのカルデアのマスターのような人物が出てくるとは思えなかった。

また、サーヴァント達がいなくなった後、様々な勢力によって政治的に、経済的に様々な思惑によって切り売りされたり、場合によっては悪用される危険性まであるのだ。

故の共謀、故の共闘である。

まぁ、彼らがやるのは公文書偽造、遺産相続詐欺、さらにマスターに浮気という汚名を被せるというとんでもない事なのだが、背に腹は代えられまい。

「……ドクターロマーニを騙せる人物、ですと?」

ジルドレがはて?と首を傾げた。そんな人物がこのカルデアにいただろうか?と。

「やぁ、僕だよ」

スルリ、胡散臭げな軽やかな笑みを浮かべてロクデナシ魔法使いがどこからともなく

現れた。

そう、マーリン。だいたいマーリン。大抵こういう事の裏にはマーリンである。

そうして、ベィビィマスター計画は進行していったのである。

マスター語り。キアラの胎の中。

気がつくと、私はなにやらピンク色の空間に浮かんでいた。
キアラの宝具に吸い込まれたのだが、Ｓｅ．Ｒａ．Ｐｈ．で戦った時や味方として来てくれた際に見たあの魔神柱が犇めくような空間では無く、本当にきれいで優しげなピンク色の空間だ。
視覚は少しぼやけて鮮明ではないがなんとか見える。最初は老眼のせいかとも思ったがそうではない。まるで目が退化したかのように視覚が鈍い。
また、この空間には空気が無く、液体で満たされている。身体の感覚はある程度きちんとあるようだ。
この液体を伝わって大きな心臓の拍動音も聞こえている。匂いは、少し。だが嗅覚も鈍い。いや、液体の中にいるせいなのか。
身体は動きにくい。いや、そもそも。
見れば私の手や足はかなり縮んでいる。いや、小さくなっているというべきか。
身体をなんとか見回し、腹にはチューブというのか、これはまるで臍の緒、いや、そのものが着いていた。

これは間違いようもなく、要するに。
私は胎児になっている。
目が覚めたら虫になっていたというのはなんかの小説であるが、目が覚めたらリアルで胎児になっていた。
ナニコレ?!
とか一瞬慌てたが、すぐに精神が不自然なほどに落ち着いて安定していく。慌てても焦っても、不自然な程な安堵感が無理矢理に私を包む。精神が沈静化してしまう。
それにも心を乱してしまうが、鎮静作用がかなりつよいのか、すーっと心が冷静になって行くのだ。
この空間は異常だ。
危機感すらも押さえ込んでしまうのだ。
おそらく、それはこの空間固有の作用なのだろう。結界か術かはわからないが、非常に強力な効果を持っているようだ。
おかげで冷静にものを考えることは出来るが、だからといって何が出来るというわけでもない。
なにしろ胎児になってしまっているのだ。
とはいえ、何故こうなってしまったのかは考えねばならないだろう。

そう、冷静に考えられるようになっているのは実に幸いだ。まずは考えないと何も始まるまい。

私は考えに集中する事にした。そして今まであったことを思い出し、ここがキアラの宝具による空間であると推測した。

なにしろキアラの例の胎蔵曼荼羅（ヘヴンズホール）に取り込まれたのだから、間違いあるまい。

だが、彼女の通常の業ではないのはもうわかっている。なにしろ吸い込まれたとはいえ、彼女の内宇宙と同化はしていないし吸収もされてはいないのだ。

それにここには魔神柱も無い。

なにより彼女は吸い込む際に、いつもとは全く違った場所から私を吸い込んだのだ。

そう、私は彼女の股間のアレなナニからアミデュられてしまった。

はぁ、抗うことすら出来ずキアラにアミデュられ、気がつけばこんな目にあうとは。

【※アミデュられる･キアラに吸い込まれる事、もしくは吸い込まれた、キアラの宝具が発動した結果（民明書房刊　殺生院キアラヌードグラビア『お曼荼羅・尼（アマ）ンデュー』より】

そう、がっぱーと開いたアレな場所からすっぽりとずっぽりとやられてしまった。

女体の神秘、というにはかなりえげつない攻撃（？）だったなぁ。というか妻以外の

女性のなんて見たことなかったけど、あれはやはり宝具の力なのだろうなぁ。
でも想像以上に……。
いやいやいや、いやいやいやいや、げふんげふんげふん。
液体の満ちたここでは咳払いは出来なかったが、脳内で咳払いした。
それについて語っちゃいけない。そう、なんかダメだ。こう、R指定とかX指定とかそういうものに抵触してしまう気がするからっ!!
私は見ちゃったアレを頭から追い出してまた思考を再開させた。このままでは話が止まっちゃうからね？
ただ、以外と綺麗な感じだったとは言っておこう!!←をい。
しかし、まさか胎児にさせられるとは思わなかったが、私が吸い込まれる際にマーリンが『十月十日後にまた会おう』とか言っていた。それはつまり妊娠から出産するまでの期間、いわゆる『十月十日』の事だと推測して、また溜め息を脳内で吐く。
今、何ヶ月目にあたるのか産婦人科的な知識をあまり持ち合わせていない私には検討はつかないが、つまりそれまでこの空間から出られないと言うことだ。
そして出たからといってもおそらくは赤ん坊の姿であり、そして赤ん坊の未発達で不自由な状態で身体の成長するまでいなければならないのであろう。
全く、死を待つばかりの老人がいきなり赤ん坊にまで戻ってしまうとは。

最悪の終わり方まで思考する事はできたがそれは如何にも最低な結末だろう。それは、この腹に繋がった臍の緒を引きちぎる事だ。そうすれば容易に私は死ぬこととなるだろう。

だが、自殺は御免だ。死を間近にしていた老人だったとは言え、死ぬのが怖くないわけはない。それに自殺なんて。

私は人一倍に生きることに努力してきた。そうでなければあのグランドオーダーを生き残ることは出来なかったし、しぶといからこそ１００まで生きたとも言えるのだ。生きてればなんとかなる。

そう考えると私は生き汚い人間なのだろうかなぁ。

うーむ、と悩んでしまう。なんともそれだけで自分が矮小で悪い人間のような気がしてきたぞ。

ああ、動けず考えてばかりだと自己嫌悪まで湧くものなのだなぁ。はぁ、すっげぇ落ち込むわー、落ち込むわー。

なんか気分が落ち込んで来た。つーか、だいたいカルデアにスカウトされなければ俺はただの三流の大卒のフリーターだったんだよなぁ。

あのまんまじゃ、うだつの上がらない普通以下の人だったもんなぁ。はぁ。

私は遥の昔、カルデアにスカウトされる前の自分を思い出し、落ち込んだ。

その落ち込みもこの空間の作用ですぐに薄らぐがなんというかこの作用は自己嫌悪にまではそんなに強くは働かないらしい。

はぁぁぁぁーっ。

『そのように自分を責めずとも宜しいのではないでしょうか？というか過度のストレスは生育に悪影響がありますので、その辺にしておいて下さいませ？』

唐突に、声が聞こえてきた。

『うぉっ?!この声は……キアラか？』

『驚かせてしまいましたか？そう、キアラで御座います。今、私は私とマスターを繋ぐ臍帯、つまりお臍の緒を通じて話かけております』

むぅ、やはりこれは臍の緒かよ。

『……なんでまたこんな事を？いや、なんとなくだが予想は付いてるけど』

『はい、予想通りかと思いますが、これはマスターの尽きかけた寿命を伸ばす為で御座いますわ。延命というよりは再生と申し上げた方が宜しいでしょうか』

やっぱり、と思った。まぁマーリンがそんな事を言っていたからわかってはいたけどな。

それに、死を受け入れようとは思っていたけど死にたかったわけではない。生きられるならそれに越したことはないのだ。

ただ何か問題とか世界に悪影響が起こったり特異点的な災害とかそんな事に繋がったら、とかは思うのだが。

つか、人理災害とか言われて世界を脅かす元凶とか認定されて新たなマスターに討ち滅ぼされるとか嫌だぞ？

『私を再生させて、問題はないのか？カルデアが特異点化するとか、世界に悪影響があるとか？』

『御座いませんわ？聖杯を使ったわけで無し、人類の未来を脅かすような事でも無し。宝具や魔術を使っておりますが、世界には何の影響も御座いませんわ。まぁパラレルワールドという点では未来は分岐はすると言う話ではありますけれど、それもとうに無数にパラレルワールドはございますし』

『……なら、良いけど。しかしずいぶんと強引というか力業というのかなぁ。胎児にまで退行させるとは。どうせならもう少し手前で、昔の青年期ぐらいで止めてくれれば良かったのに』

『それは私の宝具的に無理でございます。胎蔵曼荼羅、ですので。胎蔵とはつまりは胎（腹）に蔵（納）める、すなわち納めるのはやはり赤ちゃん、胎児でございますし？』

『ということはキアラの本来の宝具はそう考えると創生系って事なのか？』

『まぁ、このような使い方も出来る、というだけで使った事はこれが初めてです。うふふ

ふふ、でも意識がお戻りになってようございました。本当ならもう少し早く自我と記憶が戻るはずだったのですが……よほど私のお胎が心地良かったのですね、ずっと落ち着いて眠っておられたようで……』

　キアラはなんというか、いつもの優しげだが胡散臭い感じではなく、声の感じがいつもと何か違う。その何かはわからないが、いつもならば多少の警戒感が伴うのに、今は全く警戒感が湧かない。これもこの空間の作用なのか。

『はぁ……っ、女の幸せ、というものを実感しておりますわ。それも存分に。愛するマスターそのものを身ごもっているというのも、倒錯感があって良いものです。最初の悪阻の酷さもまた苦しみと喜びを伴って、ああ、私は妊娠したのだと感じ、大きくなっていくお腹をさすりながら、どんどんお腹の中で育っていく我が子を感じ……。はぁん……』

　いや、私の気のせいだった。胡散臭いどころではない。彼女はむしろ通常運転だった。つまり何でもいやらしく感じちゃうよおねぇさん（おばさんと言ったらどうなるかわかんない）だった。

　というか。

『え、？』

　そう、キアラの言葉で私はハタッと悟った。

私は今まで、ここは宝具的に別の宇宙的な空間で、そこで胎児にまで逆行させられていたと思っていた。だがキアラのその口振りだと、本当にここはキアラの……?!

『……うふふふふ、マスターは私の子宮を犯した初めてのお方ですわ』

『いや、犯したとか言うな人聞き悪いっ!!つか何それっ?!』

『人は我一人、と言っておりましたが、ああ我が子もまた人なりや。もう独りではないと思うと愛しくて嬉しくて、はぁん。御陰様でこれが母の悦楽、母の幸福にずっとずっと満ち足りておりますわ。ああ、マスターが私の赤ちゃん。うふふふふ、うふふふふふふ……』

なんてこったい!!

つまり、本当にキアラは私を妊娠したのだ。私を胎児にまで逆行して、自らの子宮で育成しているのだ!!

もう一度言う。

『なんてこったい!!』

叫ばずに居られなかった。そんな私にお構いなくキアラはスルーしてなおも続ける。いや、スルーしているとも思っていないのだろう、そう、彼女はそれがデフォなのだ。

『妊婦になってわかったのですが……』

『な、何を?』

『世の妊婦の皆様は、つまりは私は男性と交わっていやらしい事をいたしました、と見せびらかしているのも同然ですわよねぇ。公然猥褻、ですわよねぇ』

だーっ!!なんて事を言いやがるかなこの人はっ!!

『違うっ!!それは違うっ!!世の妊婦さん達に謝れっ!!てか、そんな目で見てはいけない!!もっと妊婦さんは崇高かつ尊ばれるべき存在だよ!!』

というかこの女の頭の中はどうなってんだ。いや、確かにそういう事をしなければ赤ちゃんは出来ないのは確かなんだが、それも大切な事で、けしてそんな目で見てはいけないんである。

『ええい、そのなんでもいやらしく思考するの禁止っ!!』

『うふふふ』

キアラはなんかやたらと上機嫌で笑った。少し雰囲気が変わったのを感じて、私はハテ?と思った。

『……なんか嬉しそうだな?』

『いえ、久しくマスターとこのようにお話も出来なかったので。それに口調が若返られましたわ。これで『私』ではなく『俺』でしたら、本当に昔のマスターですわ』

『あ～、まぁ、そういえば口調、戻ってるな。つか、キアラは私が伏せってからはギルガメッシュ達から面会を制限されてたんだっけか?』

『はい。ですがギルガメッシュも私がマスターに害意を持って接するということは考えておりません。あえて申しましたら、入り浸ってマスターに甘えてしまいそうになるから、と』
『……私に、か？』
『はい。こう見えて私はマスターの事をお慕いしてました。信じられないかも知れませんけれど』
『……そう、なのか？』
『はい。信じなくてもようございます。いえ、それは他のサーヴァント達も同様。本当にあなた様は不思議なお方でございますわ。どのように凶悪な者もいかに凶暴な者も、善悪男女関係無しに惹きつけて止みません。あなたの為なら、信条も何もかも投げ出して働きたくなる。本当に天性のマスターと言うべきお方』
『……そんなに大それた者じゃないよ、俺は』
　なにせカルデアに来てなかったらフリーターだったんだから。
『うふふ、大それておりますとも、マスター。お知りですか？あのパラケルススがあなたを生き長らえさせる為に生命の霊薬を精製しようとしていた事を。あの傲慢なギルガメッシュがエレシュキガルと交渉し不死の薬草を得ようとしたことを。殺人鬼メフィストフェレスも冷酷な犯罪界のナポレオン、モリアーティも。皆、あなた様と別れたく

ないと動いておりましたのを』

薄々は気づいていた。どれも無駄で徒労だった事も。

『……霊的なものも、延命出来るものも何も効かなくなってたからね。みんなには本当に悪かったと思ってるんだよ』

『いいえ？全ては勝手に皆さんやっていた事。マスターは気に病む必要はございません。ですので私もマスターには謝罪など致しません。そもそも私は欲望の為にマスターを生き長らえさせる悪い女なのですから』

キアラはわざとらしく自分を悪い女だと自重した。だが俺は否定出来ない。何しろ欲望の為に世界を滅ぼしかけて、その一歩手前までやらかした女だったからだ。

それにその欲望が如何なるものか、というのも気になる。私が再生して叶う欲望がどのようなものかわからない。そう、それいかんによっては私は死を選ばねばならないだろう。

世界の破滅が待っているならば、私は阻止せねばならない。世界を成り行きだが救った身として。

カルデアのグランドマスターとして。

『……俺を生き長らえさせても果たせるかどうかわからないぞ？それが昔にやろうとした人理災害みたいなものならなおさらな』

『いいえ?それよりも私は一度、母としての女の幸せというものを味わってみたいのです。生前はまったくそのような事もございませんでしたし?』

だがキアラはあっけらかんとそう言った。

え?女の幸せ?

『……えーと、それってつまり俺を産んで育てるって事か?』

『はい、その通りでございます。妊娠の悪阻はもう味わいました。あの時は辛くとも命が宿ったと胸が熱くなりましたわ。そう、お腹が膨らむにつれてお腹のマスターに母性愛がどんどん湧いて、言葉に出来ぬほど今、幸せを噛みしめております。ええ、そして次に待っているのは産みの苦しみ。陣痛から出産の痛み、産まれた時の感動、母乳を出す快感、吸われる喜び、成長する我が子を見て幸せに浸る。今からとても楽しみで仕方ありません、ああ、待ち遠しい!』

なんとっ?!

『……その、あー、俺、臍の緒切って自害してもいいか?なんつーか、未来の黒歴史が見えてきたから』

そう、キアラから産まれる俺とかキアラからおっぱいを吸わせてもらうとか、キアラからオムツを替えてもらうとか。

考えただけでとてつもなくイヤだった。つか母親がキアラってよくよく考えたらも

のすごいなんかこう、苦労どころではない十字架を背負って生きなければならない気がする。いや、絶対そうなる。

『無理、でございます。仮にもビーストの臍の緒でございます。その強度は魔神柱並みとお知りなさいませ？』

『……そんなもんから栄養もらって大丈夫なのか?!』

『……まぁ、魔力等、ある種人類最強クラスになるかも知れませんが問題はございませんわ？マスターはマスターですもの』

『いーやぁぁぁぁっ!!』

思いっきり絶叫し、それならばと臍の緒で首を吊ろうとかその後いろいろとやってみたが。

全くの無駄だった。

お釈迦様の掌の上、いや殺生院キアラの胎の中、俺は何も出来ずにすくすくと、魔人の赤ん坊としてどんどん育って行くしか出来なかった。

俺、人類の災いになっちまうのか?!

ペッパーボックス・ナイチンゲール

さて、時間はマスターがキアラのお腹の中で目覚める約8ヵ月ほど前に遡る。つまり、マスターがアミデュられたすぐ後、キアラに吸い込まれてその胎内に着床した直後のことである。

マスターの叫び声を聞いていち早くフローレンス・ナイチンゲールはマスターの部屋に到着した。

彼女はマスターの介護についての話があると言われてパラケルススに呼ばれ、そしてパラケルススが悪の計略に加担しているとも夢にも思わずに延々とその話を聞いていたのだが、しかし患者の声ならばたとえ数十キロ離れていても聞き取る地獄耳を持つ彼女である。

ナースコールなど鳴らずともマスターの叫び声を聞きつけマッハの速度で突っ走り、マスターの部屋へと向かう最中の他のサーヴァント達をバーサーカーのパゥワーで吹き飛ばし、ついでにマスターの部屋のドアもぶち破って到着したのである。

誠に彼女は看護士の鑑であろう。というよりナースオブザナース、看護士の母とも言われるフローレンス・ナイチンゲール女史にとってはそれは当然の事である。

そして、状況をいち早く見てマスターの姿がベッドから消えていること、そしてマーリンや他のサーヴァント、さらにはそこに殺生院キアラがいたことを確認すると、大声で「フリーズ!!」と叫ぶように言って、おそらくはこの事態の元凶であろうマーリンの額に彼女は凶悪な銃である『ペッパーボックス』を突きつけた。

病巣を確実に見抜く彼女である。その判断は概ね正しい。下手な医師などよりも確実的確、そして正確であった。まぁ、マーリンがいたならば悪いのはマーリンであるのは誰の目にも明らかだとカルデアの英霊達は大抵思っているわけなのだが。

さて、彼女の持つ『ペッパーボックス』はリヴォルヴァー式の拳銃の前身のような銃であり、その銃身はリヴォルヴァー式のシリンダーをそのまま伸ばしたような、前から見ればレンコンの断面図のような形をしている。またその形状から胡椒を挽くミルに似ているためにその名がある。

この銃の凶悪なところはその銃の弾の口径でも威力でも無い。彼女が『治療』をしている場面を見た事がある方ならわかると思うが、彼女はこの銃を高速で連射している。だが、本来このペッパーボックスは構造上あのように連射出来る銃ではない。単発式なのである。

しかしこの型の拳銃には構造上の欠陥があった。

その欠陥とは、一発撃ったらその火薬の火が他の弾倉に飛び火して暴発しかねないと

いうものである。
　幸いな事にリヴォルヴァー式とは違い、弾倉と銃身が一体となった多銃身であり、暴発しても銃が吹き飛んだりせず弾が一度に全部飛んでいくだけなのである。
　そう、あのチュチュチュチュチューン!!とぶちかまされ速射される銃弾の正体はチェーンファイアと呼ばれる暴発であり、彼女はワザとチェーンファイアさせて敵……いや、『病巣』にぶちかまし早く的確に『施術』しているのである。もしくは『殺菌』とも言うが。
　なんともバーサーカーらしいというか、彼女がバーサーカーである由縁というのかバーサーカーだからそうなってるというのか。
　そんな危険な『治療道具』を突きつけられてはさしものマーリンとは言えたまらない。両手を上げて「待ちたまえ、話を聞きたまえ!!」と言うしか出来はしない。
　だが、彼女はぐっと『ペッパーボックス』をマーリンの額に押し付け、冷ややかに言った。
「マスターをどこへやったのです?雑菌、いえ癌細胞」
　ナイチンゲールは冷静に冷徹に怒りを込めて、あの伝説の魔術師を癌細胞呼ばわりした。
　ある意味正しいようにも思えるが、彼の起こして来た散々な災いにもかのアーサー王、いやアルトリア・ペントラゴンですら何も言えなかったというのに、彼女はお構い

なしである。
「いや、雑菌って酷くないか?!というか癌っ?!」
無駄口を開くなとばかりに銃身をぐりっ。
ナイチンゲールは非情に冷酷に絶対零度の眼差しで銃口を押し付け、さらに左手でもう一丁ペッパーボックスを素早く、しかし静かに取り出すとマーリンのこめかみにもそれを押しつけた。
「雑菌は殺菌・滅菌せねばなりませんがー、しかしマスターはどこですか?」
『菌』であると認定したならば如何なるものでも彼女にとっては排除対象である。それをしないのは肝心のマスターの行方がわからないからだけなのである。
「だからマスター君を死なせないために僕は来たんだよ、本当だ!これはあんまりじゃないか?!」
「だとしても、マスターのお姿がありません。マスターはどこですか?」
ぐりぐりぐり。
「待ちなさい、フローレンス女史、それは私が説明しましょう!」
と、彼女を追いかけてやっとこさ来たパラケルススが息を切らせながら慌てて彼女にそう言ったが。
ヂャキッ!

パラケルススにも、凶銃が向けられた。
迷いなく、パパパパパパン!!一斉に暴発する『ペッパーボックス』。
「ひぃいっ?!」
いち早く入り口から壁に引っ込んだが、それが遅れていたならばパラケルススは蜂の巣になっていただろう。
医者に対してですらこうである。そこに痺れるあこがれる!!だがナイチンゲールのいる病院には入院したくない!!
「こ、ここは野戦病院じゃありませんよ!?というかなんて事するんです?!」
「意味のない介護カンファレンスで私を引き止めて、何を企んでいたのですか？マスターをどこにやったのです、ドクターパラケルスス!!」
マーリンを素早く銃のグリップでぶん殴って物理的に気絶（スタン）させると、ずか、ずか、ずか、と下手って座り込んでしまったパラケルススの元に歩いて行き、その首根っこを掴んでナイチンゲールは吊し上げた。
「ぐっ、マスターはそこに、ほら、キアラのお腹の中です……。もう一度、赤子として彼を再生させるという方法で寿命を一気に長らえさせるという処置をですね……」
「……」
ナイチンゲールはキアラの方を見ると、パラケルススを掴む手を離した。

「……マスターが、あなたのお腹に？」
キアラはナイチンゲールの冷たい視線にも動じず笑って頷き
「ええ、マスターは確かにこの私のお腹の中に。今、私の術式で無事着床した所です」
と、その腹を愛おしそうに撫でさすった。
「……なるほど。確かにマスターが殺害されたり亡くなったならば我々も存在出来ず英霊の座に還らざるを得ないですから確かに。冷静になれば生きているのは確かですね。とはいえ、マスターを赤子としたとして、その人格は？記憶は？一体どうなるのですか？」
「と、いうかそれは僕も聞きたいね。何か久々にすごい騒ぎが起こっているなと来てみたら、これはどういう事だい？」
入り口から白衣を来たドクターロマニが入って来て少し間延びしつつもやや緊張感ある声で言った。
ドクターロマニは現在はサーヴァントになっている。それもかなりの強さのサーヴァントであり、その正体を隠しながら昔同様にこのカルデアの医療責任者兼所長代理を勤めている。
なお、現在の彼は名をロマニ・アーキマン三世と名乗っており、戸籍上はロマニ・アーキマンの孫という事になっている。これは老いることの無いサーヴァントの彼が人間

のカルデア職員達に自分がサーヴァントである事を隠すためである。
非常に面倒だと本人は思っているが、正体を知られるわけにはいかないので仕方なくそうしているのである。
もっとも、カルデアの英霊達はその正体を皆知っていた。
「ソロモン……！」
そう、このドクターロマンの正体はソロモン王である。彼の本体は消滅したが、こうしてサーヴァントとして顕現し、またカルデアで働いているのである。
とはいえ、昔のままのソロモンではない。サーヴァントとしてのソロモンは英霊としての存在も何もかも消滅させてしまった。
だが彼は約１０年の間、聖杯に願って人間となっていた。その期間、彼の存在は当時の世界の記憶に刻まれていた。
今の彼はそのロマニ・アーキマンという存在のイフ、つまりは世界の可能性によって残された、ロマニ・アーキマンになったソロモンという立ち位置で顕現した英霊である。
なにが厄介かと言えば、限定的だがソロモン王の力を使える点である。何しろ消滅した指輪も全て彼の手に戻ってしまっているのだから。
さらに性格は全くのドクターロマンである。ダ・ヴィンチちゃんに『うわぁ……』と眉をひそめて白い目で見られたぐらいなのである。

「イヤだなぁ、ロマンって呼んでくれよ。というかだいたい見れば分かっちゃったけど……。なるほどそこに気絶しているヒキコのロクデナシ魔術師の差し金かぁ」

気絶しているマーリンを見据えて、はぁーっと溜め息を吐く。

「で、どうなの。まぁ、マーリンの事だからかなり前から企んでたんだろうけど。その術式だと、マスターの記憶や人格は保たれるんだよね？」

キアラは頷いた。

「もちろんでございます。ただ、赤子として再生するだけでマスターはマスターのままでございます。ただ私の中に宿った際に多少、いろいろと強化されてしまう所もありますが人の範疇からは逸脱はいたしませんわ」

「……君の言う『人』って言うのがとても気になる所だけど、君はあの『マスター君』が好きだったからね。変質変容した『マスター君』を望んでいないだろうから、その辺は……まぁ、大丈夫かな」

ロマンはあっけらかんとして楽観的に言った。キアラという女は善性を誰なのかわからないが何者かにより消去されてしまっていた。マスターと接した年月の間にかなり取り戻しているようだが、そのせいなのか元々なのか『人は我一人』という思想を持ち、他の人間は『塵芥である』と思っていたらしい。いや、今でもそう思っているのかも知れない辺りがやたらと物騒ではあるのだ。

「無論、皆様『人』でございます。私とてアルターエゴとして顕現した身。その辺はわきまえてございますわ？」

どうやらサーヴァントになったから多少は思想が変化したらしい。

「精神等に変化は起きないように慎重に子宮の状態は調整しております。それに流産やその他から守る術式やストレス回避の為の精神安定の術式等も完備しておりますわ」

「……では、マスターは死ななくても良い、そう判断していいのでしょうか？」

ナイチンゲールはいつの間にか銃をしまってキアラの股間をじーっと見ていた。

「はい、細胞レベルで若返る事になりますので、また上手く行けば１００年は生きるかと……」

ナイチンゲールはふむ、と頷くと何やらポシェットから取り出すと、キアラに渡した。

「妊娠検査薬です。まだ出ないかも知れませんが何個か後で用意しておきますので。あと、胎内の状態の検査等をしなければなりません。あなたの食事等の栄養チェック、体調管理も今日から始めましょう。とりあえず……」

ナイチンゲールはまくしたてるようにそう言いつつ、キアラに向かって手を差し伸べた。

「床に座ったままでは、腰が冷えます。早く立ちなさい。あと、パンツも履いて、服も露出の無いきちんとしたものに着替えなさい」

相手が妊娠したと解るや否や、テキパキ。婦長さんはやはり婦長さんなのである。
そうして、キアラはナイチンゲール主導の元、手厚く妊婦として扱われる事となったのである。
なお、医者達ガン無視である。
ちなみにアンデルセンとシェイクスピアはとっくに逃げて自分達の部屋に退散していた。
後に元三女神同盟な三柱やマスター大好きママ第一号さん、清姫さん、その他女性サーヴァントの皆様による制裁が下ったようであるが、その後の彼らがどうなったのかは誰も知らない。

女性サーヴァントの怒りと黄金の王と太陽の王。

さて、プロローグで大活躍だったメフィストフェレスは、現在、主に怒り狂った女性サーヴァント達から猛烈なお仕置きを受けている最中である。

すでにキアラをマスターの寝室に面会に行く片棒を担いでいたアンデルセンとシェイクスピアを血祭りに上げた女性サーヴァント達は次の標的としてメフィストフェレスに狙いを定めたのである。

なお、パラケルススはとっくにナイチンゲールによる制裁を受けていたのでまだマシであったり、ホームズやモリアーティ教授は『法的な手続きをせねば赤ん坊になったマスターが孤児になり、そして無一文な状態から生きねばならなくなっていた』事を免罪符に女性サーヴァント達の怒りから逃れ、キャスターのジル・ド・レェはそんなに関わっておらず、やはり免れた。

なお、マーリンはいつの間にかアヴァロンに逃げ帰っており、おそらく再びカルデアに現れたときに執念深い女性サーヴァント達にやられてしまうだろうと思われる。もしくはのらりくらりとかわすかも知れないが。

今、メフィストフェレスはカルデアの屋上の電波塔から鎖で逆さ吊りにされる真っ最

中である。
なお、メフィストを縛っている鎖はエルキドゥの鎖であり、彼はキャスターの方のギルガメッシュとお茶をしている最中に怒り狂ったエレシュキガルに連れ出され、そして女性陣に無理矢理協力させられていた。
友が連れ出され、何事かとキャスターのギルガメッシュも屋上までやってきていたりするが、尊大かつほとんどの物事を見通す彼であっても今回の騒ぎはわけが解らなかった。女心というものは、古代の賢王にも解らないようである。
そうして見ているとイシュタルが何事か喚き、エレシュキガルが何故か物干し竿でメフィストフェレスの尻をぶったたいた。
乾いた音がバシーン！バシーン！と聞こえるが、とても痛そうである。
だが、本気で命は取る気はないようである。まぁ英霊なので肉体が消滅しても英霊の座に還るだけなのだが、痛めつけるだけに留めている。
「ふぅむイシュタルめとエレシュキガルがあのように協力するとは、いったい何が起こったのだ？」
彼には珍しくわけがわからない、と首を傾げつつエルキドゥに事の顛末を聞いた。
「マスターが、復活するとか言ってたよ。だけど何故彼女達があんなに怒って彼を叩いてるのかはわからないな」

「死を免れたと？だがそれであるならエレシュキガルが怒るのはまだわかるが、イシュタルめが何故、犬猿の仲のエレシュキガルと共にあの自称悪魔をシバいているのだ？それに他の連中も」

エレシュキガルは、はぁはぁと肩で息をし、気が済んだのか持っていた物干し竿をイシュタルに手渡した。

イシュタルもまたバシーン！バシーン！とぶったたき、そして何発か叩いてまた別のサーヴァント、別のサーヴァントと物干し竿を渡してまたぶったたいて、を繰り返している。

どれも怒り心頭のようだが、何故か殺さぬようにしている辺りも非常に変であった。いたぶると言うわけでは無く手加減を心掛けているというのか。

「あ、物干し竿が壊れたね」

「……うむ、ああ清姫があの悪魔の尻に火を付けたな。あれは辛かろう」

他人事のように、とはいえ実際に他人で自分に類が及ばないので何の感情も込めずギルガメッシュはそう言うと、はぁーっ、と溜め息を吐いた。

「下らん。興も乗らん」

「うん、そうだね。とりあえずは戻ろうか？」

ギルガメッシュとエルキドゥはやれやれ、とこの場を退散する事にした。

「ひゃあああ、ひゃあああ、もう止めて下さいまし!!らむぇぇぇっ!!もうらめでごじゃいまひゅううううっ!!オケツバーニングぅぅぅっ!!」
　メフィストフェレスのテラ子安ボイスの悲鳴が甲高く中、屋上の出入り口へと二人が向かおうとした時。
「ええい、不快な!!その声で叫ぶな!!」
　バン!!と屋上のドアを乱暴に開け放ち、メフィストフェレスと同質の声の持ち主が現れた。
　オジマンディアスである。
　彼もまた、テラ子安であるがゆえにどうもメフィストフェレスが気に入らないようだ。
「というかニトクリス!!」
「はい！」
　彼は後ろを着いてきていたニトクリスに命じた。つまりは黙らせろ、ということだろう。
「えーっと、では！」
　彼女は素早く大きな布袋のようなものを取り出すとそれを被り、そして宝具を展開させた。

「穢れを漱げ、青く美しきナイル（スネフェル・イオテル・ナイル）!!ほーらさっぱーん!!」

大量の水がどっぱーんと注ぎ込まれ、メフィストフェレスの尻に着いた火が鎮火した。そして怒り狂った女性サーヴァント達の身にも水がぶっかかった。

「うわぁぁっ?!」「どひゃーっ?!」「ぎゃーーっ!?」「どへぇぇーっ!!」

などと叫び声が上がる。

なお、ギルガメッシュとエルキドゥは素早く空に待避していたので被害を受けなかったが。

「ええい、そうではない!!……いや、まぁ騒ぎは納まったか。これはこれで良い……のか?」

「はぁ、鎮火しろ、という事ではありませんでしたか?」

彼女は火が燃えていたので消せ、と命じられたと勘違いしたようである。やはりどこか抜けているがそれは彼女の常なので仕方は無い。

「まぁ、良い。結果として黙らせる事には成功したのだ。というか、黄金の（ギルガメッシュ王）。この騒ぎはなんなのだ?!」

「うむ、太陽の（オジマンディアス王）。それが我にも全く解らぬ。どうもエルキドゥが言うことにはマスターが復活するとかなんとか」

「復活？ファラオでもあるまいに。まぁ良い、今ならばそこな半裸弓乗り貧乳女神達が丁度ニトクリスの宝具を食らって伸びておる。話を聞くことにしようではないか」
　オジマンディアスはニトクリスの出した宝具の攻撃を食らって伸びたイシュタルを介抱して話を聞くようにニトクリスに言った。
　まぁ本気の攻撃では無かったのでイシュタルはすぐに元に戻った。
「ううう、この真冬のくそ寒い時に、水をぶっかけるなんてっ!!」
「建物の上で火を使った罰です！火事になったらどうするのですか！」
「いや、ニトクリス、そうではない。……この騒ぎはなんなのだ？この黄金の（ギルガメッシュ）がマスターの復活とか申していたが？」
「……マスターの延命は行われたわ」
「ふむ？ならばそれが失敗したので騒いでいたというのか？」
「成功よ。だけど、寄りによって、あんな方法っ、しかもあんな奴が法律的に後妻?!コイツらの企みのせいでっ!!」
　イシュタルはもう、怒髪天を突くが如くにまた怒りだし、全てをぶっちゃけて言った。
　そりゃあそうだろう。かつてカルデアのマスターが妻としたのはマシュ・キリエライトであったのだが、彼女だからと他の女性サーヴァント達はその結婚を許したのである。

マシュは全てのサーヴァント達からやはり愛されていたし、そして二人は堅い絆で結ばれていたことも誰からも認められていたのだ。

何より、女性サーヴァント達は彼女を無二の親友とばかりに思っていた。

だが、今回のマスターの再生復活の方法と、そしてそれに必要な悪質とも言える法的な偽造ねつ造は彼女達にとって到底許せるものでは無かったのである。

なにしろ、殺生院キアラを母胎としてマスターを赤ん坊にまで戻し、さらにマスター本人であるとはいえ、その赤ん坊をマスターの子供である事を認めさせやすいように、殺生院キアラとの婚姻届を偽造して届け出、さらにマスターが書いた遺言状を破棄して、これまた偽造した遺言状に『キアラの腹の子供は自分の子供であり、自分の遺産、権利の全てをその子供に譲渡する』と書いて受理させたのである。

マスターを慕いマシュを友とした女英霊達は、二人の愛や友情を汚されたと思い、怒っているのである。

だが、マスターの命を伸ばす方法がこれしか無いというのも理解している。ホームズやモリアーティ教授が言った通り、生まれて来るマスター本人を露頭に迷わすわけにもいかないのも。

だが、この怒りは納めようが無かったのである。

故のこの集団リンチなのである。

「……なんとも、まぁ」
ニトクリスは口をあんぐりと開けて絶句した。
オジマンディアスは非常に詰まらん！という顔をした。
ギルガメッシュは「ふむ、なるほどな」と何か合点が行ったようだった。
エルキドゥは無表情だったが、友の態度が理解出来なかったようであり、ギルガメッシュに「なにが、なるほど、なんだい？」と聞いた。
「なに、未来を見たのだが、あのマスターが赤ん坊になっていた。我はいつか転生するのだな、とばかりに思っていたのだが……。転生ではなく今回の事であったか。なるほどしたりしたり」
「はぁ、ギルガメッシュ王がそのような未来を見られていたということは、マスターはまだまだ死なない、ということですね。それは良い事ではありますが」
「ふん！それでは我らがあそこに築いたピラミッドが全くの無駄ではないか!!無駄無駄無駄無駄ぁっ!!」
杖の先で指した方角には、ずどぉぉぉん！と雪山には全くそぐわないピラミッドが。
「魔力をかなり使ってせっかく作ったのですが、仕方ありません、オジマンディアス王」
「……ふん、詰まらん。部屋に帰るぞニトクリス」
「……ふふっ、わかりました。ではギルガメッシュ王、エルキドゥ。それではまた」

エジプトのファラオと女王コンビはまた屋上の出入り口から去って行った。
「……二人とも嬉しそうだったね？」
「うむ、しかしなんともひねくれておったな。太陽の（オジマンディアス王）は」
自分の事を棚に上げて、とか言いたくなったがエルキドゥはそれを言わず。
「女性サーヴァント達には少し悪いけど、僕は嬉しいよ。どんな風でも生きて付き合っていけるのなら、そんな嬉しい事はないから。君はどうだい？ギルガメッシュ」
「む？我か。我は……。悪い気はしないがな」
ギルガメッシュはニヤリと笑った。そして、イシュタルに向かって言った。
「奴の名誉も人の名誉よ。だが我ぞ知る。お前も知る。余人が如何に言おうが、我は奴を知る者。女神たるお前が知る、奴はいかなる者か？だ！とはいえお調子者の慌て者の粗忽者のお前が起こす騒ぎはいつも通りだな！」
「ぐっ、言わせておけばっ!!……いや、あんたの言うとおりね。アイツは……。ずっとマシュを愛して他の女には目もくれなかった。マシュが逝ってからもね。私達が怒る事は無いのよね」
「ほう？しおらしいでは無いか。……いや、その通りなのだ。まぁ、そこで伸びているエレシュキガルの怒りは、もっと複雑か。死んだ後も自分の冥界に奴を繋ぎ、一人勝ちするつもりであったのだろうからな」

「……それを考えたら、アイツが赤ん坊になったのも悪く無い、というかグッジョブじゃない!!コイツの野望を阻止出来ただけ良かったってこと?!」
「あー、我は知らん。というか我も部屋に戻る。詰まらん余興であった。ふう、茶を飲み直そう。エルキドゥ、戻るぞ」
「うん、そうだね」
ギルガメッシュとエルキドゥはあーつまらぬなどと言いながらも足取り軽やかに帰って行った。
とはいえ。
「あのー、私このままですかぁ？つか、誰か鎖外して、ってかエルキドゥさんが解いてくんなきゃ、ずっとこのままなんですけどぉ?!ひひぇっ」
哀れなりメフィストフェレス。女性サーヴァント達はイシュタルが話をしてなんとか納まり、そして各々部屋に帰って行ったが。
彼がその鎖から解かれたのは二日間後であったという。
合掌。

お葬式。

カルデアのマスターが逝った。

その報はカルデア内だけではなく、様々な提携していた魔導組織や魔術師協会、聖堂教会等の様々な組織、魔術師の名門の各家々にもたらされた。

葬儀はカルデアで行われたが、現在のカルデアの状態に葬儀に参列した他の組織の代表者達を非常に困惑させた。

まず、カルデアの敷地にある様々な建造物群のその異様さが問題であった。

いや、カルデア本部そのものは昔から変化はなく問題はない。問題はカルデア本部の周囲にある様々に増えた建造物が異様であったのだ。

まず、どう見てもカルデアの門はキャメロット城。カルデアの敷地をぐるりと高くそびえ立つ城壁に取り囲まれている。

これはマーリンの仕業である。

マスターとマシュの結婚式の時に引き出物として、どうやったのかは解らないが目の前でずっどぉぉぉん!!とぶっ建てやがった。

どこの城塞都市だよ?!

それを見た他のサーヴァント達がああ、それなら私も俺も我もと競うように様々な建造物を勝手に建てて行った結果が今のカルデア周辺であったりする。
神社、寺、天守閣、神殿、モスク、教会、大劇場、砦、ピラミッドと、ありとあらゆるものが、サーヴァント達の能力やら術やら財力やらで造られて行ったのである。
カオス！あまりにもカオス!!
他国的に奇妙な共存がカルデアにおいては成されているようである。
さらに最近になって山頂にそびえ立つピラミッドの隣に新たに建造された。オジマンディアスの大ピラミッドよりもやや小さめのピラミッドが。
それがマスターの墳墓である。
おそらくはそんな大それた物を作ってしまう辺りオジマンディアスはわりかしマスターを気に入っているという事なのだろうが、しかし作られた本人が嬉しいかどうかは不明である。
また、オジマンディアスがマスター用のピラミッドを造っているのを見た者達も触発され、マスターの像や石碑やらをやたらと敷地内に建てたりしている。
正直、なんじゃこりゃああああああっ!!である。
それを目撃した葬儀の参列者達は、その荘厳さとか芸術的な価値とかではなく。
どんだけ成金主義なんだよ、とか。どんだけ自分大好きなんだよ、とか。普通はそん

な事を考えるよね？というかだいたいはそう思っちゃうもんであり、概ねそうだった。
なお、一番の目玉はダ・ヴィンチちゃん作『若き日のグランドマスターと愛妻マシュの図』。
玄関に飾られてます。
……やーめーてー。
まぁ、それはさておき。
葬式なんである。
葬儀は故人であるマスターの遺言に乗っ取り、日本式で行われる事になった。すなわち仏式（フランスの仏ではなく仏教の仏である。念の為）である。
これには葬儀に集まった魔術師達をかなり戸惑わせたが、珍しいというほどのことはない。魔術師達は西洋の者達が大半であり、仏式の葬式の礼儀とかそういったものを知っている者などあまり居なかったが事前にそのように伝えられていたので、皆、キチンと調べた上で来ている。
内心、マスターは少し舌打ちをした。
『……うーむ、もっと嫌ゲな事を仕掛けといても良かったかも知れん』
今、マスターはキアラの視点で外を見ている。もちろん臍の緒を通じてである。
なお、キアラが座っているのは家族席である。その隣には何故か頼光が座っていたり

するが、どうして頼光が家族席なのかと言えば、皆さんおわかりの通り『元祖ママ』だからである（私がマスターの母ですもの、と言って一歩も引かなかった為）。

また、ナイチンゲールがそのすぐ隣に座っているのは『母胎』に何かあってはいけないという理由であり、さらにナイチンゲールの隣にはドクターロマニ（ソロモン）、パラケルススが付いている。

『……嫌がらせにもなってませんわ』

何故、仏式で葬儀をやることが嫌がらせなのかと言えば。

『……主に聖堂教会の連中に対する嫌味のつもりだったんだ』

聖堂教会の人達に対してこのグランドマスターには反発心があった。その他の組織に対してもあるにはあったが、第一次グランドオーダーの後に散々カマされ、一時はこのカルデアが崩壊、そして破棄するという事態になったのである。

二期のネタバレとかはするつもりはないが、あの皇女ってのもロシアで皇女ってのはどうせアナ……げふんげふん。

あん時の恨みは忘れてねーからなぁっ!!つかダ・ヴィンチちゃんの乳が減ったのはてめーらのせいだからなぁっ!!

とはいえ当時からすでに数十年が経っている。

何度も何度も人類の歴史を取り戻す戦いを繰り返し繰り返し。

気づいたら当時の者は一人として残ってはいないという感じだ。マスターが長生きをしている間に皆さん寿命やら事故やらでとっくにお亡くなりになっている。

『ま、どうでも良いと言えばどうでもいいんだけどな』

壇上では玄奘三蔵ちゃんが張り切って木魚や御鈴などの鳴り物を叩き、お経を詠んでいる。

「ガテガテパラスァニガテ、ガテガテパラスァニガテ、ボシソゥアカ……」

インドの天竺の直輸入なネイティブ般若心経である。発音がもう日本のそれではない。しかも唄うような読経である。

『原典の般若心経で御座いますわね、これ』

「バーディサットゥアーイェールォウ……♪」

『……鳴り物も駆使してなんか民族音楽のライヴみたいだよな、これ』

お経には思えない、美しい唱和である。

『意味を違えず直接に詠唱するという事では原典が至高と言えますので、宜しいのでは無いかと。それに三蔵法師は英霊になるほどの功徳を積んだ高僧ですもの、これは有り得ない程に素晴らしいお葬式では無いかと思われますわ』

そういえばあまりそんな感じはしなかったが、キアラもそういえば尼さんだったのをマスターは思い出した。そう、仏教系のサーヴァントだったっけ？

宗派はアレな密教系だけど。

『まぁ、偽装葬式で無きゃ有り得ないほど豪華な葬式だろうけど……。絶対に何でサーヴァントが退去してないんだとか怪しまれるぞ、これ』

そう、高位の魔術師ならば壇上でお経を唱えている三蔵ちゃんがサーヴァントであるというのはすぐに見破るだろう。

『それについてもダ・ヴィンチさんがもう事前に説明して下さいましたので、一応は大丈夫かと。それに他のサーヴァント達はソロモンの結界の中に隠れております。大丈夫……だと思います、多分』

多分、というのがものすごく不安である。

ダ・ヴィンチちゃんが関係組織に対してした説明を簡単に言うと。

『マスターが居なくても私のように存在しているサーヴァントも居るのだから、特に不思議な現象ではない』

である。

これはかなりの詭弁ではある。

それにサーヴァントである殺生院キアラが妊娠したという前代未聞の事件に関しても。

『古今東西、亡霊が子供を産み育てた話は世界中にあり、言わんや英霊も出来るときは出

来る!!』

と言う説明がなされた。

はっきり言って詭弁ですらなく、勢いだけで押し切ったようなもんである。

（無理がありすぎなんだよなぁ、ホント）

『というか何アレ。なんかノブナガちゃんが滅茶苦茶派手な衣装着てスタンバってるんだが。しかもその後ろで茶々もワクワクしてるし。あれ絶対に焼香ぶちまける気満々だよなぁ』

『……織田信長の例のアレで御座いますか。はぁ、結界から出るなと言われていたというのに、仕方の無い方で御座いますねぇ』

と、見れば後ろからキングハサンがすぅっと顕れ、ノブナガちゃんを後ろから掴み、首は斬らなかったがどこかへ連れて行った。また、茶々は百貌さんが大勢で担ぎ上げて連れ去っていった。

『あ、連れてかれた』

幸い、ノブナガちゃんや茶々達は葬儀の参列者達にはバレなかったようだ。

『本当、ハサンさん達はいい仕事をいたしますわねぇ』

呪腕さんがぺこりとこちらにだけ分かるように頭を下げて、すっと消えた。流石、カルデア一の良識人と言われるだけはある。

まぁ、周りでぐだぐだした何かはいろいろあったが読経が終わった。
なんかかなり長かったように思うが、三蔵ちゃんは般若心経だけではなくいろいろと有り難いお経の数々を続けて読んでいたようだ。
原典のお経だからわけわかんなかったが、日本で読まれるお経も本職のお坊さんでもなければわけわからないものである。
まぁ、葬儀というものは当事者やその家族、そしてかなり親しい者達以外にはとても退屈なものである。
特に本人にとっては。
死んでいないわ、お腹の中で、キアラの視点で見ているとは言え、いや、だからこそなのかも知れない。
つつがなく式は順調に終わり、そして遺体は荼毘に伏される事となった。
荼毘というのは荼吉尼天の事であるとされる。元はダーキニというインドの女神であるカーリー神の侍女であったとされる女神だとか。ダーキニは死と炎を司るという。故に荼毘に伏す、つまりは火葬を意味する言葉としてそう言うのだ、とキアラはマスターに語った。
そう言えばキアラは密教立川流の流れをくむ存在だった、とマスターは思い出した。密教立川流の本尊は荼吉尼天である。なるほど、詳しいはずだと納得する。

『ああ、俺的なものが焼かれて行くなぁ。まぁ俺じゃないけど』

葬儀に使われた遺体……の、ようなものは、医療用に作られたマスターのクローンである。

マスターが何らかの病気や事故などで身体を欠損したり臓器の移植などを必要としたときのためにパラケルススがホムンクルス精製技術を応用して作ったもので、今まで全くその用途に使われる事が無く保存されていたものである。

初めて見たときははっきり言って気味が悪かったが、そのクローンは役目を終えたと言える。

脳も無く魂も無い移植用の臓器や器官を生かすだけの肉塊だったものが、焼かれて逝く。

『……今までありがとうな。本当に』

自分の細胞で造られたものだが、なんというか悲しみすら感じてマスターはそう言った。

お骨は普通の墓に入れられる事になっている。

オジマンディアスの創ったピラミッドではなく。

クローンを入れるなど以ての外!!とオジマンディアスとニトクリスが拒否したからだ。

まぁ、何にせよ。
これで葬儀はお終い。
この後は、自分は自分の子供としての生を生きねばならないのか、とマスターは思い、なんとも言えない気持ちになって、またため息を一つ吐いた。

メフィストフェレスに関する考察。

さて。

メフィストフェレスの正体は謎に包まれている。

これは誰もあまり掘り下げて考えたり調査したりしていないような事であるし、第一調査しようにも肝心なメフィストフェレスに聞いてもまともに答えないし、彼に関する文献もあまりなく（ゲーテのファウストぐらいである）、正直彼が何故サーヴァントになれたのかも分からないぐらいである。

確かにゲーテのファウストは有名であり、悪魔メフィストフェレスの名前もまた有名なのではあるが、もし彼が本当に悪魔であったならばダウンサイジングされての英霊化ということになる。

しかし彼がダウンサイジングされた悪魔や神格だという形跡は無い。また出典が『ファウスト』のみかつ現実的に悪魔として魔術師や錬金術師達に召喚されたという記述も文献も全く無く、そして悪魔の種別を記した研究書等にもその名前は無い。

そして彼が悪魔でないと言える証拠たるものは、ダウンサイジングされて召喚されたどの神々の英霊達もが口を揃えて『そのような悪魔の存在は知らない』と語っているこ

とである。
つまり彼は悪魔を語る何者かの英霊である可能性が非常に高い。
ただ、それだと余計にその正体は誰なのだ？という謎が出てくるのである。
ゲーテのファウストに置ける彼の立ち位置は、錬金術師であるファウストにこの世の享楽を味わわせ、堕落させてその魂を奪わんとして、最後にはその魂をまんまと天国に掠め取られる間抜けな悪魔という役柄である。
また道化師の印象も強く、実際英霊の彼もそのような感じではある。
自己顕示欲が強く嘯くばかりの嫌われ者。おどけにおどけ、人を煙に巻く。だが狡猾、残忍、非情。しかし憎めないトリックスター。
それが彼、メフィストフェレスである。
さて。
ここからがネタ晴らしになるが、彼はその正体をかつてマスターに見せている。
小規模な異変とも夢ともつかぬが、彼は確かにあのロンドンで。
それによれば、彼をこの世に産みだしたのは、誰でもないファウストその人であった。
ファウストは彼曰わく『つまらない』『才能も無い』錬金術師であった。
おそらくはそのファウストを殺害した知性を与えられたホムンクルスないしは人造人間、もしくはオートマタ、いや、それらを合わせた全く類のない存在か。そういう造

られたものだったとすれば彼が『ゲーテのファウスト』以外の文献に出てこないのも頷ける。

ホームズはそのように考え、自分で淹れた紅茶を啜る。

テーブルの上、ホームズが座る対面側にはホームズの紅茶以外にもう一つカップが乗せられている。

「……人の事を探るのは、あまりに良い趣味ではありませんよ?ディテクティブ・ホームズ」

「……ふむ、やはり来たかね、メフィストフェレス」

ホームズは先ほどまで書いていたノートを閉じると、声の主の方を向いた。

「ええ、ええ、あなたは私に来て欲しかった。故にそれに応えないのは悪魔として道化、エンターティナーとしてどうかと思いまして。くひっ、くひひっ」

奇妙な笑い声を上げて首を傾げつつ、メフィストフェレスはホームズに無言で促されてテーブルに座った。

テーブルの上のもう一つのカップは、つまりメフィストフェレスが来ることを予期して、いや推理してホームズが用意していたものだったのだ。

しかも湯気からして来るだろう時間までも推理していたところにホームズの推測と推理の確実さがわかるだろう。

「まぁ、そうだろうとも。君とはここに来て望む望まざるはさておき、長い付き合いだ。私もそれはわかっていたのさ。ただ私らしくなく君の存在については何故か今の今まで全く調査をして来なかった」
「おや？それはあなたらしく無いですねぇ？天下の名探偵、ディテクティブ・ザ・ディテクティブ、ホームズとあろう方が？」
　はて意外、さて意外、とメフィストフェレスはおどけてくひひひひ、とあざ笑うかのように奇声をあげたが、ホームズは眉一つ動かさず、メフィストフェレスを見据えていた。
「……君の行動は非常にわかりやすく読みやすかった。君の行動原理は『面白いか面白くないか』。そして『面白い者は助け、面白くない者は率先して排除するか面白くするか』。その点、彼……マスターは非常に君にとっては非常に『面白い存在』だった。いや、このカルデアそのものが、といった方が良いだろうか。眺めているだけで君には満足だったのだろう？』
「うひっ、うひひひっ。そうですねぇ、そうですとも。ですがカルデアが面白いのではありません。マスターが居るこのカルデアが面白い。いえ、面白かったのですよ、ホームズ」
　わざわざ過去形にするメフィスト。ようするに彼としては今のカルデアは面白く無

いように映っていたのだろう。その原因はマスターの死期によるものなのは明白である。

「……確かにそれは認めるよ。だから今まで君はとても安全な存在だった。わかりやすかった程に安全だったんだ。だから私は君を放置していた。君が『気に入ったものを壊す』ような存在では無かったからね。故に失念していたのさ」

「ほう?あなたのような方が私の思惑に……いえ、そんな思惑は無かった!あはははは、まぁ、どうでも良いですけれど。それがどうしてまた、あなたの興味の対象に?今更危険認定?いや、間違っても私は無害ではございませんけれども!」

「……いや、単に『何故』だよ。今回のマスターの一件だよ。単刀直入に言おう。パラケルススや他の誰も、マスターの延命や若返りについて、散々、様々な角度から検証して無理だという結論に達した。しかし君だけが確実な方法を出し、そしてそれは成った。だからなのだよ」

そう、ホームズの興味はそこにあった。つまりは単なる探求心と好奇心で彼はメフィストフェレスについて調べていたのだ。

けして高度な知性など持っていなさそうなこの自称悪魔が、誰も考えていなかった解を如何にして出したのか、それが知りたかった。

実際、体細胞の再生などはパラケルススなどの医療系の英霊達によって考察はされて

いた。
　だが、それをするための機材などはホムンクルスなどの精製に使われる物の発展型であり、つまりは科学や化学では無い。それらの機材を使おうとするとどうしてもマスターの亡くなった妻であるマシュの宝具、円卓の盾がその効果を発揮して機材の術式や錬金術的な基盤が壊れ、無効化されてしまい、不可能であったのだ。
「ああ、あの程度で?あの程度の簡単な解決方法で?それはそれは」
　メフィストフェレスはそう嘯く。
「君はどうやってミス・キアラにあのような事ができると知ったんだね?私は今回の件は裏でマーリンが糸を引いていたと思っていたが、彼が現れたのは君が解決策をとっくに持ってモリアーティ教授達と話していた後だ。つまり今回の発案はマーリンのものではない。どう考えても君の発案によるものだ」
「……というか、とっくにあなたは答を、解を出してるのにそれを聞きますかぁ?名探偵。あなたの想像通りなのに。それはつまらない。解っている答ほど面白く無いものは無いのに。しかし推理というものは間怠っこしいものだとは知ってますが、実はそれが一番早いという。いやはや」
「……君は、まるでライフウォッチャーの側面を持っている。まるで神の視点のようだ」
「ふむん?観察が好きなだけですよん?そう、私も推理しただけの事。キアラ嬢のあの

宝具は、とても具合良さげで面白そうだったのですよ。仏教の変な側面の最たるものでしょう？なんだっけか？何流？男女の交わりで悟りを開くとか開かないとか。まぁ、一部開くんですけどね？股間がくぱぁーっと。くひひひひひ」

「……まぁ、私も話に聞いてひどく驚いたものだけどね、あれは。原罪の形というのは正直なところ予想をはるかに超えていたけれども。それで？」

「いやぁ、中に吸い込むなら出せるでしょ？って本人に直接聞いて、あれこれと吹き込んだだけ。いやぁ、ビーストって言うからちょっと危険かな？とか思っておりましたけど、なかなかにノリが良いお方で。ああ、お相手は拒否されましたけど？というかそもそも私にはそっちの欲はまーったくございませんけれども！」

「……胎蔵、という括りで術式の知識を君は彼女に説いたのか?!」

「……まぁ、そうなりますなぁ。そうなりますとも。こう見えて錬金術の下らない知識は昔の愚かなマスターのせいで見知ってましたので!!というかそもそもホムンクルスとはこの世の真理を語るものでございましょ？出来損ないでは無理でしょうし、語っても相手が馬鹿なら理解出来ないけどね!!」

やはりホムンクルス!!

ホームズは自分の推理通りの答だったのだが、最も有り得ないと思っていただけに驚いた。いや、有り得ないでいて欲しいとさえ思った解だったのだ。

完全なホムンクルスは誰も知り得ない知識を持っているという。そしてそれを得るために錬金術師達は最大にして至高の実験、最終点として完全なるホムンクルスの精製を目指すという。

この世で完全なるもの、真のホムンクルスを精製出来たと伝えられる錬金術師はパラケルススのみと伝えられているが、まさかファウスト博士が到達していたとは!!

「言っときますけど、ファウストはただの愚物の三流でしたからね？単に偶然の失敗で私が出来ただけですとも。それも『悪魔』の介入があっただけ』

「……それでも君は、産まれた。しかし悪魔の介入とは？」

「……ここだけの話ですよ？それが私、メフィストフェレスだったのです!!あーっはっはっは、あーっはっはっは!!まぁ、私は悪魔と様々な要素で構成されたサーヴァントですから、当然その本質は様々、それこそ錬金術のように混ざり合っているのですよ。……信じる信じないかはさておき。というかまさかそんな事は信じませんよね？つーか信じてない、ソーデスカ」

メフィストフェレスはテーブルのカップの、少し冷えた紅茶を流し込むようにして一気に飲み干すと、席を立った。

「そもそも、私は錬金術師は大嫌いでしてね。あのパラケルススなどは非常に面白くない。私を見て全く驚きもしない。とはいえ、マスターが絡むと面白くなるものですから

生かしてやっているのです。まぁ、英霊ですから死ぬかと言えばシナナーイ。どうでもいいですけどね！あ、お茶ご馳走様でした」

などと言ってぺこりと礼をすると、メフィストフェレスはドアを開けて出て行った。

「しまった、煙に巻かれてしまったか。……肝心なところが全く分からない」

ホームズは苦笑して、そういうと懐のペン型のＩＣレコーダーを出した。

近頃では彼も文明の利器をよく使うのだが、それはいつの間にか壊れていた。使う前にきちんと動作確認はしておいたというのに。

「この私に気づかれずに壊すとはね。まぁ、それぐらいはしてのけるか。『あの』メフィストフェレスだから」

あの悪魔的な道化師は見た目以上にしたたかで狡猾なのだ。失敗したりへまをしたように見えている時は必ずワザとそうしており、行動は確実なのだ。

そして、何かしら自分に関する記録や記述を残される事をどうやら嫌っているらしい。

なにしろ『ファウスト』のみなのだ。彼の詳しい行動や思考、そして嗜好を書き記したものは。

それはある意味製作者だったファウストに対する何かの想い入れ故だったのか、それとも。

ホームズはノートをまた開いた。
予想通り、メフィストフェレスに関する考察を書いたページは黒いインク塗れになって文字など全く塗り潰され、もはや読める代物では無くなっていた。
「……本当に悪魔なのかも知れないな、彼は」
仕方なくホームズはパイプを取り出し、そして火を付けた。
煙草は特に何もされておらず、ホームズは少し安心した。

マタニティ・ライフ。

キアラのマタニティ・ライフは非常に快適そのものであった。
食にあたってはエミヤ、ブーディカ、頼光達の協力で計算された栄養と滋養をとり。
医療に関してはフローレンス・ナイチンゲール主導の元、パラケルススやドクターロマニが担当。
病室はどこの産婦人科のＶＩＰ病室よりも快適に整えられ、さらにはマタニティ・エクササイズ、胎教に良い音楽家（モーツァルト作曲）、様々なサービスを受けつつ、それこそ豪華かつなんの不自由も無い、痒いところに手が届くようなマタニティ・ライフを送っていた。
また、最初は嫉妬したり怒っていたりした女性サーヴァント達も正論を吐いたり詭弁を放ったりする様々なサーヴァント達によって説き伏せられたり、それらをボコったりして腹いせを終えたりして、協力するようになっていった。
説き伏せ系はギルガメッシュやキングハサン、三蔵ちゃん、頼光、マルタ。まぁ、彼らに言われてなお暴れるサーヴァントはそんなに居なかった。

しかし、ボコられ系はメフィストフェレス、ジル・ド・レェ（キャスター）、あと、エミヤ（アーチャー）やエミヤオルタなどは巻き込まれて酷い目にあったりしていた。メフィストフェレスはわかるが、ジルドレさんは単に企みの場にいただけで何にもしていない。よしんば、エミヤ（アーチャー）は、カルデア内の騒ぎを聞きつけてなんとか納めようとしただけなのに。

哀れなりエミヤ（アーチャー）。まぁ、なんか昔から彼はそんな感じだったような気もするが、ネタになりやすい男よなぁ。

まぁ、嫉妬云々以前に中には危険なサーヴァントも一部いるにはいたがそういうサーヴァントは自分からキアラに近づく事を自重してもらう事でなんとか決着がついた。

例えば、ジャック・ザ・リッパーなどは今のキアラにとっては非常に危険である。なにしろ彼女は胎内回帰を強く望む性質を持つ。彼女の解体はその表であり、腹を裂いて戻ろうとするのである。

ゆえに彼女が自重してくれるというのは非常に関係者達を安堵させた。

もっとも、以前から彼女はだいたいはナーサリー・ライムやアビゲイルなどの見た目の幼いサーヴァント達と共にエミヤ（アーチャー）の周りにいる事が多い。

理由は不明だが、何故かエミヤ（アーチャー）は子供に好かれやすい。

その様を見たイシュタルやジャガーマンに『エミヤ幼稚園』と言われるほどなのであ

る。

まぁ、餌付けされているからなのかも知れない。なにしろエミヤ（アーチャー）はやたらと家事スキルが高く、オムライスやハンバーグなどはかなり子供のサーヴァント達には大人気である。

まぁ、子供だけでなく大人げないサーヴァント達からも集られたりするのだが……。

「別にあの子達の面倒を見てもかまわんのだろう？」

ジャガーマンがパンケーキを頬張りながら、エミヤの口調を真似して言った。

「あんたが言うな、あんたが!!つかガキ共のおやつをつまみ食いするなっ!!」

「ムグムグムグ……」

なお、エミヤはアビゲイルのリクエストで三時のおやつにパンケーキを焼いている最中であるが、ジャガ村先生はそれをつまみ食いに現れたのである。

「えー？いいじゃんよー、おねぇさんにもおやつ～！」

「うむ、これは……懐かしい味だ」

ムグムグムグ。

あ、アルトリア（セイバー）さんまで。

「だーっ!!パクパクパクパクとっ!!お前まで食うなぁぁぁぁっ!!」

「士郎、お代わり」

「だーら、士郎じゃねぇぇぇっ!!」
頑張れ！エミヤ。負けるな！エミヤ。マスターの命は君の働きにかかっているのだ!!
まぁ、彼の現在の日常はそんなものである。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

『……むぅ』
『はい、マスター？どうかなさいましたか？』
『いや……、なんかエミヤの悲痛な叫び声が聞こえなかったか？』
『ああ、おそらくはジャガ村さん達がまたちょっかいを出したのでしょう』
もはやいつものことと、キアラは涼しい顔でそう言っておやつとして出されたパンケーキを上品にフォークで差して口に運んだ。
何故かジャガーマンはやたらとエミヤにちょっかいをかける。古代の南米の神性と未来由来のサーヴァントに何らかの接点があったとは思えないが、彼らには何らかの縁があったのかも知れない。無論、マスターはそれについて聞いたことは無い。聞くような事でもあるまいと思って今までそっとしておいている。

そう言えば、エミヤ、イシュタル、エレシュキガル、ジャガーマン、パールヴァティー、そしてイリヤスフィール、エミヤ（アサシン）、あとアルトリア（セイバー）はどうも繋がりがあったと思われるような節がある。

『ふーむ。英霊にも何かしらあるのだな』

『英霊業界の裏事情、的なものでしょうか。私も存じ上げてはおりませんのでよくわかりませんが』

「過去の事、別世界の事、いろいろあるのだわ」

エレシュキガルがそう言いつつ、キアラのベッドの隣でパンケーキを頬張っている。なお、彼女はキアラに持っていってくれとエミヤに頼まれ、その代わりにと自分の分のパンケーキをもらったのである。

そう言えばこのエレシュキガルはイシュタルと双生的な関係にある。また、憑依した人間もまたイシュタルと同様らしく、それが分かれたのだという。

その辺にも詳しいのかも知れないが、あえて聞かないのが良かろう。

『……はぁ、パンケーキかぁ。良いなぁ』

その代わりにマスターは昔の若いときのように間抜けそうな声でそう言った。

エミヤはやたらと料理がうまいだけでなく、日本の一般的な家庭料理に精通している。作る料理を見るに、実は英霊になる前は自分と時代的に近い年代出身だったのでは

無かろうか？とかマスターは思ったりしているがそれはさておき。
　パンケーキは非常に豪華だった。見れば、メープルシロップに生クリーム、シロップ漬けの果物が添えられ、さらにバニラとチョコアイスまで……。
『くぅぅっ、胎児な自分が恨めしい!!』
「はいはい、生まれてきても食べられるようになるまでだいぶ先よ。ざまーみろなのだわ！」
　エレシュキガルはホーッホッホ、と笑った。多分、胎児になったことで死を回避したマスターへのささやかな嫌みなのだろう、なんせエレシュキガルは冥界の女神なのである。
　マスターが死んだら魂を冥界に繋ぎ止めて自分の物にするつもりだったのだ、この女神は。
　ただ、内心で死ななくてほっとしていたりもする辺り悪い人間……女神ではないのではあるが。
　くすくす、とキアラは笑いながら、お腹を軽くさすって言った。
「まぁまぁ、私が食べた物はあなたにとっても栄養でございます。味覚はともかく、一緒に食べているのも同然で御座いましょうに」
『……栄養はともかく、味覚は共有できないんだよなぁ。うーむむむ』

現在、マスターはキアラを介さずとも、もう9ヶ月に到達した時点で外部を見たり、念話で話をしたりする事が出来るようになっていた。

それは超能力というか、なんというのか。

すでに生まれる前から異能に目覚めており、自分でも（ああ、人間辞めちゃったのか俺……）なんぞと思いつつも便利なので開き直って使っているのである。

『とはいえ、もう9ヶ月。あと一月ちょいなのか』

「はい、随分と長く思えましたが、うふふっ、これもまた役得でしょうか。マスターと皆様のおかげで満ち足りた妊婦生活を送らせていただいておりますわ。それに、皆様もいろいろ来ていただいて、こうしてお話ものんびりさせていただけております」

「みんなマスターが気になっているだけなのだわ。沈静化したとは言え、まだわだかまりも無くなったわけでは無いのですからね？」

「存じておりますわ。でも、どうあってもこれ以上の最良解は無いと、ホームズさんとモリアーティ教授も結論を出しましたし、私と致しましても……マスターを失いたくは無い一心で……。いえ、それも確かに有ったのですが、それだけではありませんね……」

キアラは自分のお腹に手を当ててそれを慈しむようにさすった。

マスターはどうせ出産ショーとかそういうとんでもない事を言い出すのでは?!とか身構えた。いや、胎児なので脳内で、だが。

しかしキアラは意外に真面目に語った。

「私の生前の心残り。この世で最も強いものは母の愛。そう、私はこのような女では御座いますが、やはり憧れておりました。いつか母となり子供を育むのだろうと思っておりました。他の世界軸の私はどうか知りませんが、あの魔神柱……ええっと、何でしたっけ？名前。まぁ、どうでもよろしいですわね、今更……に良心も何もかも封印されましたが、でも、その想いは残っておりました」

哀れなり魔神柱ゼパル。とはいえ彼女からすれば、いや、彼女と戦うはめになったマスターやサーヴァント達からすればそうとも言えないが。

だが、この世界のキアラは海洋油田施設で働く善良なセラピストだったという。あのゼパルが月の裏側のムーンセルのキアラの情報と彼女を連結させたり、彼女の良心などを封印したりしなければあの事件は起こらなかっただろう。だが、あのゼパルの介入が無ければ今のアルターエゴ・殺生院キアラも存在する事は無かったのである。

良かったとは言い難いかも知れないが、現在を見るに悪かったとは言い切れない。

もっともマスターとしてはあのような心底肝が冷えるような危機は二度とごめんである。今でもあの時の絶望感と恐怖は思い出しても震えが来るほどである。

生来の楽天家のマスターでも、あれはトラウマであった。

「……はぁ、ビーストⅢ・殺生院キアラにそんな願望があったなんてね。いいえ、そ

れは人だった頃のあんたの切望と言ったところかしら」
「……人ならぬ身になって、愚かな事を、と思っておりましたが、マスターのおかげでこのように願いが叶いましたわ」
『……そうかね。良かったね、というべきかなんと言うべきか。私としてはどうなんだろうなぁ。もちろん死ななくて良いというのは感謝すべきなのだろうけどね』
流石のマスターでも、自分の人生でまさかアミデュられてしまう日がこようとは思わなかったわけであり、さらに胎児としてキアラのお腹で生育されるなどゆめにも思わなかったわけで。
とはいえ。
『というか。このやたらに魔力とか変な力満載な状態で産まれても大丈夫なんだろうか？』
そう、念話は出来るわ、千里眼とまでも行かないが遠く離れた所も意識を集中すれば見れるわ、多少の念動は発揮出来るわ。普通の人間の範疇ではない。
「普通の人間の魔術師、もしくは超能力者程度ですわ。まぁ、英霊のマスターとしては充分な能力かと」
「まぁ、昔の人間だった頃のギルガメッシュにも遠く及ばないわよ?大丈夫なのだわ」
古代の神と人間の間に産まれた王と一緒にするな、と言いたい。ここは現代であり普

通の人間だったのだ。
「それに、成長して多少力が強くなってもサーヴァントには遠く及ばないのだわ。……とはいえ間違っても死んで英霊になんてならないように気をつけなさい？それはある意味、キツい事だもの」
　エレシュキガルはそういうと、食べ終わったキアラのパンケーキのトレイを片付けると。
「それに、あんたの魂は死んだ後、私が予約済みよ。冥界で丁重にもてなしたげるわ！」
　そう言って出て行った。
『……いや、今から予約されてもな』
「まぁ、マスターは果たして死ねるでしょうか。何となくですが、次は私ではなく、別のサーヴァントの誰かが同じ事をしそうな気がしますわ」
『……エンドレスライフっ?!』
　そう、それはある意味、不死を定められたようなものである。というか英霊達ならばやらかしそうな気がして、産まれる前からものすごく不安になったマスターであった。

マスター語り。十月八日目。

さて。

順調にすくすくと俺は育ち、キアラも明後日には出産予定日を迎える。このキアラのお腹の中も今では狭く感じるように思えており、ああ、いよいよか、とか思ったりもしている。

……自分で言っていてなんだが、実におかしい事を言っている気がするがそれは仕方ない。この異常な状況こそが変なのであり、それを説明しようとするとやはりおかしくなってしまうのだ。

とはいえこの変な状況も長く続くと慣れるものであり、意外とキアラのお腹の中というのは悪くなかったりする。それはキアラのかけている鎮静化の術式のせいでそう思うというのもあるが、安らぐのは確かなのである。

それにキアラも非常に俺に気を使っているのか、かなり慎重に動いたり自身の精神状態を安定させたりしてくれているようでお腹の中にいてもわりと快適だったりする。

うーむ、ジャック・ザ・リッパーの気持ちがわかってしまいそうなぐらいだ。いや、刃物持って解体したいと言うわけではなく、居心地がいいという意味で。

だが、如何に快適で安らげてもいつまでもここにはいられないのは当たり前で、外に出たいか出たくないかと問われれば出たいと思うのである。たとえ赤ん坊の姿であっても娑婆（シャバ）の空気を吸いたいのである。シャバダバシャバダバ。

しかし、キアラの腹の中に居るというのは、つまりいつもキアラと一緒なわけで、今まで知らなかったキアラの性格や意外な側面が見えてきたりするものである。それなりにキアラとの付き合いも長いが、いやはや、知らなかった事も多いのだなぁ、と思い知らされた。

例えばキアラは意外にマメな性格をしている。

整理整頓を怠らない。マタニティエクササイズも無理せずしかしキチンとこなし、ナイチンゲールの指示に従い、モリアーティ教授やホームズとの法務的な話や遺産相続の手続きなどもしっかりとする。

頼もしい限りである。

……まぁ、書類上、名字が変わって俺の姓になってるのは突っ込まない方がいいのだろうか。

そう、そこにモリアーティ教授の悪意を感じてしまうのは俺の気のせいだろうか。

いや、ホームズが居て何も言わないので、これから先を考えればその方がなにかとすんなり行くのかも知れない。

だがホームズの笑みにもかなりなんかこう……。やっぱり悪意あるよな、あの二人。

正義の味方と悪のボスが手を組むとろくでもない結果になるのはあの新宿で学んだが、女装させられたり、ダ・ヴィンチちゃんフライヤーで飛ばされたり以上だぞ、おい。

……まぁ、それはさておき。

話をしていても退屈はしない。というかキアラは話上手なのだ。しばしば下ネタがぽんぽん飛び出してくるけど。

エロ魔神な側面は胎教に悪いと思うので出来ればもう少し自重して欲しいところなのだが、よくよく考えてみると、俺、中身は老人だった。元々赤ん坊じゃなかった。

しかし、中身がジジィな赤ん坊というのはよく考えればかなり気味の悪いものではないか？とか思ってしまう。エマニエル坊やも青ざめるようなシロモンだ。

見た目は赤ん坊！頭脳はジジィ！名マスタージジィ！

シャレにならん。

それにエマニエルと言えば、母胎はエマニエル夫人以上にエロにかけては命張ってるような殺生院キアラなのである。いや、エロの為なら世界を滅ぼしかけた女なのだ。

今はそういう事は考えて居ないようだが、本来は取り扱い厳重注意なサーヴァントなのである。

ＳＥ・ＲＡ・ＰＨ・の一件は思い出すだけで未だにゾーッとするほどだ。それにギ

ルガメッシュの話では別の世界軸でもキアラという存在は世界を滅ぼし掛けたと言う。
　究極エロテロリスト、地球で恥丘を擦っちゃうぞおねぇさん（間違っても黒髭のようにＢＢＡなどと呼んではならない）なのである。なんでも子宮にしまっちゃうおねぇさんなのである（なお、黒髭さんは物理でボコられた。さすがのキアラでもアレをしまうのは嫌だった模様）。
　そういう存在の中に俺はしまわれちゃったわけだが、そのように思うとやはりちょびっとだけは怖い。だが、どのみちここまでその腹の中で成長したのだ。四の五のは言う気は無い。出産予定日も近いのだし。
『……本当、キアラは怖いよなぁ』
「あら？うふふふふ、今さらにお気付きになったのですか？私は恐ろしい女なのですよ？魔性菩薩で御座いますもの」
『……いや、あの事件を思い出してね。というかラスボス率高いよなぁ、このカルデアは』
　そう、様々な特異点でラスボスだったサーヴァント達は大抵事件終了後の召喚でやたらと来たりしていた。
　ジルドレさんやらニコラ・テスラ、他にもモリアーティ教授もそうだっけ。
　キアラもその一人なのだが、あの時はめちゃくちゃビビった。

そりゃそうだろう。あれほどギリギリな戦いを繰り広げて、最後なんてもうダメだと思ったぐらいなのだ。

ＢＢちゃんやメルトリリス、パッションリップ達、あとエミヤオルタのおかげでなんとかなったようなものだ。実際、他の小特異点の事件よりもＳＥ．ＲＡ．ＰＨ．の一件はエゲツなかったと思う。

そんな事件が終わって、ＢＢがカルデアに居座ってちょっとしてからの事だ。

召喚符が何故か自分の懐に入っていたので使ってみるかと呼んでみたら、いきなりキアラはやってきたのである。

カルデア内は総パニック状態になった。

マシュもダ・ヴィンチちゃんもマジでビビったし、アンデルセンなんてダッシュで逃げ出そうとし、事件後にすぐに来たＢＢなんかはフリーズして固まってしまっていた。

あの時は本当にカルデアの終わりがやってきたのかと思ってビビった。職員の中には本当にチビった人も出たぐらいだ。

「くすくすくす、あの時は本当、私、少し笑ってしまいましたわ。皆様本当に非常事態モードに入られましたもの。たかがサーヴァントが出たぐらいで」

いや、あんた普通のサーヴァントちゃうからな？あの地球に隕石ぶち込もうとしたモリアーティ教授でもあんなに警戒されなかったからな？

『あんたからしたら笑えたかも知れないけど、俺らマジで絶望しかけたから。ホラー映画のラストで殺人鬼からようやく逃げてたどり着いた安全な場所で『ああ、助かった』と思った主人公の後ろに殺人鬼が立っていたってぐらいシャレにならんかったからな？』

「まあっ、こんなか弱いママに向かってホラー映画の殺人鬼なんて……ああ、我が子にそんな事を言われて、ママショック……』

よよよよよ、とわざとらしくキアラは嘆くふりをした。つかあんたは頼光さんかよ。

『誰がママやねん。いや、つか自分で恐ろしい女とかいってたやん』

「あら、ではあなたはその恐ろしい女の子供？怖いわ～あら、怖いわー、まるで昔の小説の『悪魔の赤ちゃん』みたい！」

悪魔の赤ちゃんと言うのは古いホラー小説であり、悪魔の子供を身ごもった女性が出てくる話である。海外の小説であり、原題はまた違った名前だったと思う。確か映画にもなってたっけ。

『……いや、恐ろしい女本人が言わないで欲しいと思うよ。つか俺普通の一般人だったし？』

そう、カルデアにスカウトされる前は平々凡々なフリーターだったしな。

キアラはくすくすと笑っている。

そう、彼女は普通にしていると非常に話しやすく話し好きな人格をしている。

かつてのＳＥ．ＲＡ．ＰＨ．の時の彼女は全く人の話を聞かず、話をするのも人を煙に巻いたりする為のような感じで間違ってもこんなに人好きのするような感じではなかった。

いや、見舞いに来た他のサーヴァント達に対しても気さくに友好的に話していたのを見るにこれが彼女の素なのかもしれない。

ＢＢ曰わく、彼女は他の世界軸の殺生院キアラからすれば特殊なケースであり、元々はビーストにならなかったというのか、本来魔神柱の介入さえ無ければ、なるはず無かったケースだったらしい。

そのキアラに無理矢理、ゼパ……なんとかという魔神柱が他の世界の殺生院キアラの記録情報を彼女に埋め込んだり善性を封印したが為に彼女はビーストＩＩＩとして覚醒し、本来の彼女は大きく変質してしまったとの事だ。

ビーストＩＩＩにされる前の彼女は真面目で、いたって職務に忠実な教団から派遣されたセラピストだったという。当時の資料はＢＢから見せてもらって覚えているが、その写真の映像は、尼装束を着てはいるが普通の人という印象だった。

「……まぁ、縁というものは本当に奇な事。あの時のあなたと出会い、結果としてこうしてサーヴァントになり、封印された記憶や良心というものを幾らか取り戻し。当時の願望の一端を思い出して。本当、こうしてマスターを孕む事になるとは思いませんでした

わ」

『……魔神柱にビーストにされる前の自分を取り戻したって事？』

「はい。幾多の世界の私の記憶を持ち合わせているが故にあのＳＥ・ＲＡ・ＰＨ・にいた私の記憶もまた持ち合わせる事になったと言うのでしょうか。サーヴァントになったから変貌する前の自分の精神や、魔神柱に破棄され封印された善性を取り戻せたとも言えますわね」

『ということは、カルデアに来たキアラは善人になった……わけでは無いよなぁ』

「魔性菩薩、ですから」

涼しい顔をしてそう言う。

とはいえ、もしも彼女が魔神柱に遭遇していなかったら、と考える。メルトリリスが言っていたが、彼女はその気になれば救世主にもなれた存在なのだそうだ。

そういえば、彼女の宝具は快楽天・胎蔵曼荼羅だが、敵だったときの読みはスカーバティ・ヘヴンズホールだったが、今の読みはアミダアミデュラ・ヘヴンズホールになっている。

サンスクリット語でスカーバティはたしか極楽を指す言葉だが、アミダアミデュラのアミダは数多、無量、量り知れない、無限、という意味、アミデュラは、施し、恵み、を指す。つまり無限の施しという意味である。

つまり、無限の慈愛という意味にとらえると、今の彼女の本性はそういうものになってるんでは無いかとか思ってしまう。

そう考えると、どこかの世界軸には正しい救世主としての殺生院キアラもいるんじゃないかと思ったりもする。

『……想像出来ないけど』

「私にも無理ですわね。どこかには居るかも知れませんが私が知る限り、大抵は快楽天・魔性菩薩な私か普通の人でしたもの。魔性菩薩になれば世界に災いをなして滅ぼされ、普通の人ならば不幸な目にあって早死に。どちらにせよ難儀な存在なのですね、私は」

『……カルデアのキアラさんは、どう?』

「……そうですね、なかなかに幸せであるかと。いえ、今、とても幸せで御座いますわね。うふふふっ、そう、幸せで満ち足りておりますわ」

キアラはお腹をさすってそう言った。

このカルデアのキアラは、キアラの中でも特殊なキアラなのだろうと俺は思い。

『幸せならいいさ』

そういってキアラの腹の中で笑った。

手持ち無沙汰なママと母～十月九日目。

カルデアでオカンと言えばエミヤ（アーチャー）だが、母と言うとブーディカだろうか。

エミヤ（アーチャー）はまぁ、世話焼きな性格や料理が得意で家事スキル上級者なのでそのようにいわれている。また、菓子作りも得意なため、幼児系のサーヴァント達や武則天、茨木童子などにもかなり好かれている。なお、幼児系のサーヴァントに集られているその様は『エミヤ幼稚園』と言われている。

頼光は母性愛の強いサーヴァントではあるが、バーサーカー故なのか、執着心、いやそれは妄執というかそういう域にあるので、少し怖い。

自分が庇護していると自覚するや否や束縛にも似た感じで徹底的に過剰なぐらいに過保護な感じで母親として振る舞う。

なお、それ以外の人間に対しては普通に理性的に接するが、特定の鬼に対しては辛辣である。

ブーディカはどちらかというとおねぇさんな感じで気さくな性格をしている。家事

スキルも高く女王というには庶民的で世話焼きなのはエミヤにも劣らない。
エミヤと違う点は、エミヤは仕方なく世話を焼いてるような言い方をするが、ブーディカは世話が好きでたまらないといった性格なのである。
……ブーディカをママと言うのは、まず人妻でありお子さんが居た事も踏まえて、あのおっきなおっぱいのせいだと思います。ええ。
それはさておき。
まぁ、現在職員やサーヴァント達の食事を作っているエミヤを除いた頼光とブーディカ、他数人の女性サーヴァント、あと何故か黒髭がそれに混ざってチクチク、チクチクとなにやら作っている。
何故にお裁縫をしているかと言えば、それはキアラがお産をした後に必要になる、赤ん坊のおくるみ（赤ん坊をくるむ布）や産着、それに布団、シーツ、様々なものを作っているのである。
昔ならばお産の準備と言えば、男衆を締め出して、女衆は大忙しで働いたものだ。とにかくお湯を沸かし、いきむ為のいきみ紐やいきんだ時に歯を食いしばる際の轡（くつわ）などを用意したり、身体を冷やさぬように火を焚いたり……と、様々な用意を事前にしたものだが、現代においては医療が進み、ほとんどその用が無い。
なにしろ医者が二人にナイチンゲール他、人間の看護士と医療職員が万全の状態です

でにスタンバっている。
故に他の女衆は手持ち無沙汰気味であり、チクチクと縫い物仕事に勤しんでいるのである。
作っているものは赤ん坊のおくるみ（赤ん坊をくるんでおく布）や産着、あとは毛糸の靴下を編んでいるサーヴァントもいる。
現代においてはそういうものはベビー用品店にあるもので、それを購入するのが当たり前なのだが、ここはカルデアである。買いに行くにも街など無いしもちろんそんな店は無い。
補給物質の品目に加えて送ってもらえばいいのだが、カルデアの女性サーヴァント達はなんというかやはり昔に生きていた方々なのであり、やはり赤子には手縫いのものが一番だとこうして作っているのである。
これはどの女性サーヴァントに聞いてもそういう認識のようで、買うという選択肢など無いように、当たり前のように作り始めたのである。
どの時代、どの国の女性サーヴァントであっても口々に赤ん坊が産まれたら『布はあればあるほど良い!!』と言う。これは中東辺りの出身でもヨーロッパ出身でも日本でも同様の認識のようである。
これは赤ん坊の着るものはこまめに取り替える必要があるためである。なにしろ赤

ん坊は自分では大小のシモの事が出来ないため、というのもあるが、とにかく赤ん坊の肌はデリケートであり清潔にしておかねば、あせも、湿疹などすぐに出来る。また、病気に対する抵抗力も弱い。

確かに現代には紙オムツというものがあるしそのサイズ毎のストックも十分であるが、それでも女性サーヴァント達はきっちり、何かあっても大丈夫なように布の備えをしていた。

また、赤ん坊の身体は成長が早い。すぐにサイズなど大きくなるのである。もう大小取り揃えて女達はそれらを数ヶ月に渡って作り続けて来たのである。

……頼光などはもう3歳児の着るような着物を縫っていたりするあたり、どれだけ成長を楽しみにしてるんだよ、あんた気が早すぎるよ、などと思ったりするが誰もそれに突っ込まない。

そんな命知らずはここには居なかったのである。

出産というのは祝うものであり、頼光が嬉しいと思っているのだから、それは良い事だろうと思うことにしよう。

「……うふふっ、明日ですか。しかし何時産まれるかが分かるというのはすごいものですね」

頼光は今時珍しいほどにきちんとした和裁で布を縫い上げて行く。手付きもやはり

確かで縫いも完璧、寸分の狂いも無い。熟練した和裁のプロも顔負けである。
「もうそろそろ産まれるってのはだいたいわかっても、日にちまでは、あたいん頃もわかんなかったねぇ。名医たぁ聞いてたがあの西洋医者、すごいもんさね」
葛飾北斎の片割れというのか本体というのか。その娘のお栄がそう言いつつ、頼光の縫う着物の縫い目を見て「流石だねぇ、あたいじゃそこまではやれねぇなぁ」と感心する。
サーヴァントである葛飾北斎は絵師であった北斎と娘のお栄のコンビである。普段はお栄の身体と浮いているタコの北斎に分かれているが、その存在は不可分、戦闘時などはどうも二人で一人、融合した感じになるが今は分かれているようだ。
なにしろタコは手に筆を持って針仕事をしている女達のスケッチをしている。どうやらこの情景が文字通り絵になると思ったらしい。
「まぁ、医学も進歩してるって事ね。それにお産もかなり楽になったって話だしね。あたしの頃はそりゃあ大変でさ?……と、言ってもあたしん場合子沢山でも無かったけど」
ブーディカもチクチクと産着に刺繍で模様入れをしつつ、二人の話に加わる。こちらは洋裁であるがやはり丁寧かつ仕事が早い。刺繍の模様は少々古風だが西洋風の紋章のような柄である。

「そうですね……。私の居た時代、私の居た国でも大変でした……」

『死にたくない』さん、ことシェヘラザードも極彩色の糸を使い、布に刺繍をしている。中東などに見られる美しい文様の刺繍である。これは赤ん坊を運ぶ時に使う下げ布……今で言う抱っこ紐のようなもの……のようだ。ペルシャ様式に似ているが、この刺繍には独特の美しさがあった。

なお、シェヘラザードもお産経験のあるサーヴァントである。

……人妻で、むちむちで、産経婦で、ぢゅくぢぉ、というと書いている人的にもうたまりません。アガルタで土下座したシェヘラザードさんを想像するともうね？

いや、話を元に戻そう。げふんげふん。

「そだねぇ。どこでもお産は一大事なのは変わんないよねぇ。めでたいことだけど。あ、シェヘラザードさん、その糸の色、良いなぁ。ん～、次の刺繍にちょっともらっていい？」

「はい、どうぞ。まだまだ沢山ありますので」

女衆は地道で静かだが、確実に糸を進ませて確実な仕事を世間話をしつつ和やかに行っていた。

どの針にも産まれてくる子供への想いが込められており、縫い糸にも刺繍の丹念さに暖かな心が宿っている。

とはいえ、針仕事を始めてもう時刻は夜の１０時を回る頃である。彼女達は疲れ知らずのサーヴァントとはいえ、夕飯時からずっとこの作業をしているのである。

「あ～、だけど肩が凝るねぇ。嫌いじゃ無いけど。あと小腹も空いた。ちょっと一休憩したいねぇ」

女海賊のドレイクが、こき、こき、と肩を回して骨を鳴らした。

やはり根を詰めると精神的な疲れは出るものだ。

意外に思われるかも知れないが、こう見えてドレイクは針仕事が得意である。というか船乗りならばある意味必須スキルである。

なにしろ昔の船は帆船であり、突然の強風や雨風で痛んだりするのである。帆の修理はこまめにせねばならなかったし、さらにロープの繕いから輸送物資を入れる袋を縫ったり補修したり、さらには自分達の服の繕いまで全部しなければならなかったのである。

「これだからＢＢ……ドレイクは。拙者などほれこの通りぃ、クマたん着ぐるみベビー服、完成ですぞぉ～？デュフフフフ、ん～、会心の出来映え！」

縫い上げたベビー服をバッ！と女衆に見せて、この服飾室でただ一人の男である黒髭はニマ～っと笑った。

確かに黒髭の縫った、クマの縫いぐるみのような、もこもこした布地のフード付きベ

ビー服は非常に可愛かったし、出来映えもベビー服売り場に並んでいてもおかしくないほどだった。

そう、海賊である黒髭ことエドワード・ティーチもこの手の作業は大得意だったのである。なにしろ、今までカルデアの幼児系のサーヴァント達に可愛らしい着ぐるみを作ってやったり、ぬいぐるみなどプレゼントしたりしていたほどに器用なのだ。

そこをドレイクが無理矢理引っ張って来て、針仕事をさせていたのだが、普段ならば嫌がるはずの彼も『いやいや、マスター氏は同士ですからなぁ。それにキアラ嬢からも頼まれているでござる！』と、自室で作りかけていたベビー服らしきものをこちらに持ち込んで縫い始めたのである。

まぁ、黒髭は小さな女の子にしか興味が無いというか、通常の女性サーヴァント達には特に害を加えないような奴だったのもあり、部屋の隅っこで作業している分には静かだったこともあって、特に誰も彼の作業に目を向ける者は居なかったし、むしろ構うとウザいので無視していたが、黒髭が縫った着ぐるみベビー服は非常に可愛らしく、一同が『きゃーーー！可愛いわねー!!』などと言ってしまったのに気を良くしたのか、黒髭はウザいくらいに喜色満面でニッマーと口元をだらしなくほころばせた。

だが黒髭のそのニッマーっとした笑みはかなり胡散臭くうざかった。非常にウザかった。

彼としては会心の出来に仕上がった嬉しさで笑っているだけなのだが、殴りたい、その笑顔。と思わずにはいられないような笑顔だった。

べきっ！

やはりというか、ドレイクの拳が黒髭の顔面にたたき込まれた。いや、最初の『ＢＢ…』の部分が原因だったのかも知れないが。

「し、しどいわしどいわ……」

哀れなり黒髭。彼はただ単に自分の会心作を褒められて喜んでいただけなのに。

「やかましい!!……というかアンタ、こんな服こさえて。確かに良く出来てるけど、着る赤ん坊はあのマスターなんだよ？中身」

「ううっ、キアラ嬢に頼まれたでござる。以前にようぢぉ……じゃなかった、ジャックたんとかアリスたんとかにあげた着ぐるみ服みたいな可愛いのを頼む、と……」

「はぁ?!」

ドレイクは目をまん丸にした。

「いえ！これは素晴らしいですわ!!」

シェヘラザードが叫ぶように言った。さらにドレイクの目が信じられない、と見開く。

「いや、だって中身は老人なんだよ?!つーか本人も絶対に嫌がるって！」

「でも、これを着た赤ん坊のマスター……ああ、とても愛らしいに違いありませんわ？というか黒髭さん、これは、そう、グッジョブ!!というのでしょうか。素晴らしい、とても素晴らしいですわ!!」

いつもは少しオドオドしている彼女が、興奮したように顔を赤らめて黒髭に賞賛の拍手を向けた。

「デュフフフフ、そうでござろう、そうでござろう。ウサギさんもありますぞぉ～？」

「なんとっ！これはもう、着せるしかありません!!」

「デュフフフフ、そう、サイズ違いもこの通り!!しかも紙オムツ交換もこの通り、お肌に擦れないマイクロマジックテープでこうして……！」

「ああっ、しかも機能的!!それに中綿もちゃんと入っていて暖かそうな!!」

「……なんというか、細かいところまで行き届いてて引くわー、引くわー、超引くわー」

ブーディカが引いた。

「……まぁ、あれをマスターが着るのは、キアラさんが頼んだ時点でもう確定ですね。……何を着せても愛らしいのは間違い無いでしょうけれど、あの子とても嫌がるでしょうね」

頼光はそう言いつつも、自分が縫って完成させていた産着を取っていつの間にか刺繍をしていた。

「……クマの刺繍？」
「……多少は、その……アクセント？というものでしょうか」
あ、頼光さんもなんか対抗してちょっとでも可愛くしようとか思ったんだろね、これ。
「……まぁ、可愛いなら良いですよね、あははは……」
こうして、マスターのベビーグッズの大半が、可愛いものになって行ったのである。
頑張れ、マスター。負けるな、マスター。多分きっと、カワイイゾ？

出産〜十月十日・前編。

お産というものは、母子共にやはり危険が伴う事もある。
これはいつの時代であっても同じであり、ドクターロマニとパラケルススは産科の最先端の医療のデータや様々な論文、文献を集めて出産方法などを検討していた。なにしろ今回のキアラの出産は、マスターの命がかかっている。絶対に失敗が許されないのである。
ドクターロマニとパラケルスス、ナイチンゲール達はカンファレンス（協議、会議）を繰り返し、手順を確認、そして万全の体制で本日のキアラの出産に臨んでいた。
「サーヴァントが出産するというのは、他では前例がないからね。……ティアマトとかの例とかもあるけど、あれはそういう存在だったからね」
ドクターロマニ（ソロモン）は手術着に着替えながらパラケルススにそう言った。
パラケルススは少し考えるような仕草をしたが、おそらくティアマトの事を考えているのだろう。
ティアマトはビーストⅠⅠであった。回帰の獣であり、神話ではありとあらゆる生命の母、原初の一柱である。

「……ビースト繋がり、ですね」
「は？」
「いえ、ティアマトはビーストＩＩ、殺生院キアラはビーストＩＩＩ。しかしどちらも生殖に関係します。ビーストは何かを産み出すものという側面が、いえ、生命にまつわるもの、と考えるべきなのでしょうか」
「パラケルスス、それは哲学的な命題だと思うよ。だけど今は患者が優先だ。あと、その辺出して来るとはっきり言って話が別の方向に行くからね？コメディなんだよこれは」
※そう、この話はコメディです。
「……そうか、コメディということは暗い未来は無いんですね……。よかった」
二次創作で明るい話が多い作品は、大抵原作で不幸なキャラが多かったりするのだが、さてはて。
「……まぁ、マスター君には黒歴史がやたらと増えそうな気はするんだけどね？」←ぶっちゃけそういう話である。
『……恥の多い人生を送って来ました。そしてまた増える黒歴史。はぁぁぁぁぁっ』
二人の会話に割り込む念話。そう、マスターである。
「……太宰治だね。うん、マスター君はもっと前向きになるべきだと思うよ？」
扉の向こうにはすでに分娩台に乗ったキアラがいる。十月十日をむかえて、本日が出

産日である。

ドクターロマニとパラケルススは扉を開き、分娩室に入った。

まだキアラは破水してはいないが、陣痛の兆候が始まっている。大きい陣痛はまだ来てはいないが、おそらくは数時間の内に始まるだろう。

すでにスタンバイしていたナイチンゲールがキアラについており、出産に関しての説明をしている。

今回の出産は、通常の分娩で行うしか無い。サーヴァントであるキアラには陣痛促進剤も使えなければ、麻酔を使用した無痛分娩も不可能である。

なにしろサーヴァントには人間に使う薬剤は効かない。故に他のサーヴァントのスキルを使った麻酔などをドクターロマニ達は検討したりもしたが、はっきり言ってリスクが高過ぎてどれも使えない。

つまり、自然に普通に産んでもらうしか無いのである。

もちろん、何かあった時の為に回復系の霊薬などは運び込んであるし、それにナイチンゲールのＮＰもその辺のサーヴァントを事前にボコってもらってマックスに上げてもらっている。

今回の生贄はコロンブスだった。

黒髭が大量生産した着ぐるみベビー服を強奪し、ネットで売り払おうとしたところを

女性サーヴァント達に発見され、ナイチンゲールに雑菌認定されたのである。
なお、この後、黒髭氏の着ぐるみベビー服は可愛さと機能性で世のおかーさん達に大人気になり、やたらとカルデアにそのリクエストが来るようになってしまい、黒髭印のベビー服は一世を風靡する事となるのだが、それはまた別の話である。
とはいえ、黒髭氏は現在、売り払われたベビー服の代わりを現在必死に制作している最中である。
女性サーヴァント達の監視付きで。あと、注文付き。
「……次はメジェド様の着ぐるみベビー服をですね」
「いや、可愛いか？それ」
「いやいや、やはり忍者風にだな？」
「犬耳だわん！猫耳だにゃん！」
「シンドバッドの着ぐるみなんて可愛いかと！」
「うぉぉぉん、なんで拙者不眠不休でベビー服縫わされてんのぉぉぉーっ?!」
果たして今回の被害者は誰なんだろうか。そんな事を思わずにはいられない事件であった。
「現代医学の犠牲、嫌な事件だったね……」
ドクターロマニ（ソロモン）は首を横に振りつつしみじみと言った。彼はマスターに

用意されたベビー服が着ぐるみ風だとか、そういう事は知らない。
単に黒髭が服などの縫製が得意だと知っていたので、おそらくはよほど出来の良いベビー服だったのだろうなぁ、という認識しかしていなかったのである。
故に、マスターにもその話はまだ伝わってはいない。
マスターもマスターで黒髭の特技は良く知っていたので別段におかしいとは思っていなかった。
もし、コロンブスがネットで売り払ったベビー服が、着ぐるみベビー服などというやたらと可愛い物だったと知ったなら確実に全力で『コロンブスグッジョブ!!』と言っただろう。
だが、知らないので呑気である。
（ベビー服ねぇ。まぁ、赤ん坊の姿だからそれしか着れないか）
ぐらいに考えていた。
『まぁ、仕方ないか。コロンブスだし』
何気にコロンブスにはひどいが仕方有るまい。なんせコロンブスだし。それにナイチンゲールにボコボコにされたとしてもコロンブスは反省するまい。
それぐらいで反省する奴ならとっくの昔に善人になっている。なにせカルデアに来て８０年ほどになるがコロンブスは何か悪事を引き起こすたびに様々なサーヴァント

達にボコられたり斬られたり燃やされたり撃たれたりしている。だが、懲りない。そして諦めない。

いらん事に、前向きに悪業を重ねて夢（金や利益）のためならなんだってやるのだ。諦めずに。

はっきり言って、聖人であるマルタや三蔵ちゃんにも匙を投げられている。

言わんやフローレンス・ナイチンゲールをや。

「雑菌駆除、殺菌処理で回復能力マックス。治療はおまかせ下さい」

もはやＮＰ溜めるためのサンドバックとしての認識しか無いかのようだ。

『……近頃は彼も大人しかったのになぁ』

困ったもんだ、とマスターはそう零すが、だがキアラはなにかクスクス笑っている。

「マスターが死ななくて良くなったからで御座いましょう。コロンブスに限らず他の者達もマスターがお産まれになったらまた以前のように何かと騒ぎを起こしてやらかし始めるでしょうね」

と、確信したように言う。

『うげ……?!出来れば変な騒ぎはあんまり起こして欲しく無いなぁ』

「うふふふ、また退屈しない日々が始まりますわよ？マスター」

『退屈しない、か。はぁ……』

「……はぁ、またトラブルな日々がやってくるのか。悪くは無いけど気苦労がねぇ」
マスターとドクターロマニは溜め息を吐いたが、パラケルススは逆に少し嬉しそうに微笑んで
「賑やかなのは嫌いでは無いですけれどね、私は」
と、言った。
「意外だね？君はそういうのは苦手だと思っていたよ」
「……巻き込まれるのは苦手ですが、傍目で見ている分には楽しいものですよ」
『うわ、一番たち悪い感じだ？』
「誰かと一緒に騒ぐのは苦手なのですよ。それに、ああみんな元気だな、と思えますので」
まぁ、サーヴァント達は基本的に病などは無い。英霊だから。あるとしてもバッドステータスぐらいだ。
『はぁ、しかしなんだな。お産って時間かかるもんなんだな』
「そりゃそうだよ。本当ならこれが当たり前なんだ。……陣痛促進剤も使えないし、それにすまないとは思うけれど麻酔も効かないから無痛分娩も無理だ」
「そうですね。サーヴァントのお産に人間の医療はほとんど何も出来ないですから」
『……あのな、ふと思ったんだけどな。宝具でキアラのお腹の中に入ったんなら、宝具で

出れないものなのか？』
「「え？」」
　医師二人がピタリと固まった。おそらくは二人とも全くその可能性について思い当たらなかったのだろう。
　医師として二人は常識に捕らわれすぎていたのだ。
　だが、もう一人固まった人物がいた。他でもない殺生院キアラ本人だった。
「……いえ、無理です」
　固まりながらもキアラは不自然なほどの笑顔でそう言った。
『今、一瞬の間があったよね？』
「無理で御座います。何をおっしゃるやら、ほほほほほ。胎蔵曼陀羅は私の内宇宙に取り込んで解脱させる宝具。出した事など今まで御座いましょうや？」
『いや、その笑い方がやたら怪しい。かなーり怪しい』
「なんとっ？このママが信じられないのですか？産まれて来る前から母親不信なんて……よよよよよ、ママ悲しい」
『いや、ママとか言われてもな？つか、俺、キアラにアミデュられただけだし？』
「ええい、私の子宮に宿りながら子ではないわけがありません!!そう、私の子宮を犯して成長しておきながら、なんたる言い草でしょう!!反抗期？まだ産まれていないのにもう

反抗期なのですか?!」
『いや、反抗期も何も百歳超えたジジィなんだけどね?元々は』
「うううっ、ママは悲しいです!!そんなにママのお腹から出たいなら、子宮から産道を通って、赤ちゃん出口から、ごっぽぉぉっ!と出てこんにちは赤ちゃんしたらいいじゃない!!」
『いや、だからな?宝具で出せないのか?と聞いてるんだが……』
「むーりーでーすぅ〜っ!!ママにも出来ることと出来ない事があるんです〜っ!!」
キアラは駄々っ子のように、いや、そのもので否定するが、その態度から宝具を使えばすぐにもマスターを外に出せるとバラしているも同然だった。
『いや、出来るんじゃないか?というか出産にはかなりのリスクがあると言うじゃないか。俺もそうだがキアラの身も心配だから言ってるんだよ』
「……ああっ、そのようにママの事を想ってくれていたのね?なんと優しい子!!酷いこと言っちゃったママを許して?大丈夫、ママ頑張って産んであげるからね?ごっぽぉぉっ!と、赤ちゃん出口からずっぽぉぉっ!!とね?」
『ええい、生々しい擬音を加えるんじゃねぇぇっ!!だから、宝具で出せぇぇぇっ!!』
「くっ……流石はマスター、誤魔化せませんか。しかし、もう遅い!!我、出産の覚悟完了っ!!胎蔵界・理拳印!!」

ふぁぁぁん、と何かが発動する音が聞こえた。
そして微かにプチっ、という音が聞こえ、キアラから何か水のようなものが流れでる。
「ふふ、ふふふふふ、破水しましたわ。こうなればもう、マスターは私の赤ちゃん出口から出てくるしか御座いません!!」
「なんとぉぉぉっ?!パラケルスス、いけないこうなったら普通に予定通り出産させるしか無いよ?!」
「くっ、なんということなのでしょうか?!殺生院キアラ、あなたはこれを狙って我々の前では普通の妊婦を装って油断させていたのですね?!なんと狡猾なっ?!」
「おーほほほほほほ、そうです、そうなのです!!私は普通に出産するためにまるで普通の妊婦を装い、マスターを自然分娩するためにこの日を虎視眈々と狙っていたので御座います!!そしてそれは成った!!おーほほほほほほ、おぐぅっ!?ぐっ……この陣痛は……き、きつい、でもママ頑張る……、ぐふぅぅっ」
「……あ～、まぁ、そりゃあそうなるよね。まぁ、頑張って産もうね?うん、考えてみれば、宝具で出てくるのも自然分娩で出てくるのも、マスターが無事ならいいや」
「……そう言えばそうでした。まぁ、予定通りということで」
二人の医師は、冷静にキアラの出産に取りかかった。
なお、なぜキアラが自然分娩をしたがっていたのか。まぁ、それは次回で明らかにな

る。

つづく。

出産〜十月十日・後編

「んっほぉぉぉっ、ひっひっふーひっひっふーっ！」
「キアラさん、まだ力むのは早い！力を抜いてっ!!そう、ひっひっふー、ひっひっふー、呼吸を乱さずにっ!!」
「ひっひっふー、ひっひっふー」
「よしっ、産道、予定通り開いてます!!ひっひっふー、ひっひっふー、」
「ひっひっふー、ひっひっふー」
「胎児の頭部を確認！ひっひっふー、ひっひっふー」
　分娩室は、やたらと、ひっひっふーひっひっふー。
『ぐえぇぇぇ、なんか圧力すげぇ、あとなんかぬるぬるするぅぅぅ、にゅるにゅるひゅるぅぅぅ〜っ、ひっひっふー、ひっひっふー』
　妊婦と看護士と医師二人までひっひっふー、ひっひっふー。胎児まで揃ってひっひっふーひっひっふー。
　みんなでひっひっふーひっひっふー。
　ジルドレさんが居たら、このひっひっふーめがぁぁぁっ!!などと言うかどうか分から

ないがひっひっふー、ひっひっふー。
よ○ーくはー木ーをーきる～ひっひっふーひっひっふー。いや、よさ○は関係無い。
いや、みんな必死なのである。間違ってもギャグなのではない。
幼いマスターの命がかかった出産なのである。
とはいえ、キアラの出産は順調である。
キアラの出産は順調だが。
だが、その裏でもう一人。
奇跡というか、謎現象に驚愕しているサーヴァントが居たのであった。

――――――――――――――――――――

さて、キャスターのメディアさん（大人）は才色兼備な常識人枠のキャスターさんとしてカルデアでは通っている。
また、カルデアにおいて初期に召喚されたサーヴァントで、様々な異変においてキャスターとして活躍して来た事もあり、今でもカルデアではかなり頼りにされており、カルデアでは数少ない役職付きのサーヴァントでもあったりする。
なにしろ初期の頃はカルデアの調理場でその料理の腕を振るったり、洗濯、掃除、ド

クターロマニやダ・ヴィンチちゃん達の書類処理の補助、様々な業務にその才能を発揮し、カルデアを支え続けた影の功労者とも言えるサーヴァントであり、人手不足だった初期のカルデアでは非常にありがたい人物であり、役職を与えられるのも納得できようものである。

『裏切りの魔女』などと呼ばれていた彼女だが、このカルデアでは全くそんな様子もなく、やたらと献身的に働いてくれていたわけであるが、その理由は簡単であった。

裏切らなくても良いほどにカルデアのマスターは善良であり、そして彼女がカルデアを気に入ったからなのである。

……まぁ、若き日のマスターを育成して自分好みに仕立てようとか思っていたり、マシュの可愛いさに入れ込んでいた、というのがその真相だったりもするが。

彼女の部屋には、若き日のマスター、マシュ、初期のサーヴァントとロマニ、ダ・ヴィンチちゃんが映った写真が今でも飾られている。

初期のカルデアのサーヴァントは、メディア（キャスター）、佐々木小次郎（アサシン）、メデューサ（ライダー）の三人であった。これは奇縁というべきか。

その写真立ての隣には若き日のマシュの精巧なフィギュアが飾られている。円卓の盾を持ったデミ・サーヴァントの姿のものと白衣姿に猫耳メイド姿に水着にゴスロリ、バニーガールに、魔法少女風に……。

全て、メディアの手作り、原型から何から何までオール・メイド・メディアである。
どんだけマシュ好きなんだよおい。
メディアはその写真を見ながら、はぁ～っと溜め息を吐いた。
「……一応、安産の御守りを渡しておいたけど、大丈夫かしら」
彼女は、キアラのお産がというよりはマスターの身が心配のようである。本当のところ、彼女はキアラに関してはあまり心配はしていない。殺生院キアラはサーヴァントだからである。それも強力かつ強大な、本来はサーヴァントに収まらないほどの実力を持っている。
いや、心配よりもメディアにとっては信頼が勝っていると言う方が正しいだろう。意外な話だが、実はメディアとキアラはわりと仲が良く、非常に友好的に普段から付き合いがあるのだ。
たしかに昔のメディアと殺生院キアラであれば仲が良くなるなど有り得なかっただろう。正直、相性としては最悪だったハズである。
だが、メディアもマスターやマシュと過ごした歳月の中でかなりその性格は丸くなっており、そしてキアラもかつてのＳＥ．ＲＡ．ＰＨでの彼女ではない。魔神柱に封印された良心や善性をキアラはサーヴァントになってから徐々に取り戻しており、その性格も常識度もある程度取り戻していた。

友好関係を結ぶきっかけはかなり意外な事に、実は、メディアはカルデアに来たばかりの殺生院キアラから相談を受けた事からだった。

彼女に相談を持ちかけられたときにはメディアももちろんかなり驚いた。しかし彼女の相談事がかなり深刻なものだった為に、メディアもやはり真剣に対処した。

キアラは、人間であった頃の良心が徐々に戻った事で、かつて自分がしようとした人類滅亡未遂を悔いていた。良心や善性が無い他の世界軸の自分にも恐れ、そしてそうなってしまっていた自分をも恐れていたのだ。

魔神柱が自分にした事に対する怒りも彼女の中にはあったが、たとえ魔神柱なるものが現れなくともいずれは自分もあの『殺生院キアラ』になっていたのではないか？と。

そう話し、震える彼女をメディアは忘れない。

その時から、メディアはカルデアに来たキアラが実は普通の人だった者であると認識したのである。

確かに性質的には、彼女は愛欲のビーストＩＩＩとしての性質も持ち合わせている。アルターエゴのサーヴァントになったと言ってもやはりそうなのである。故に愛欲はかなり強い。

だが、このカルデアで彼女は布教もそのような事も全く行ってはいない。それは暴走する事をおそれているのと、そしてそれはかつて世界を滅ぼしかけた懺悔からによる。

そんなキアラをメディアはほっておけなかったのもあるが、気付けば二人は仲良くなっていた。

「不思議な話よね。はぁ～っ」

メディアもまさか世界を滅ぼしかけたビーストと親友になるなど思ってもみなかったのである。

キアラは今回のマスターの延命についての計画を他でもないメディアには事前に相談をしていた。

キアラは言った。

「マシュちゃんには悪いけれど、マスターを生き長らえさせる為にはこれしかないわ。パラケルススもナイチンゲールもバベッジもエジソンもテスラも、誰もがお手上げの状況で、私の宝具だけがこの状況を打ち破れる事がわかったのよ」

と。

メディアはそれに大反対した。

キアラとアンデルセンの事もあったし、彼女は生前、子供を産んだ事は無いのだ。そしてさらに、彼女がそれを実行したならば、マスターに恋慕している他のサーヴァント達からの恨みをかうことになる。

だが、彼女はそれでも言った。

「マスター亡き後、カルデアは滅ぼされるわ。これまでもそのような事態は何度もあったけれど、ホームズとモリアーティはそう予測している。そしてカルデア滅亡の後の人理崩壊も」

メディアは何も言えなくなった。メディアはこのカルデアにおいては秘書室長としての職務を持っており、また、カルデアのグランドマスターの秘書でもある。

立場上、彼女もその事を薄々は気付いていた。そしてマスターの命を延命させられる方法が無い事を。

「私は、人生を掛けて人類を、世界を救ったマスターが守った世界を、滅ぼされたくないのです。そして、それが私の贖罪。いいえ、それで許されるとは思ってはおりません。でも……私は、何と言われようとマスターを救ってみせます！」

メディアは、キアラの意志の固さを悟った。

故に、メディアはキアラを止められなかったのである。

「……マシュちゃん、あなたはどう思ってるのかしら。亡くなってもう五年になるけれど。許してくれるかしらね」

写真立てに向かってメディアはそこに写ったマシュに語りかける。

と、写真立てを取ろうとして、誤ってマシュのフィギュアに手が当たって、そのフィギュアが棚から落ちた。

「あっ?!」

と、メディアがそのフィギュアを受け止めようとしたときに、デミ・サーヴァントの姿のマシュのフィギュアが、まるで生きているかのように、身体を丸めて、くるくると回転し、そして床にスタッ!と着地した。

「え?ええっ?!」

メディアは面食らって驚いた。

なにしろ自分が作ったフィギュアが、それも可動モデルではなく、ただのレジンの固まりを削って作ったフィギュアが動いたのだ。それはそうだろう。

〔メディアさん、驚かせてしまってすみません。ええっと、ちょっとこのフィギュアの身体、お借りします!ああ、急がないと!〕

しかも、そのマシュのフィギュアは驚くメディアにそう話しかけると、勝手にスタタタタタ、と走ってメディアの部屋を出て行った。

「ま、マシュちゃん?!ええーっ?!ま、待ってマシュちゃん!!」

走って行ったマシュのフィギュアを追って、メディアも部屋を出た。

わけがわからなかったが、何かが起ころうとしているのはメディアにもわかったからである。

マスターの出産から、走り去ったマシュのフィギュア。

そう、このカルデアでは、何かが始まろうとしていた。

マスター語り～出産後～

母子共に無事に出産は終わった。

キアラは途中、「らめぇぇぇっ」とか「んほぉぉぉっ！」とか、「でりゅう、でちゃいましゅううううっ!!」とか、なんというか最初の方はそんな発言を連発していたが、途中から余裕が無くなったのか、普通に出産を終えた。

ようやく産まれた俺はナイチンゲールに産湯に浸けられ、身体を洗われている。

『ふぃぃ出れた、ようやく……』

破水から約二時間。

ロマンの話だと、これでも安産な方だという。お産って言うのは大変なものだと身を以て知ったが、人間誰でもこの世に出たものは必ずそのようにして産まれたわけなのだが。

俺が産まれたのはこれで二度目となるが、本当の母から産まれた時、つまり一回目の事なんて覚えているはずもなく、それに普通、二度目も産み出される体験なんてする事なんてあるわけがない。

それに二度目の赤ん坊体験なんて、このカルデアに来てから有り得ないことばかり体

験してきた俺でも、これはないわー、ないわー、と思うほどの異常現象なのだ。
昔の大卒フリーターだった頃ならこれは夢に違いないと頬をつねっただろう。だが、今の俺にはつねる必要も現在無かった。
ぐぇぇぇぇ、としんどい。きつい。
この体力を使い切ったこの辛さよ。
正直な話、産まれて来るというのはあんなにキツいものなのかと思った。
まず、途中で呼吸が苦しくなった時にはもう、死ぬかと思った。いや、今まで臍の緒で酸素とかもらっていたものだから、肺呼吸に切り替わって苦しい事苦しい事。
そりゃあ、産まれて来るときに赤ちゃん泣くわー、そらめっさ泣くわー。
しかし俺は泣かなかった。おぎゃーおぎゃーとか泣かなかったのである。精神が赤ん坊のそれでは無く、大人だったからだ。
だが、それがいかんかった。
呼吸していないと思ったナイチンゲールに逆さ吊りにされて尻をしばかれた。
どうやら羊水で鼻や器官が詰まったと思われたようだ。
「ふんぎゃあああああっ!!」とリアルでは叫んでしまったほどに痛かった。
ああ、まだ尻がひりひりする。つか赤ちゃん肌はデリケートなんだぜ？お手柔らかに頼むぜナイチンゲール。つか泣きそうなぐらいまだ痛い。

泣いてないけどな?!

しかし産まれたての赤ん坊というのは声がまともに出ないもんなんだな、と気づく。言葉を出そうにも、んにゅ、とか、ふみゃ、とかやたらと不明瞭だ。まともに喋れないので念話を使うしか無い。目もまともに開かなくて周りが見えないので能力を使って見ている。

……つか、どんなチートな能力だよ。グランドマスターなんて呼ばれていたが、魔術の類もなにも才能は無かったのになぁ。つか、魔法を使えたためしなど無いのだ、俺は。令呪は使えるけど。

『つか、キアラは大丈夫か?』

少しぐったりしているキアラに言う。

「……ママは大丈夫で御座います。というか、お産というものはあのように……まるでリョナ物のような……。ひぎぃ感満載な体験で御座いました……」

疲れている様子ではあるが、ひどく満足げな笑顔だった。その笑顔の意味は俺にはわからない。

『なんだよそのひぎぃ感と言うのは』

つか要らん新語を作るんじゃねぇなどと思うが、イメージ的によく分かる表現なのがまたなんとも。

ひぎぃ感、なぁ。

「はぁ、でもやり遂げましたわ。マスター、生誕おめでとう御座います」

とはいえ、必死で俺の命を助ける為に自身のお腹に入れて頑張ってくれたのだ。そこは感謝しかあるまい。

『……ありがとう』

俺は素直にお礼を言った。

「いえいえ、どういたしまして。うふふふふふ」

チラリ、とキアラの目が俺ではなく、どこか隅の方を見たので、俺もそちらに意識を向けた。分娩室に何か影のようなものがいるのが見えてそちらの方を見てみる。能力で見ているので、気配や姿がおぼろげであっても関係ない。どうやら俺の能力は幻術や何らかの隠行の術などを見破れるらしい。

……カメラを構えた百貌のハサンがそこにいた。

『……百貌さん？あれ、居たの？』

全く会話にも加わっていなかったし、気配も消していたからわからなかったが、百貌さんはいつもの髑髏のマスクを外してにっこりと笑った。

「はい、マスターの大事ですから。ええ」

デジタルビデオカメラを構え、俺の方を撮影しつつ。

……ビデオ、カメラ……？

「ええ、キアラ殿の要望で。きちんと出産シーンはばっちり、頭が出てくるところから、ズームでマスターの産毛の毛穴までしっかりと高画質でくっきりと」

『……ちょっと待て、おい、動画撮ってるなんて聞いて無いぞ?!ちょ、おい!!』

「現代では出産シーンを映像に残して、子供が大きくなった時に親と一緒に見るのだとか。母と子の絆をそうやって共に再確認する……それは実に感動的な事だと思い、その重大なお役目、ええ、この百貌のハサンがここに完遂いたしましたぞ！」

はははははは、と百貌のハサンはじぃぃぃーっと俺の顔をカメラで撮ると「編集作業に回しますので！でわ!!」と、片手をシュタッ！と上げて颯爽と分娩室から走り去って行った。

おそらく、彼女は俺に何か言われる前に逃げたのだろう。

『ちょまっ?!何てモン撮ってやがんだぁーっ?!』

「うふふふふ、出産の一部始終をノーカットで高画質。感動の映像ですわ」

『いや、というか絶対あの、らめぇぇぇ！、とか、おほぉぉぉっ！、とかはカメラで撮られてるの意識してただろ？つか、途中から苦しさとかで演技する余裕が無くなっただけで!!』

何てモン撮ってくれたんだよ、おい。

「まあまあ、キアラは初産なんだ。やっぱり記念に残しておきたいっていうのはわかるしね？」
ロマニは苦笑しながらそう言ったが、いや、多分全然違うと思うぞ？キアラの思惑は絶対違う。
パラケルススは、
「サーヴァントのお産は非常に珍しいので、医療データとして残させていただきます」
などと言っている。正直な話やめてくれと言いたい。
「んふふふふ、後でママと一緒に見ましょうねぇ？」
『いや、遠慮する……』
つーか、自分が産み出された映像なんて見たくも無い。そんなもん記録に残されたら一生の黒歴史だと思うんだ、俺。
俺は頭を抱えたくなったが、抱えようにも残念だがまだ手足が上手く動かない。小さく手足がパタパタ動くのみで、ナイチンゲールに
『動かないで下さい。まだ産湯で洗っているでしょう？』
と優しく叱られた。
『あ、すみません……というか、あの、ナイチンゲールさん？つか俺の足っつーか、どこ見てんの？』

「いえ、股関節テストは不要ですね。ドクター、股関節脱臼等の心配は無いようです。あと、確かに男の子です」

ああ、そう言えば産まれてきた赤ちゃんの中には、産まれてくる段階で股関節脱臼を起こしている子が出ることもあるのだとか。まぁ、それは無いようだが、つかどこを見て男の子だと確認してんだよ、つか人の股間マジマジ見んな。

「ふふっ、そのうち前しっぽは立派になります。大丈夫」

『あのな、そういう事じゃないんだよ。つか前しっぽ言うな?!』

だが、俺の言うことなどまるで無視してナイチンゲールは優しく産湯から俺を引き上げると、てきぱきと柔らかなタオルで俺の身体を拭いて、そして布でくるんだ。

『ふおっ?』

布でくるまれた為に手足の動きが制限され、思わず呻くが、

「おくるみで包むのはまだ首が据わっていないのと、体温が下がらないようにするためですよ」

と、ナイチンゲールが言った。

なるほど、確かに頭が定まらないので不安だったがこれなら安定する。それに布地もほわっとした感じで暖かい。

『なるほど』

と、感心していると、ナイチンゲールは俺をキアラにほいっと手渡した。
キアラは俺を受け取ると抱っこして俺を覗き込んだ。まるで慈母のような雰囲気満載だ。なにこの優しげな笑みは。
しかしまぁ、アップで見るとデカいなぁ。俺が小さくなったせいなんだが。
『……赤ん坊の姿だと、みんなまるで巨人みたいだよなぁ』
俺はキアラに抱かれつつ、そう言った。
「ふふふっ、産まれたばかりですから。私には小さく感じますわ。赤ちゃん出口から出るときは大きく感じましたけど」
『……赤ちゃん出口とか……、いやなんでもない』
やぶ蛇をつつくのはよろしくない。そう、ぼかした言い方をしてくれているのだ。医学的な名称とか一般的な言い方とか、するといかにもヤバいからもうそれで良い。
「……マスター入り口、もしくはマスター出口」
『やめれ』
言うと思ったが、あんたそんなキャラ……いや、そんなキャラだった。殺生院キアラはそんなサーヴァントだった。なんかいつもと雰囲気違ったように感じたが、通常運転だわ、こいつ。
「マスター専用孕み袋穴？」

『めっさ人聞き悪いから止めなさい！』

はぁ、つか疲れているだろうに、無理矢理下ネタは止めなさい。

「はぁ、話をしてなければ普通に幸せそうに赤ちゃん抱いてる母親に見えるのになんだろう、君達ホント、シュールな会話してるよねぇ。仲良いのは良いことなんだろけど」

『俺だってんな会話したくねぇわっ!!』

と、ロマニに叫ぶようにそう言った時。

ビーッ！ビーッ！ビーッ！ビーッ！ビーッ！

と、けたたましくカルデアの警報が鳴った。

〔ロマニ!!サーヴァント召喚システムが暴走してる!!〕

館内のスピーカーからダ・ヴィンチ（ロリンチ）ちゃんの声が響いた。

『はぁ?!召喚システムが？』

「なんだって?!ここ数年以上、何度やっても作動しなかったのに?!」

ロマニは手術着とマスクをばっ！と脱ぐと、

「パラケルスス！後は頼む！何が起こっているかわからないけど、念のためマスターとキアラを安全な場所へ!!」

そう言って、ソロモン王の姿にその身を変えると、一瞬でテレポートして消えていった。

カルデアだよおっかさん（原初の母という意味で）

カルデアの召喚システム『システム・フェイト』は数十年前から全く機能しなくなり、それ以来全くサーヴァントの召喚が出来なくなっていた。

理由は不明ながら、おそらくは人理に危機が無くなったせいだと考えられている。

それ以降、人理継続保障機関・フィニス・カルデアは歴史観測を行うだけの機関として、ほぼ冷や飯食いと揶揄されつつも様々なサーヴァント達の能力や財力などに助けられつつも企業化することによって独立し、他の組織の干渉や横槍などをかわしつつ存続している。

それが出来ているのも、全てはマスターとサーヴァント達の血と汗と涙のおかげであった。

そう、独立するまでの道のりはとにかく資金集めに終始していた。

人理修復をしつつも様々な現代における経済活動をこなし、時には経済に強いサーヴァント達に助力を乞いつつ資金を集めたり、サーヴァント達や神話系サーヴァント達の残した遺跡の財宝をその本人達の承諾を得て発掘して資金にしたり、時には魔術系サーヴァント達の御守りや護符などの効果で世界中の宝くじを当てたりして資金を集

めたり。株にＦＸ、先物取引に油田開発、様々な事もやった。
全てはカルデアの運営の為に、である。
気が付けば、完璧に人理修復し終わって人類の未来が紡がれた後には、マスターそのものがカルデアの筆頭出資者となっていた。
幾多の世界的な事業で成功を納め、幾多の企業を手中に納め、マスターは世界有数の億万長者、いや、経済界に金字塔を築いた伝説の大金持ちになっていたのである。
マスターは得た財力でカルデア財団を全て買い取り、文字通りカルデアの党首となった。
もちろん問題が無かったわけではなかったが、その頃にはどこの如何なる組織、いかなる魔術結社、そして聖堂教会すらもカルデアの財力とそして保有するサーヴァント達の力の前に膝を屈した。
最初の内は影でマスターを『金の力で成り上がった、魔術すらも満足に使えぬ下賤の者』などと揶揄する者達も居たが、幾度となく世界はマスターによって救われ、人類は未だに霊長の座にある。その功績は如何なる者であっても認めないわけにはいかず、悪口はすぐに消え去り、彼を偉大なるマスターとして讃える声が鳴り響く事となった。
まぁ、今のカルデアの状況はさておき。
現在、休止して動かなかったシステム・フェイトが暴走していた。

システムフェイトが勝手に動き出したという事は、これは何らかの異変ではないか、とドクターロマニ、いやソロモンは普段は使うことの無い瞬間移動を使って、カルデアのシステムフェイトの前まで移動した。

システムフェイトは今は亡きマシュの宝具、円卓の盾を通じて発動する。その盾は今もマスターの部屋に飾られていたというのに、一体誰がその盾をシステムフェイトに設置したのだ?!ソロモンは何かこのカルデアに、また悪逆なる者達が入り込み、動いているのではないか、と思い魔力を解放して己のサーヴァントとしての姿に変身していた。異常事態故にそれもやむなし、正体を知られたとしてもこのカルデアを護らねばならぬ。

「くっ、マスターの死を好機と見たどこかの組織がまた動いたのか?!」

瞬間移動した先にはすでに副所長代理のダ・ヴィンチ（ロリンチ）ちゃんと、英霊として再び顕現したダ・ヴィンチちゃんが待っていた。

「ダ・ヴィンチ、状況を説明してくれ！シバの観測結果は?!」

「なんの問題も無く、異変も異常も観測されてはいない！何らかの干渉も人理的な災害も無いのにシステムフェイトは正常に作動している!!かなりの霊力と魔力が注がれている!!力の源は……紀元前……バビロニア?!」

フォン、フォン、フォン、フォン、フォフォフォフォフォーーーーーーン!!

召喚システムの光の輪が現れ、そして三つに分裂する。そして通常のサーヴァント召喚であれば有り得ない現象がそこで現れた。
三つの光の輪が、粒子を放ち、金に光り輝き、そしてまだ回って光を増している。
「くっ、反応がデカいぞ！ロマン、こんな召喚反応は未だかつて無い!!かなりのデカブツが出現するぞ!!」
ダ・ヴィンチちゃん（大）が叫ぶように言った。
「ダメです、システムフェイト、ダウン出来ない！動力を切っても勝手にエネルギーが注ぎ込まれて止められない!!くっ、魔力増大中、顕現化の余波が来る!!みんな伏せてっ!!」
ロリンチちゃん（ダ・ヴィンチ小）がコンソールをなんとか制御しようと張り付いているが、どうにも不可能のようだ。
サーヴァントの正体は不明だが、しかしその出現の余波は数値からしてこの部屋が吹き飛ぶレベルの衝撃である。ソロモンは二人のダ・ヴィンチを庇うようにして前に出ると、魔法障壁を展開しようと手を伸ばした。
と、そこに懐かしい声が叫ぶように言った。
「ダ・ヴィンチちゃん達！ドクターロマン!!下がって下さい!!」
すたっ!!と、何か小さい人型の姿が入って来て、そして言った。
「其は全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷……顕現せよ、『いまは遙か理想の城（ロー

ド・キャメロット）』おおっ!!」

それは、メディアの部屋から逃げ出したマシュのフィギュア人形だった。

有り得ない事に、そのフィギュア人形の持つ盾の宝具が発動、そしてそれは小さいフィギュア人形が張ったとは思えない、本物の宝具が発動したかのような大きな防御壁を展開した。

「ま、マシュ?!」

「みんな、下がって!!」

完全にマシュの宝具が展開したと同時に、システムフェイトはバシュゥゥッ!!と最大の光を放ち……。

ズドォォォーーーン!!と衝撃波が生じた。強大な魔力の奔流が、マシュの張った防御壁に襲いかかり、圧倒的な物理的衝撃を与えた。マシュのフィギュア人形はそれに耐えようと踏ん張るが、しかしさすがにフィギュア人形の身である。

「う、うわぁぁぁぁっ!!」

マシュが吹き飛ばされそうになったところを、ソロモンが幾つもの魔法障壁を作り出して、マシュの『いまは遙か理想の城（ロード・キャメロット）』に重ねて展開し、マシュのフィギュア人形を庇った。

「くっ、マシュ!大丈夫かい?!」

「は、はい、くっっ……!!」

ゴオオオオッ!!

光の奔流が吹き荒れ、二人はそれをなんとか防ぐ。やがて、その衝撃は徐々におさまった。

だが、部屋のあちこちが吹き飛び、そして壁はまるで爆弾でも爆発したかのようにめちゃくちゃになっていた。

埃がもうもうと垂れ込め、そして火災警報器のブザーがけたたましく鳴った。天井のスプリンクラーが一斉に水を撒く。

「げほっ、げほっ、ううっ、しかし何が……?」

ダ・ヴィンチ大小二人が咳込む。ソロモンは召喚システムの方へ一歩進み、用心深くいつでも魔法を使えるように身構えた。

強大な魔力反応が召喚システムの円卓の上にいるのを感じて、一瞬ソロモンは身震いした。スプリンクラーの水ではない、冷や汗が知らず額から流れ落ちた。

かのソロモンであっても到底太刀打ち出来ぬほどの力を秘めた存在。

スプリンクラーの水によって瓦礫の埃がどんどん晴れていく。

召喚陣の上のサーヴァントの姿がだんだんと露わになった。

まず見えたのは、長く頭に生えた二本の角。山羊の如き角は左右に。そして面長な美

しい顔と、そして両腕を交差させて胸を隠すかのような姿勢をとる、その身体。
『……我が名はティアマト。喚ばれてはいませんが、来ちゃった……。うふふふふ……って、げほっげほっげほっ、うっぷっ、なにかここ埃だらけ……ううっ、ひどいわね……げほげほげほっ?!』
そう、サーヴァントとして、有り得ない存在が、ここに顕現したのであった。
「……あの、すみません、帰って下さい」
思わず、ソロモン（中身ロマン）はジャンピング土下座して帰還を願った、という。

――――――――――――――――――――――――

母親というものは非常に厄介なものである。
例えば、遠く離れた地で一人暮らししている大学生がいたとしよう。
学費を稼ぐための深夜のバイトからアパートに疲れ果てて帰ったら寝よう、もうダメ、休まないと……という感じで部屋に帰ったら、郷里からオカンがやってきていて勝手に掃除していて、秘蔵のエロ本が山積み、そんで説教くらいながら正座させられて……的な厄介さである。

いや、その程度のスケールで収まらない厄介さなのだ。
なにしろ生きとし生けるもの全てのおっかさんが押し掛けて来たのである。
しかも、かつてメソポタミアにおいて戦った事のある、ビーストＩＩにして強大な力を持つ創世神の一柱、女神ティアマトなのである。
そのティアマトはソロモンにお説教をかましていた。
「いいですか、まったくあなたは反省しているのですか?!あなたの下僕の悪魔だとかなんだとかは、目上の者に対して……云々……、そもそもこの星の全ての生命の母たる私にろくでもない……云々……そもそも、あんな醜い姿に変えられて……云々……聞いているのですか?!」
「はい、全くその通りです！私のしつけがなっていなかった為に、始祖神様にあらせられましては非常に御迷惑をお掛けいたしました!!これこの通り、魔神柱の不始末は私の不始末、誠に申し訳ありませんでしたぁ～っ!!」
ソロモン・ロマニ・土下座右衛門・アーキマン、という新たな称号を得てしまうかのような見事な土下座。
これがかつてのソロモン王だと思いたくない土下座っぷりであった。
『えーと、これ、一体どうなってんの?』
とりあえず警戒態勢が解除され、ダ・ヴィンチ（大）に呼ばれて応接室に来てみれば、

ティアマトに土下座するソロモン王という何かろくでもない事態がそこにあった。
「はい、先輩。メソポタミアの一件でビーストにされた苦情をドクターロマニに言って糾弾している最中です……」
はて？何かとても懐かしい声がどこからかしたぞ？とキアラに抱き抱えられているマスターは念視で辺りを見回した。
『……俺、どうかしたんだろうか。今、妻の声がしたような気がしたんだが？』
辺りを見回せど姿は見えず。念視は気配を消そうが光学ステルスを発動しようが、霊の類だって捉えられる。
なのに、声の主はいない。
「いえ、ちゃんと私はここにいますよ？先輩」
『……いや、見えない。ダメだキアラ。産後の疲れとか緊急事態とかで疲れてるみたいだ。あとマシュが好き過ぎて幻聴まで……』
「いえ、マスター。テーブルの上です。ほら、そこに小さいマシュさんが……」
「はい、お久しぶりですね、キアラさん」
『……あ、いた。って、いやいやいや、それはメディアが作ってたマシュのフィギュアじゃないか?!つかなんでまた……。いや、俺を担いでもなんにもならんよ？……はぁ、というかなんて悪戯だよ』

「いえ、悪戯ではなくてですね、異変というかカルデアにかなり大きな魔力の塊が召喚されてこちらに来そうに……まぁ、それはあちらのティアマトさんだったんですけど……その魔力の余波でなんとかこの人形サイズなら霊器を発現出来たので駆けつけたのです」

『……へ？じゃあ、そのフィギュアん中身はマシュ？マジ？俺の奥さん？愛妻？俺のマシュ？』

「……あの、まだそのように思っていただけて、少し恥ずかしいというか……。ええ、はい、私です。マシュ・キリエライト・藤丸、でしゅ、っと舌噛んじゃった、ええ、マシュです」

『……その舌の噛み方、確かにマシュ!!』

「はい、霊器の反応も確かにマシュちゃんで御座います。小さくなっておりますけど……」

キアラも困惑していた。

ティアマトが無理矢理召喚システムに介入して来るわ、マシュはティアマトが過去からこちらに放出していた魔力を利用してフィギュアに乗り移って来るわ、マスターは赤ん坊だわ、しかもマシュは赤ん坊になってるマスターにも関わらずツッコミを入れないわ、ソロモン王はティアマトに土下座してるわ、ダ・ヴィンチちゃんは二人いるわ。

もう読んでいる方もこのカオスな状況にわけがわからなくなっているだろうことは想像に難くない。
そう、書いている人もノリだけで書いてて、だんだんわけがわからなくなっている。
そう、ティアマトがカルデアに来た理由もわからなければ、マシュがフィギュア人形の中に入った理由もわからない。
故にその辺はまた次回に持ち越す、そういう引きである。
ではまた次回っ!!↑おざなり過ぎ。

母の愛より強いものは無いらしい。

カルデア内の召喚ルームの異変に、まず駆けつけたのはギルガメッシュであった。
なにやらかつての古代メソポタミアで感じたのと同様の強大な魔力を感じ、今起こっている異変が並大抵の異変では無いと思って駆けつけたのだ。
そして、カルデアの召喚の根幹を成す召喚システムを内包した召喚ルームの堅牢な壁に内側から何か爆発したと思われる幾多の亀裂が走っているのを見た。
「くっ、此はなんぞっ?!」
またもや、カルデアに仇なさんとする不埒者がテロでも行ったか?!とギルガメッシュは思い、半壊した亀裂から部屋の内部を覗いた。
そこで彼は聞いた。
そう、ソロモン王に説教をかましているティアマトの声を。
ギルガメッシュはビックウッ?!とした。
「なんだと?!この我が畏れているというのか……?!強大な魔力もさることながら、誰かを糾弾、否、この声は……?!」
あたかも金縛りにあったかのように、ギルガメッシュの身体が硬直し動かなくなっ

た。

「良いですか！王たるもの……云々……下僕（しもべ）の不始末は王の不始末……うんたらかんたら……そもそもあなたは……どうたらこうたら……ですから……なんたらかんたら……」

その説教は、ウルクの王ギルガメッシュの心にもグサグサと突き刺さる。

「ぐぉっ、ぐふっ、ぐぁぁぁぁっ……、なんという説教……あたかも母上に叱られているかのような……!?」

そう、ティアマトの声には様々なスキルやバフがある。むやみやたらに様々な効果が付くのである。しかも敵味方関係無しで無差別に効くのだ。さらにレジストもしにくく、いかなる生命体そしてサーヴァントにも効く。

しかも叱られているのはソロモン『王』なのである。

『王』に対して行われている説教であるため、同じ『王』属性であるギルガメッシュにもピンポイントでこれでもかっ!!というぐらいに効果を発揮していた。

原初の母神、全生命体のおっかさんの説教は例え傲岸不遜なる王であってもレジスト不可能。人はやがて母親から離れて一人立ちするとか云々言っていたギルガメッシュであっても、それはグサグサと心と精神に突き刺さり、耐えきれずその場に崩れ落ちた。それはあたかも土下座をしているかの体勢になっていた。

「ぐはぁっ！」

そう、闘う事もなにも出来ずに説教の余波だけで、金色の王ギルガメッシュ、ゴールドキングドゲザー。

「……あんた何やってんのよ？」

やはり、古代メソポタミア由来の魔力を感じ取ったイシュタルがジャパニーズドゲザースタイルで突っ伏しているギルガメッシュに言った。

「ぐぅぅ、ぅ、イシュタルか。この扉の向うの存在は危険だ……。王殺しどころでないこの強制力、否、この『矯正力』は『オカン力（ちから）』!!まさしくこれはオカン・オブ・ザ・オカン力（ちから）っ!!……げふぅ……っ……」

汝、金色の鎧をまとい半壊された部屋の前にてドゲザーすべし。

そんな王のぶっ倒れ方にイシュタルは、きょとん、とした。

確かに何か懐かしい魔力を感じるものの、王ではないイシュタルである。ギルガメッシュのような矯正力とやらは全く感じていない。

さらにイシュタルが来た辺りでタイミングよく説教が終わったので、変な『矯正力』は途絶え、しかも激高していたためにダダ漏れだった魔力は急速に収束したため、やんわりと漂う優しげな魔力のみがドアの向こうから漂って来た。

「あら？この魔力は……げげっ、まさか母さん？」

壁の亀裂から、ティアマトの姿が見え、イシュタルの目がまん丸に見開かれた。
「やばっ?!逃げ……」
もちろん、イシュタルは逃げようとしたが、そこへやはり間の悪いもう一人のメソポタミア産冥界の女神が駆けつけて来て、イシュタルに声をかけた。
「イシュタル!これは一体何が?!……って……?!」
エレシュキガルはイシュタルの名前を言ってしまい、ティアマトに気づかれてしまった!
「このおバカーっ!!見つかったじゃないの!!」
壁の向こうのティアマトと目と目が合って姉妹二人でビックウッ。
蛇に睨まれた蛙の如し。二人ともあのバビロニアでの最終決戦でのティアマトのその恐ろしさと強大さを嫌と言うほどに思い知っている。もはやトラウマレベルでその恐怖と絶望を刻まれている。
ティアマトは、すーっ、と足を使わず滑るようにドアへと向かって、普通に廊下から出て来た。
その姿はファム・ファタール、つまり頭脳体の時の姿に酷似した姿で、身長約１６０～１６５センチ程のサイズである。
だがそれでも、その存在は紛れもなくあのティアマト。霊基もそれそのものなのだ。

「「ひぃぃっ?!」」
女神二人は思わず普段仲が悪いのに抱き合ってその身を竦める。
しかし、ティアマトはにっこり笑って某蛇のコードネームを持つ伝説の傭兵よりも早く軽やかにＣＱＣ顔負けの滑るような動作でその二人をそっと抱きしめた。
そう、これは伝説のオカンＣＱＣ!!
二人の姉妹神は無論逃げられなかった。
「怖がることは無いのよー?大丈夫、大丈夫よー?おかーさんよー?あの時は怖がらせてごめんねー?」
「え?」「へ?」
まさか抱きしめられるなどと思わなかったイシュタルとエレシュキガルは目を点にした。そりゃあそうだろう。二人は彼女を封印した神々の子孫であり、そしてあのバビロニアでは彼女の討伐に力を貸しただけでなく、やはり直接それに関わっている。
恨まれていてもおかしくないのに、まさか抱きしめられるとは。
「ティアマト母さん?」
「ティアマトお母様?」
「そうよー?おかーさんよー?よしよし、よしよし」
両手で二人を抱えつつ優しげな声でなでなで。

「ふにゃ……」「ふひゃ……」

ぱたり。

二人の女神はティアマトのそのなでなでによって倒れた。それはそれは安らかに。

恐るべしオカンＣＱＣ！スキルでもなんでもない『おかーさんのなでなで』のみで二人の女神を撃破してしまった!!

そう、それはあたかも某動物王国のムツゴ□ウ氏のスキル『よーしよしよし』に匹敵する、いや、それすらも超えるだろう効果を持っているのだ。

そう、オカン・オブ・ザ・オカンの愛のこもったナデナデはもう非殺傷兵器レベル。撫でられただけで皆、気持ちよすぎて夢見心地に安堵し、寝てしまうのだ!!

始祖の母神最強。何しろ母の愛こそが最大の強さなのだから（なんか違うような気もするが）。

「あらー、寝ちゃった」

ぽてちん、と寝てしまった女神姉妹にティアマトも、「やりすぎちゃった失敗失敗」とペロリと舌を出しつつテヘリ。だが愛しすぎての意図せぬ犯行なのである。致し方なし。

「おふぅっ、貴様、ティアマトなのか……一体何をしにカルデアへと来たのだ？ゲフッ……」

臥したギルガメッシュが、なんとかオカンの説教の効果に抵抗しつつ、ティアマトを睨む。非常に苦しそうだが、余波でこれである。ならば直接食らったソロモンはおそらくひとたまりもあるまい。

「あら？あの時の金色のやんちゃ坊や？えーと、どうしたのかしら、なんでそんなところでうずくまってるのかしらぁ？ぽんぽんぺいん？」

動けないギルガメッシュに歩み寄りティアマトはよいしょっとドゲザーなギルガメッシュを表返し、その腹を撫でてよーしよしよーしよし。

「ほーら、痛いの痛いのトンデケー」

「や、やめろっ、おい?!……あふん……」

ぱたっ。

ギルガメッシュ、ハイパーオカン力（ちから）により、安堵の敗北。とどめをさされてしまったようだ。

「あ、寝ちゃった。まぁ、疲れてそうだったから良いわよねぇ。うん」

「良くない気がするよ？ティアマト」

いつの間にか来ていたエルキドゥが、なんか（ーー；）という感じの表情でそれを見ていた。

「あら、エルキドゥ……だったかしら？まぁ……息子達の創造物だけど、そうね、あのと

き以来だから久し振りになるのかしら。ちょっと違うような気もするけれども。はぁ、ちょうど良かった。なんか撫でたらこの子達寝ちゃったのよ。しょうがない子達よねぇ？」

「……はぁ、あなたに理性があって良かったけど、もう少し力を制御しなよ。危害を加えるつもりが無かったのはわかってるけど、あなたの雰囲気だけで並みのスキル以上に効いてしまうんだからね」

「うっ……やっぱり力漏れすぎ？単に愛でてあげようと思っただけなのだけれど……」

「だだ漏れ。サーヴァント化してるけどそれでもまだ強すぎるんだよ。後でギルガメッシュの宝物庫から力を制御するようなものを借りて渡すから、不用意な事はそれまで控えとくんだね」

エルキドゥはそう言ってギルガメッシュを肩に担いだ。

「まぁ、とりあえずギルは部屋に寝かせればいいか。男寝りに寝てるだけだし」

ぐわーっ、ぐわーっ、ギルガメッシュは豪快にも鼾をかいて寝ている。普段寝ている時もスタイリッシュな黄金王がここまでリラックスして寝ているのはその友であるエルキドゥもはっきり言って見たことがない。（※男寝りに寝る：男らしく豪快に寝ている様）

ふむ、とエルキドゥはイシュタルとエレシュキガルを一瞥したが迷うことなく無視し

た。

彼とイシュタルは犬猿の仲であり、はっきり言って運んでやる謂われなどないとばかりに、エルキドゥはすたすたとその場を離れてギルガメッシュを運んで行った。

とはいえイシュタルに攻撃をかまさないだけでも少し丸くなっているのだと好意的に解釈する事もできるだろうが、もしくは始祖母神であるティアマトを怒らせるような事を避けただけなのかも知れない。何しろイシュタルはティアマトの直系の女神であり、娘のようなものなのだ。実際には曾孫、いやもっと世代が離れているかもしれないがティアマトに向かってババァなどとも言えない。怖いしね？

「なんか被害甚大だよね。いや、危害とか加えるつもりじゃないというのはわかってるんだけど」

ダ・ヴィンチ（大）がドアから出てきてそういう。その肩には説教を喰らって気絶したソロモンが担がれている。

『……つか、どうすんだよこの召還ルーム。あと、イシュタルとかエレシュキガルとか』

「異変に駆けつけてくれたんだろうねぇ。しかし、なでなでされただけで轟沈とは。原初の母恐るべし、だねぇ」

『はぁ……。というか、産まれたてなのに胃潰瘍にでもなったらどうしてくれるんだよ……』

マスターはキアラに抱っこされながら、「バブゥ……」とため息を吐いた。

マスター語り～マーリン死すべし。事件

半壊した召還ルームではなんだと言うわけで、俺達はティアマトを連れて応接室に移動した。

そして応接室に着いたとたん、俺達はゲンナリとさせられてしまった。

応接室にはマーリンがすでにおり「いやぁ、遅かったね？」などといつもの胡散臭い笑みを浮かべてニヤニヤしつつ、おそらくはエミヤが作ったであろうウルク風パンケーキ（復刻版）を食べていた。

なお、余談ではあるがエミヤは完全に異変収束したここ数十年の間の年月を通じて失われた料理や菓子などのレシピを追い求め、そして復刻させるという偉業を達成しており、それらのレシピはカルデア財閥が運営しているレストランチェーンなどに提供されている。

まぁ、それはさておき。

俺は非常にげんなりした。

「きゃー！これ、食べるのって初めてなのよねー」

などとティアマトははしゃいでいる。

そう、ケーキはいい。紅茶もいい。俺だって大好きだった。赤ん坊になったからまだ食えないけど！

しかしマーリンはいただけない。あと、俺が食うことの出来ないウルク風パンケーキを幸せそうに喰らっているその姿、殴りたい。

そしてこの用意周到さ。

まるでホームズやモリアーティがやるような、人の行動を予測、推理、計算した上であらかじめ用意したかのような、そんは舞台設定のようだ。だが、ホームズやモリアーティはこの件に関わっていないだろう。何しろ、カルデアの機材に何かあったら、彼らの仕事は山盛りに増えてしまうのだ。

故にそれは無い。

何しろホームズはカルデア財閥の顧問探偵だし、モリアーティはなんと財務と法律関連の統括者なのだ。

特にモリアーティはこのあと、召還ルームの修理の予算をいかに出すかで頭を悩ませる事だろう。可哀想に。いや、俺も他人事ではないのだが。あと、死んだ俺（赤ん坊になってるけど）の保護者として母親になっているキアラもまたそれに関わらないといけない。そして、産まれたばかりの俺もいろいろと指示しなければならないと来ている。

いや、全カルデア財閥系の様々な部署にだって迷惑掛かるし、それこそ運営に携わっ

ている多くのサーヴァント達や通常スタッフ達にだって迷惑掛かるんだよ。
これが他の組織によるテロで無くて良かったけど、それにしても非常にたちが悪すぎる。
そう、それもこれもみんなマーリンが悪い!!
『……あんたの差し金か?』
そうこの男の事だ。今回のティアマト出現もこの男ならばやってしまっても不思議じゃない。というか普通ここまでやられたらもう誰でもわかる。
「いやぁ、本当のところ話を持ちかけてたんだけど、来てくれるとは思って無かったんだよ」
マーリンは悪びれずそう言ってあはは、と笑った。
絶対嘘だ、と俺は思った。絶対来るように仕向けたに違いないのだ。この男はそういう奴なのだ。
「君はティアマトにマスター君の母親になってもらうつもりだったのかい? 母胎という意味だけど」
ダ・ヴィンチちゃん（小）はそう言ったが、しかしその首は少し傾げられている。なんとなく違うかなーとか思っているのだろう。なお、ダ・ヴィンチちゃん（大）はティアマトの説教にてぶっ倒れたソロモン（ドクターロマニ）と、なでなで攻撃を食らって

やはり気絶したイシュタルとエレキシュキガルを見てもらっている。
確かにティアマトならば、俺を再生させる母胎としての条件には合っている。
だがもうすでに俺はは産まれた後なのだ。果たしてこの男がそんなミスをやらかすだろうか。
答えは『否』だ。
確かにマーリンは抜けたところはあるのだが、ロマニならともかくこのマーリンのそれは完璧な演技か、想定外の事態が起こったかのどちらかで、後者なら最初から「ゴメンゴメン、予想外だ」とか悪びれずに言うだろう。
ダ・ヴィンチ（小）が、ふーむ、と唸るように言った次の瞬間、応接室のドアがバン！開かれ
「それは無いだろうね。君達が思っている通り時間が食い違い過ぎる」
と、誰あろう名探偵ホームズが登場した。
ホームズは小さくなったマシュの姿を見て少し驚いたようだったが、久々に会った自分の物語のシリーズの愛読者に「久し振りだね」とウィンクすると、すたすたと開いている席にやってきて座った。
「はじめまして、ミセス・ティアマト。私はこのカルデアの顧問探偵シャーロック・ホームズです」

ホームズは自己紹介をすると、その席に置いてある紅茶に口をつけ、さらに口を開いた。

「ふむ。で、マーリン。私やモリアーティには君の企みはすでに予測済みだ。そしてもうそれは確信に変わっている。君の計画はそれ自体は悪くはないがやはりあらかじめ話をしてもらわないと困るんだ。私はカルデアの治安部的な部署に今は居るし、モリアーティは財務、法務的な部署に居る。その辺の辻褄合わせも必要だからね？」

ホームズはやたらとにっこりしたイイ笑顔を見せた。この場合のイイ笑顔とは、少しゴゴゴゴゴゴ……と凄みのある笑顔という意味である。つまり〔しまいにゃシバくぞゴラァ？〕である。

おそらく彼は治安を乱されて怒っているのと、あとはカルデア虎の子の召喚システムある召喚ルームを半壊させられた事、そしてその修理やら新たなサーヴァントとしてはっきり言ってドエラいもんが来たのと。様々な面でホームズは怒っているのだろう。

それに彼はウチの顧問探偵なのである。

おそらくは俺が死んだ事で……もちろん偽装なのたが……様々な組織がまたこのカルデアにちょっかいをかけて来はじめているのだろう。そういうピリピリしているときにこのような騒動を起こされるとはっきり言って腹も立つというものだ。

そう、いつも冷静沈着にして飄々と、それでいて淡々と全てを推理の元に解き明かす

彼であっても、である。
「それは悪かったと思っているよ。だけど一か八かの賭けに近かったんだ。何しろ召還システム、カルデアのシステムフェイトにこの星が掛けていた封印を破れるだけの魔力を捻出できるかどうか、わからなかったんだよ。だから確証が得られるまで、誰にも言えなかった」
　下手に希望を持たせるのは私の信条じゃないからね？とマーリンはホームズの笑顔のまま怒っているような表情を直に受け止めながら言った。
　ホームズは、ふうっ、と息を吐くとコワい笑顔をやめて、いつもの冷静沈着なホームズに変わった。
　おそらく話の核心が近いのだろう。
「……それはわかる。システムフェイトになんらかの封印が掛かっていたのも推測していた。今回の召還ルームの半壊もその封印を強引にこじ開けた為の反動だと言うこともね。だが……。何故ミセス・ティアマトなのか。それが問題なんだ。何故だね？」
「ふむ、それはだね。必要な霊力が他のサーヴァントでは足りないからだよ。確かに足りない分を外部から補給する手段も考えたけど、どう計算しても私やソロモンを足しても不可能だった」
　マーリンはそう言った。

はっきり言おう。ここにいる皆を置いてきぼりにするような会話だった。
「ですが……もうマスターは何の異常も無く産まれておりますが？」
キアラがそれだけでは何か不都合があったのか？と俺を見て少し不安そうな表情を浮かべる。
もちろん俺には何の問題も無い。近頃はこういう表現は差別だとか何だとか言う向きもあるらしいが五体満足で俺は産まれている。
だがそれとは別の問題があるのではないか？とキアラは思ってしまったようだ。
俺はそれを否定した。
『いいや、俺には何の異常も無いぞ？』
と。キアラはなんというか、らしくないような表情であるが、まるで本当に子供を案ずる母親のような感じだ。おいおい、調子狂うなぁ。
「しかし、この二人が話しているのは、そういう事なのでは？」
そんな不安そうなキアラの様子を見かねてケーキを美味そうに食べていたティアマトがホームズとマーリンの会話に口を挟んだ。
「ちょっと君達。そこの新米おかーさんが不安になってるじゃない！」
ティアマトの剣幕におどろいた二人はビクゥ！として慌てて説明をし始めた。
「あ、ああ、失礼、ミセス・ティアマト。ミス……いや、この場合はミセス・キアラと呼

ぶべきか。マスターについてはもちろん何の問題は無い。今、我々が話していたのはマスターの事じゃないんだ」

「そ、そうなんだよ、マスター君の再生は問題は無いんだ。あったら最初から私は止めてるとも。今回の話はマスター君の再生じゃない。カルデアに必要なもう一人について話をしているんだよ。勘違いさせたなら謝るよ」

なんか、オカンに叱られた子供みたいな反応だよなぁ、とか思ったが、いや、これはそれそのものだろう。なにしろ地球上の全生命体の元になった女神のお叱りなのだ。

「……よろしい！というか、不安とか心配はものすごくストレスになるのよ？良いおっぱい出なくなったり、詰まったり腫れたりとかの元になるのよ?!まったく、これだから男の子は……！」

ぷんすか、とティアマトは怒っていたが、いやいや、まさか。キアラのおっぱいだって？出ないだろ、それは。

……出ない、よね？

俺はそっとキアラの顔を見たが、それよりも俺の事ではないと知った安堵の方が大きかったのか、後の話は全く意識の内に無いようだ。

というか、では誰の再生なのか？とかそういうのも気になっていないらしい。

『……結局、誰を再生させるのか？って教えてくれないか？いや、見当はもうついてるん

だが』

俺は、テーブルの上でケーキを貪っているフォウさんを羨ましそうな目で見ているマシュに目を向けた。

つか、フォウさん来てたのかよ。

「それはマシュちゃんだよ」

マーリンはそう言って苦笑し、

「もっとこう、手口とかいろいろ話したい事が有ったんだけどなぁ。結構ティアマトをカルデアに連れてくるまでにいろんな苦労と手間暇がかかったんだ。それこそソロモンの目を逃れつつ、この星の封印を解除するためにメディア君の宝具を拝借したり、メディア君の秘蔵のマシュフィギュアにティアマトの魔力を送る回路を作って霊基を呼び出したり、円卓の盾を警備のハサン達やニンジャ達に見つからないように君の部屋から召喚ルームに運んだり」

『……メディアさん達の激怒案件な件について』

俺は身体が動くならば頭を抱えたい衝動に駆られた。

つまり、マーリンは俺達の知らないところでマシュの復活の為にこそこそと動いていた、というわけだ。

召喚システムに封印をしているこの星の意思の強制力をメディアさんのルールブレ

イカーを使って解除し、さらにメディアさんの作ったマシュフィギュアを触媒として、ティアマトの魔力や霊力を注いでマシュの霊基が宿るように仕向けて、さらに古代のバビロニアに空間を繋げてサーヴァント化したティアマトを来やすいようにしつつ……。

「こう見えて結構大変だったんだ。異変レベルに極力ならないように、人理を逸脱しないように、って遠回りな方法を取りつつ、一人で黙々と作業をしていたんだよ。最後の最後にこの星の強制力があれほど掛かったのは計算外だったけどね」

マーリンは少し自慢げに「はははは」と笑ったが。

ホームズは紅茶を一口すると、何も言わずに指をパチン！と鳴らした。

バン!!と応接室のドアが勢いよく開かれ、素早い何かが入ってマーリンの座る席の後方へと向かうとマーリンの首根っこをむんずと掴んだ。

「……あれ？」

マーリンは恐る恐る、自分の首根っこを掴んでいる人物を確認した。

あれはなんだ?!鳥か?!蛇か?!ラムフォリンクスか?!いや、ケツァル・コアトルおねーさんだっ!!

「チャオ～？マーリン」

人の良さそうな笑顔でケツァル・コアトルは笑っていた。だが、その顔にはなんというか少し影があり『にっこり』というよりは『濁り（にっごり）』という感じだった。

「へ？あ、ああ、ケツァル・コアトル。ちゃお？」
「いろいろと言いたい事、ありまーすケド、さぁ、おねーさんとイキマショーネ？」
ぐいっ、とマーリンを持ち上げるケツァル・コアトル。
「え？え？ええーっ?!いや、なんでっ?!いや、わからない?!なんでっ?!」
「私の会心作マシュちゃんの１２分の１フィギュアに細工した……いえ、それは許しましょう。マシュちゃんがそこに居る……それで許しましょう。それにマシュちゃんが復活する、ええ、素晴らしいですとも。ですが。私の宝具を盗んだ罪は許しがたい……！」
ドアの向こうには、百貌のハサンや呪腕のハサン、それに風魔小太郎、加藤段蔵を連れたメディアが怒りに震えながら立っていた。
「このカルデア警備隊の我等をよくぞここまでコケにしてくれたな……」
ゴゴゴゴゴゴ……!!
ハサン達や忍者達もかなり怒っている。
それに、なんとか回復したソロモンもとい、ドクターロマニの姿のロマンもまた立っていた。
「君のせいで……いや、ティアマトの説教は正当な説教だけど、カルデアの召喚ルームは半壊、廊下もボロボロ……。ふふ、ふふふふふ、今日という今日はもう、勘弁ならない

!!」

普段温厚なロマニすらも!!

「ソーユーわけデース？観念して……地獄へ行こうネ？」

ギシャッ！と、ケツァル・コアトルは笑い顔をものすごい悪そうなゲス顔に変化させると、そのままマーリンを担いでドアの向こうへと去った。

「そう、私達はその後、マーリンの姿を見ることは無かったのです」

ダ・ヴィンチちゃん（小）は縁起の悪いモノローグをにこにこ顔で言ったが、俺にはあれが最後のマーリンとは思えなかった。そう、第二、第三のマーリンが……。

「いえ、先輩、そっちの方が縁起悪い……あれ？」

そんなこんなで、どっと疲れたが、マシュが復活する事になったので、それはそれで良かった良かった……なのか？

モリアーティ語り～母に感謝、父は知らないケド。

古代バビロニアの神話『エヌマ・エリシュ』の冒頭はこのように綴られている。

『上にある天に名は無く、下にある地にもまた名は無かった頃。

はじめにアプスーがあり、すべてが生まれ出た。

混沌を表すティアマトもまた、すべてを生み出す母であった。

水はたがいに混ざり合っており、大地は形がなく、濡れた場所も見られなかった。

神々の中で、生まれているものは誰もいなかった』

ティアマトは母なる海、その夫となったアプスーは淡水を意味し、それは互いに混じり合う河川と海で原初の生命が生まれたという。

考古生物学においても原始生命の発生は、山の土の様々な養分を運ぶ河川の水と海のちょうど混ざり合う所で最初の細胞を持つ生命体は生まれたと考察されており、逆を言えばエヌマ・エリシュの記述の正しさを現代人は数千年もかかってようやく実証した、という風に捉えるべきなのかも知れない。

というか、メソポタミア文明とかシュメール人とか本当は宇宙人だったんじゃね?!とか、超科学文明があったとかオカルティスト達に言われているのは紀元前の書物にそう

いう事が載っていたりするからだろう。
まぁ、ギルガメッシュ辺りが聞いたら、「愚か者め！人類の学問や物事の本質は変わらぬ!!古代が現代に劣るというのは現代の愚物どもの驕りでしかないわ!!」などと怒るのではないかと私は予想したりなんだり思うわけなのだネ。
それはさておき。
ティアマトの話である。
ティアマトは本来は非常に寛容な性格をしていたと伝えられている。ただ、どれだけ寛容だったのかと言われれば太古の神性であり、その程はわからない。
なにしろ、時代によって寛容の物差しなどかわるのだ。例えば日本の首狩り族と名高い戦国のサムラーイ達の中での寛容な人物と、平和な近代の日本の中での寛容な人物では、その寛容さの程度は変わるのと同様だと言えば理解してもらえるだろうかネ。
いや、これは例えが悪い。別に私はティアマトを侮蔑したりするつもりは無いし、当時の神々を野蛮だとは言うつもりも無い。もちろんサムライ達もだ。異文化の精神性というのは推し量るのが非常に難しいと言っているだけなのだヨ。
……とはいえホームズめ、自分は調べることがあるから後は宜しくだの言いおってからに。事情聴取などという仕事は本来、君の仕事なんではないだろうか!!
正直言って怖いじゃないか。太古の存在というのは現代人とはその思想も思考も

違っているし、人類が生まれる前どころか生命の起源にすら遡るような存在なんだぞ、このティアマトは。

つかまだ理性があるし友好的なのは見ればわかるが、それでも単体で世界を破壊出来るような存在なんだぞ。犯罪計画練ってコセコセ準備してなんとか地球を破壊するような計画をした私なんぞとはそもそもレベルが違う!!

それに私や財務と法務が今の仕事だってーの!!仇敵に自分の仕事を丸投げとか何を考えてんだよっつー話でだ。なんかこう、カルデアに来てからやたらと悪の教授という私のキャラが薄らいで、ともすればマスター君の執事とかマスター君の先生とか、そういうポジにいるような気がするんだヨ。

……まぁ、その地位は、やぶさかでは無いな。というかむしろ良ポジだな、いや実に悪く無い、うん。

まぁ、今更犯罪をやらかすのはネ、マスター君の手前……いや、実のところは現在も世界中の悪の組織はそこそこ動かしてるんだけどサ?カルデアの運営を妨害するような組織を排除するように動かしてたりするんだけどサ?そういうのも、抑止力としては必要だったわけなのだよ。極力はカタギさんにゃあ、迷惑かけねぇ方針でやってますけどネ。

……あれ?やっぱり私は悪の首領だな、うむ。

まぁ、脱線ばかりしているが、悪の教授、犯罪界のナポレオンと言われた自分のアイデンティティが近頃揺らいでいる気がして、こんな風に思考をしなければ自己確認がし辛くなっているのだよ。

はぁ、近々、ちょっと敵対組織をぶっ潰すように手下を動かして憂さ晴らしでもやるかネ。そろそろ連中もカルデアにちょっかいかけてきているしネ？

……そんな事はさておき。まぁ、話を戻そう。

ティアマトが子供達を溺愛していたのは確かだ。

夫であったアプスーに子供達が叛乱を起こした時にも彼女は子供達を愛するが故にアプスーに加勢しなかったという。

だが、その矛先が自分に向けられた時には、悲観して抵抗をみせたが。しかし、どうもその辺がおかしいのだよ。

いや、バビロニアの特異点でのあのティアマトの戦闘能力は記録で見たが、たとえ聖杯の力が加味されていたとはいえ、あんなデタラメなものに神々が太刀打ち出来たとは思えない。

神々のサンプル的な存在は正直私も知りはしないが、あのティアマトにはたとえ魔神柱が何本束になってかかって行っても敵わないだろう。かのゲーティアでさえも。

私の計算では少なくともそう出ている。

うむ、わからん！というわけでティアマトさん本人に聞いてみよう。
「ティアマトさん、本当の所その辺どうなんでしょうかネ？」
「ええーっ？それを私に聞いちゃうのぉ？というかぁ、デリカシー無さ過ぎよぉ？それ」
「いやまぁ、確かにそうですよネー。まぁ、事情聴取のついでにやはり古代の神秘の母神から話を聞いてみたい、というわけでしてネ？」
「ん～、もう、仕方ないなぁ。当たり前の話、私がいれば子供達が迷惑しちゃうじゃない？でも無抵抗に、っていうとおかーさんの沽券に関わるってモンでしょ？その辺でちょっと意地悪してみたのよ。……たしかに悲しくはあったけど！ものすごく寂しかったけど！おかーさんだもの。子供達の行く末を願わないわけはないじゃない？」
『意地悪』とティアマトは言うが、伝説の通りであるならばかなり厄介な１１の魔獣を生み出して新しき神々を脅かしたという。バビロニアの異変の際、ティアマトは『ラフム』と呼称された魔獣のような者を人を再び取り込んで産み出したというが、あれでも厄介どころの騒ぎでは無かったという。記録映像とその『ラフム』のデータを私も見たが、正直、マスター君達もよくぞあれをかいくぐったものだと過去の記録ながら私は胸を撫で下ろしたものだ。
そんなのが１１タイプもいたとするならば意地悪どころの騒ぎではあるまい。新しき神々が確かに人よりは強い存在だったとしてもたまったものではなかっただろうこ

とは想像に難くない。

だが彼女の子達である新たな神々はそのとんでもない母からの意地悪を乗り越えてティアマトを虚数空間へと封印したわけだ。

「なるほど。封印されるのは最初から計画の内だった、と？」

「そうなるわね。まぁ、子供達と居られなくなるというのは私にとっては断腸の思いだったけど！つらかったけどね！……でも、ゲーティアだったかしら？ソロモンとかいう子の使い魔に、その積もり積もった思いを利用されちゃったのよね。最初のうちはなんとか理性振り絞ったけど、聖杯のすごい力に負けちゃって結局は迷惑かけちゃったのよねぇ」

はぁぁぁぁっ、とティアマトは溜め息ついて頭をうなだれさせた。この原初の母たる女神は、どれだけ子供たる我々に対しての愛情を持っているというのか。

封印されたのも子への愛故。ビーストにされても本当は自分の子達、数多の生命達を滅ぼしたくは無かったのだろう。そして、自分を討ったマスター君やマシュ君達に恨みも何も持たずに『迷惑をかけてしまった』と自己嫌悪に陥る。それも自ら育んだ生命に対する愛故。

はぁ、作者はおれども母など無き物語系、それも悪役専門の私にはなんともこの母たる女神の愛情は推し量れはしない。

まぁ、私が事情聴取をしているのは、物語のキャラクターであるからなのだ。なにしろ、地球上の全ての生命体は彼女の系譜に連なるわけだが、本のキャラクターである私やホームズ、あとはナーサリーライムなどはその影響を受ける事は無いのだ。あと、そういう伝ではフォーリナーもそういう存在ではあるが

……逆を言えば、このマザー・ティアマトの深い『愛情』から来る影響も受けることも無いのだ。

私はなんというか、非常に……。少し、ほんのちょっとだが羨ましくなってしまった。

母の愛を受けられぬというのはいささか悲しくはあるが、ドンマイ！ジェームズ・モリアーティ。

つか、アラフィフがママンが恋しいなど、それも悪の組織の首領が？ははは、私のキャラではないサ。

再び気持ちを切り替え。

「ふぅむ。とはいえあなたはカルデアにお越しになった。マーリンはマシュ嬢を再びカルデアに復活させる為だと言ってましたが……」

私はティアマトに話しかけた。

「ええ、あの盾の子ね。あの子はとても頑張っていたわぁ。怖かっただろうに、必死にみんなを守ろうとして戦っていたわ。あんないい子だもの。そりゃあなんとかしてあげ

たいって思うじゃない？」

なるほど。確かにあのマシュ嬢は様々なサーヴァント達に気に入られ愛されていた。彼女はいつも健気で必死に戦っていたのだ。

もちろん、新宿では直接、彼女は戦ってはいない。その頃は彼女は戦える身体では無かったらしいから。

だが、あのジャンヌオルタに非常に評価され、そしてアルトリアオルタにもそうだった。

そして、その『彼女』を語るあのとんでもなく黒いお嬢様方の顔と言えば。

最愛の友を自慢する、親友の如き表情だったのだ。信頼と友情、そして愛にあふれていたのだ。信じられるかね？あの闇落ちして救いようの無い、アヴェンジャーやセイバーオルタが、だ。

私は目を疑ったんだヨ。

どこが闇落ちしたって言うんだ？そんなにいい顔して友を語る復讐者に闇落ちセイバーなんぞ、聞いたこと無い。

まぁ黒セイバーはマシュ君に宿っていたギャラハッドなる英霊を語っていたわけだが、それでもだ。

ようするに、だ。

マシュ君は愛されていたのだ。闇に落ちた者達が誇るぐらいに、何ら黒い感情も持てない程に。

そんな子をティアマトが愛さないはずは無かろう。なにより、生まれは人工であれ彼女は人から産み出された者なのだから。

「……なるほど。ところでここからが本来の質問なのですが。もしもマシュ君をあなたが再生するとして、その……『ラフム』とかそのような魔獣とかになったりしないでしょうね？」

私は、一番肝心な質問をした。

そう、マスター君の妻があんな姿になったならば彼は最悪の不幸に落ちてしまう。

我が雇い主にして自慢の教え子、マシュ君とどっこいどっこいなほどに底抜けな善人にして、愛されるべきお人好しの新たな人生の前に不幸を置くのは、如何に私が悪の首領だとしても許しはしない。

「ああ、マーリンにも聞かれたけど、最初から霊基を持っていたら普通に再生出来るわよ？黒化も能力の暴走で起こってたけど、今なら完全に制御出来るしね。ただ、そうね、魔力が増幅されるぐらいかしら。パワーアップするのは仕方ないかも」

……なるほど、私の心配は杞憂のようだ。

「ふむ、ならば大丈夫、ですかネ。まぁ、後はここの所長代理のドクターロマニや専属医

師のパラケルスス達とその事をお話いただければ宜しいでしょう。ハハ、またカルデアにも明るい希望が戻って来ますな！ああ、本当に喜ばしい事ですなぁ！」

そう、本当に喜ばしい。いや、悪役一筋で生きてきたが、どんな悪事を達成したとしてもここまで喜んだ事は私の人生……いや、出演作というべきか？……でも無かった事だ。

ああ、これだからマスター君のサーヴァントはやめられないんだナァ。本当に、ホームズのライバル役よりもなによりも私は今の自分が大好きなんだナァ。

素晴らしきかなカルデア人生！一度やったらやめられないんだこれが。

私はティアマトの手を取ると、心の底から礼を言った。信じられるかい？冷酷非情とうたわれたこの私がだぜ？他人の為に喜び、他人と自分の為に礼を言う。

ハハハ、自分でもびっくりだが存外悪くないと来てる。おお、大いなる全ての者の母よ、感謝します！ときたものだ。

いやはや、カルデアは最高だよネ？

殺生院キアラの貴重な授乳シーン

「あなたぁ、おっぱいにします？母乳にします？そ・れ・と・も、ミルク？」

キアラが訳の分からないことを言い出した。

マーリンがケツァル・コアトル達に連れて行かれ、ホームズが「調べ物がある。ちょっと失礼するよ」と言って出て行ってモリアーティ教授が入れ替わりにやってきた辺りで不覚にも俺は疲労からか睡魔に襲われて意識を失うかのように眠りに落ちてしまったのである。

「ふむ、仕方ないネ。精神は大人でもまだ身体も頭脳も産まれたての赤ん坊だからネ。ふむ、まぁ後は任せたまえ、マスター君。赤ん坊は寝て育つものだヨ」

寝落ちする前にモリアーティ教授は苦笑しつつもそう優しい言葉をかけてくれたが、正直赤ん坊の身体と脳みそというのはあまり融通が利くものではないようだ。

まるでブレイカーが強制的に落ちるみたいに俺はストンと眠りに落ちてしまったというわけだ。

で、寝て起きて、今ココなわけなのだが。

「何を言っとるのだキアラさん？」
　目を開けようとしたが、ああそうだ、産まれたばかりでまだ俺は目がまだ発達してないので見えない。
　抱っこされているのがわかるが、匂いと声と雰囲気で、これはキアラだな、とわかる。
　……なんだろう、こう、嗅ぎ慣れた匂いと聞き慣れた声という感じがして、なまら安心してしまうんだが、いやいや先程のキアラの発言は安心出来ない。
　つか元ビーストＩＩＩでアルターエゴな殺生院キアラに安心感を抱くなんてどういうことだよおい。それはあれか？赤ん坊はお腹にいるときに母親の声とか匂いとか覚えてしまっている、ってアレって事なのか?!
「いえ、おっぱいの時間かな、と思いまして。産まれてからまだおっぱいあげてませんし？」
　言うまでもないが、俺は赤ん坊になっている。つまり通常の食事の摂取はまだ無理であり、摂取出来るものはミルクのみだ。それはわかるが……。
『……何故に、新妻風に言うかな？』
「いえ、なんとなく」
　なんとなくでやるんじゃねぇ、と俺は思って念で心眼の回路を開ける。キアラのお腹にいるときに魔力を与えられてしまった作用なのか、そういう力が備わってしまった。

エレシュキガル曰わく〈まだ人間の範疇〉だそうだが、比較対象が〈生きてた頃のギルガメッシュ〉なので全く安心できない。

それはどうなんだよとか思わなくもないのだが、今の不自由なこの身においては非常に便利な能力なのだ。ありがたく使わせてもらっている。

なんせ心眼を使わないと産まれたて故に周りがちゃんと見えないし、会話も念話を使わないと意思を伝える事もできないのだ。

だが、心眼を開いてぶほぉっ?!と俺は噴いてしまった。

『ちょまーーーっ!!』

そう、俺の心眼が捉えたものは。目の前にあるそれは全く安心できないものだった。

「では、改めて言い直します。はーい、マスターちゃんママのおっぱいでちゅよ〜?」

『いやいやいやいや、ちょっと待てーーーっ!!』

迫るキアラのおっぱいは赤ん坊の今の俺にはかなり大きく見えたが、それだけではなく、なんというか張っており、よりその大きさを増しているようにも見えた。

「しかしマスター、お腹が空いているはずで御座いますわ。なにしろ新生児の胃には何も入っておりませんし?」

困った赤ちゃんでちゅねぇ?などと言いつつキアラはおっぱいを離して苦笑しつつ……というかその赤ちゃん言葉やめい。

『いや、そういう問題ではない！つか……ナニその格好?!』

おっぱ……いや、距離が離れた事でわかる。見える。いや、見ちゃいかんと思うような、キアラのそのコスチューム。

授乳しようとする事もそうだが、俺はその格好ををツッコんだ。

『なんで裸エプロンやねーーーん!!』

「ええー？戸籍上の関係と事実上の関係を考慮して、やはり新妻ママとしましてはこうかな？と」

『考慮すなーーーっ!!つかどんな関係やねーーーん!!つかなにを拗らせたらそうなんだよぉぉーーっ!!関係を混ぜるなっ！危険っっっ!!』

「はぁ、戸籍の上ではマスターの後妻で御座いますし、産んだ身としては母親ですのでどちらの立場で接したら良いのかと模索してみようかと思いまして」

『んな試みいらん!!つか後妻で母親ってありえねーーーーっ!!』

「まぁ、ややこちいけどちかたないでちゅねー？」

『いや、その赤ちゃん言葉やめい』

そんな倒錯した関係いらぬぅぅっ！

「というか、まぁおふざけはこれぐらいにいたしまして。母乳の役割について説明致しましょう」

キアラは妙に真面目な、きりっ！とした顔をすると俺を諭すように話しかけた。
「まず、女性は妊娠し出産致しますとそれが引き金となり、母乳分泌を促すホルモンが出て、おっぱいからお乳が出るので御座います。そう、現在私のおっぱいにはいっぱいおっぱいが蓄えられているのです。そう、おっぱいいっぱいいっぱいぱい、なのです」
『……いや、おっぱいをいちいち強調せんでもよろしい』
　というかマジかよ。出るのかよ。俺はまさか出るわけ無いと思っていたのだ。なんせ宝具でお腹の中に納められたのでそれはあるまいと高を括っていた。しかし、見れば……いや、見ちゃならねぇのはわかっているのだが、キアラの胸はパンパンに張っており、しかも先から少し漏れて来ている。
「ごほん。それはともかくとして。女性が最初に出す母乳には赤ちゃんにはとても大事な大事な免疫成分が含まれているのです。この最初の授乳こそが、今後の赤ちゃんが健康に成長出来るかどうかを分けるので御座います」
『……そうなのか？』
「これはドクターロマニに聞いていただこうがドクターパラケルススに聞いていただこうが、育児サイトで調べていただこうが、医学的に正しいので御座います」
『そ、そーなんだ』
「そう、あのように苦しみに耐えキチンと産んだのもこのおっぱいを出すため。そして

初乳こそが大切。ですので躊躇わず、それこそママのおっぱいを貪るようにちゅーちゅーしてたぁっぷりと甘えながらメイドインママなミルクを飲んで健やかに育つのでちゅよ？マスター」

ぐいぐいっ！

俺の口元に押し付けられるおっぱい。不意を突かれて防御が出来なかった。つか、おくるみの布にくるまれているので手も足も出ないとはこの事か。

『せやからおっぱい押し付けんなぁぁぁっ!!』

「押し付けてんのよ！さぁっ、レッツトライ!!」

『トライ出来るかぁぁっ!!つか、漏れてる、漏れてるからっ、押し付けたら、ミルクがぁぁっ!?』

ふんぎゃあああああああああっ!!

ミルクからは……逃げられなかったよ。

口を閉ざせど、顎の筋肉も口の筋肉も発達しておらずしかも歯の無い赤ん坊の身である。

乳首を差し込まれ、出てくる母乳を飲むしか無かった。飲まねば息が出来ぬほどの大量の母乳だった。

つか母乳で溺れるんじゃないかなんて思うほどだったのだ。

母乳は甘かったけど、屈辱の味だった。おっぱいに負けたゼロ歳児、それが俺だ。

つかこれって児童虐待になるんではなかろうか?とか思わなくもないが、腹は膨れた。

『げぷっ……』

キアラに背中とんとんされてゲップを出させてもらったが、頼むから次からは粉ミルクに……。

「却下で御座います」

言う前に却下された。ちくせう。

エミヤの労い～征服王とウェイバー君

ヴァレンタインデーである。

マスターが老齢になってあまりその手の物を食べなくなったため、チョコが舞うようにあちこちから飛び出すというようなこともあまりなくなっていたカルデアである。また今年はマスターの赤ちゃん化（肉体が）によってやはり、新生児にチョコなど厳禁なのでサーヴァントの皆さんは普通にサーヴァント間で友チョコ交換などを行ったりするに留めていた。

そんな時期である。

今回の登場人物はと言えばチョコにこだわらなさそうなこのオヤジである。

「寿司!!（挨拶）」

イスカンダルが、どアップでキラキラした目をしてエミヤに言った。

なんというか、いつぞやのヴァレンタインの冒頭のパロディ感たっぷりなのは否めない。

髭マッチョオヤジが目を輝かせてそんなことを言っている様は非常にアレであるが、それも仕方あるまい。

なにしろ、この征服王はカルデアの統括理事として長期間日本本社に滞在していたのだが、その間にすっかり日本贔屓になってしまい、好物といえば日本食、その中でも寿司が特に大好物！という感じになっていたのである。

「れ、連絡してすぐ来るとは。早いな、征服王」

「ふはははは、寿司と聞いてはな！」

今回、エミヤはカルデア財閥の統括理事を引退したイスカンダルとロード・エルメロイ二世をねぎらうために特別に食堂へと二人を呼んだのである。

イスカンダルとロード・エルメロイ二世が引退するというのは最初から決まっていた事である。

マスターが亡くなれば彼らは英霊の座に帰らねばならなくなる。そのために彼らは自分達が居なくとも次世代のカルデア財閥を担える人材を育て上げていた。

確かにマスターは事実として死なずに赤ん坊として復活はしたものの、とはいえ今後何十年も老いない彼らが企業のトップにいたのでは怪しまれるというものである。故に彼らはマスターの偽装葬儀が終わり、数ヶ月経ってから引き継ぎを済ませて引退を表明して南極のカルデアに戻って来たのである。

なお、新たな統括理事として引き継ぎした相手はヴラド三世（ランサー）である。彼は意外なことに（失礼だが）かなりの統率力と人心掌握力を持ち、柔剛を併せ持つ。

平均的な部分で常識があり、またバーサーカーの彼にも共通する部分として社交力も高い。

なお、補佐としては柳生但馬守、ミドラーシュのキャスターさんである。但馬守氏は徳川に仕えた経験があり、またミドラーシュのキャスターは商売的な才能が豊かである。その辺を考えての人事である。

まぁ、他の王を推すには誰もがアクが強すぎたという問題もあった。

黄金王、太陽王ならば尊大過ぎるし、第一そのような役職、思いっきり断られた。

騎士王は南極から離れたがらなかったし、それに真面目過ぎて非常にストレスを溜めそうである。

天下人であったノッブ……信長はめんどくさいと断り、ミドラーシュのキャスターは女王だが彼女は飽くまでも補佐ならば、と言って理事は辞退。

ソロモンは南極のカルデアになくてはならない人材として除外、その父親のダビデ王は正直女性関連でスキャンダルを起こすだろうと除外。

王でも発明王はトラブルを引き起こすだろう為に除外。つか借金とか多くなりそうだし。

まぁ、そういうワケでそのようになったが、もうすでにヴラド三世（ランサー）達は本社である東京のカルデア本社で新たな体制を敷いて業務を始めている。

順調に行っているならば、あと数日のうちに彼らはイスカンダルと補佐のロード・エルメロイ二世がわざと残していた他社との内通者達や不正に手を染めた連中を見せしめにクビを切り（物理的にではなく、会社を辞めさせる方）、その権限を強める、という手筈である。

そう、会社や企業においてトップが代わるときには何かしらビシッとやらねばならぬもので、舐められては終わりなのである。信賞必罰、内通者や不届きものの処分は非常に分かりやすく内外にその威を示しやすいのである。

これは『孔明の策』の中でも非常に分かりやすい部類であろう。

「……ところで、エルメロイ二世は？」

「む？小僧なら間もなく来る……と、うむ、来たようだ」

「はぁ、早すぎだよ、ライダー」

ロード・エルメロイ二世は昔のウェイバーの姿で息を切らせつつやってきた。昔のヒネた大人の姿に比べると逆に弱体化しているように見えるが、今の姿こそが最終形態であり、その知略でマスターを世界有数の財閥の長へと導いた、正真正銘の大軍師なのである。

「ははは、すまんなぁ、寿司と聞かされれば居ても発ってもおられんかった！」

「はぁ、これだよ。しかしすまないねエミヤ。わざわざ気を使ってもらってさ？」

「いやいや、ちょうどカルデア水産部が育てた養殖魚の品質チェックがあったんだが、これがとても質が良くてな。煮付けとかもいいんだが、せっかくなら刺身や寿司がいい感じなんだ。で、二人がちょうど南極に戻って来たから、退職祝いと言うんじゃないけど労いにちょうどいいと思ってな」

エミヤは二人にお茶、所謂『あがり』を出した。

寿司屋の符丁で、何故お茶を『あがり』と言うのかと言えば、諸説様々あるが、昔で言う『お茶を引く』という言葉を使わない為に作られたのだという説がある。

『お茶を引く』とは客の上がらない（客が居ない）芸者が客の上がった（客が居る）芸者の座敷でお茶汲みをしたことから、客の居ない様を指す言葉として使われたわけである。

そこから仕事が暇な事を『茶引き芸者』の如し的に使うようになったのだが、しかし、いかにも客商売的にそれでは困るわけである。客に茶を出すにしても験が悪いと昔の様々な店屋は様々な言い回しを考えた。

そこで、茶引き芸者の反対として『あがり花』という言葉を作り、それをお茶を出す符丁としたのである。つまり、客が良く上がる芸者（花）と言うわけである。

しかし、ここで昔の寿司屋の場合を考えてみよう。昔は寿司屋の職人さんに女性はほとんど居なかったのである。つまりは『花』が居ないという事で、寿司屋の場合には『花』

を取って単なる『あがり』になったらしい。
ここまで来るとなにやらこじつけのような気もする。
まぁ、別の説によればお茶を『お上がりくださいませ』という意味で客が『お上がり』なさるものだからというものもあるのだが。
まぁこれは全くの余談。本編には関係はないのでこのくらいにしておくとしよう。
「さて、今日はお任せという形でいいだろうか?」
エミヤはそういうと、きりりっと鉢巻きを頭に巻いた。
「うむ、エミヤが出す料理ならばそれが一番善いだろう。お前の料理を疑う者はおらんからな!」
「うん、僕もそう思う。それで頼むよ」
二人は頷いて了承した。このカルデアでエミヤの出す料理にケチをつける者は居ない。そして、コース料理であろうと、懐石であろうと、如何なる料理であろうと裏切られた事は一度として無いのである。
故に誰もが全面の信頼をおいて任せる。
「では」
エミヤはもうとっくに準備万端であった。舎利も完璧ならばネタも完璧、全てがとっくに握られるのを待つ状態に整えられていた。

普通の、カウンターを備えた寿司屋がもはや高級過ぎる店ばかりとなり、回転する寿司屋ばかりになっている今の時代。機械で寿司を生産する時代。

だが、エミヤはかつての人が握っていた寿司を誠心誠意込めて、確かな腕を持って握り仕上げる。

素早く体温など移らぬ速さで、柳の木で出来た下駄と呼ばれる寿司台に二貫ずつそれを乗せると、二人に出した。

玉子の握りである。

下駄に乗っているのは二種類。寿司屋でよく見る関東風の厚焼き玉子の物2つと、もう一方の2つは確かに玉子であるが、その上に紅葉おろしが乗せられている。

「む？よほどの自信だな。まずは玉子からとは」

イスカンダルは不敵に笑った。俗に、寿司職人の腕を見るならば玉子から頼むべし、という。その良し悪しでだいたい腕がわかるのである。

イスカンダルは箸など使わず、手でそれをつまんだ。まずは普通の玉子の方である。一口で頬張り、咀嚼して味わう。

「むうっ、流石だ。玉子の風味もさることながら、程よい甘味、そしてこの舎利の硬すぎず柔らか過ぎず、そして口に入った途端に解けるこの甘さと酢のやわらかさ。銀座の一流店にも劣らぬ……」

「これは……美味しい！」
うなる二人にエミヤは大袈裟な、と苦笑しつつまんざらでもないようだ。だが、今二人が食べたのは普通の玉子の寿司。玉子の本命はもう一つの方である。
二人はほぼ同時にもう一方、紅葉おろしの乗った玉子の握りを頬張り、そして味を確かめるようにゆっくりと咀嚼する。
「これは……関西風の出汁巻き玉子か！」
「うん、薄い出汁の塩味と柔らかい甘さがして、紅葉おろしと合ってる。それにこの香味は……ゆず？」
「京都の名店の玉子の握りを再現したんだ。その店の玉子は関東の物と違って関西の出汁巻きでね。好き嫌いは有るかも知れないが……」
「いや、これもうまい！ふうむ、同じ玉子でもこのように変わるか。うむ、だから玉子を2つずつなのか。食べ比べてみても、どちらも甲乙つけがたく……うまい!!」
「うん、甘い玉子と薄味だけど香味のある玉子。どちらもありだよ！……もしや『エミヤーズ』の新メニューにするつもり……？」
「はは、それは難しいな、エルメロイ。ファミレスでこれを出すにしてもなかなかね。寿司マシーンを導入するにもそれだけで採算取れなくなる」
エミヤはそう言って、次は白身の寿司を握った。

「ほう、これは……鯛か。上のものは……薄切りのカボスか」
「ああ、日本海で養殖した鯛だ。これがなかなか良い身の締まりと旨味をしていたんだ」
寿司を出して、次に碗を出す。
匂いからロード・エルメロイの顔が期待に満ちた表情になった。
「これは……」
碗の蓋を開けて
「やっぱり。鯛の潮汁だね！」
と綻ぶような笑顔を見せる。
「おお！やはり鯛だな！」
イスカンダルもにいいいっ、と笑った。
ずずずっ、とまずは潮汁から啜り、瞳を閉じて「ううむ！」と唸り、そして寿司に手を伸ばす。パクリと一口で一貫平らげて、また「ううむ！」と唸る。
「良い鯛だ！これは良い鯛だ！売れるぞ!!水産部、なんという見事な鯛を育てるのだ!!」
「くうううっ、とても美味しい！」
エミヤの料理の腕もさることながら、鯛の旨さに二人は思わず唸った。
「脂のノリがいい鯛だったからね。水産部の漁師さんもこの鯛は絶対の自信を持っていると言ってたぐらいだ。……是非とも統括理事と補佐のお二人に食べさせてくれって

さ」
「ほう？水産部の漁師と言えば……」
　イスカンダルは碗の中の鯛の骨に付いた身を箸でせせりながら、はて？と首を傾げて考えるそぶりをした。
「……ああ、思い出した。昔に魚がとれなくなった漁村の漁師達を水産部門にスカウトしたことがあったな。しかし随分昔だぞ？それこそもう５０年にもなるか？」
「……その、スカウトした漁師達の子、孫の世代だよ。未だに二人に感謝してるんだ、彼らは」
　イスカンダルは寿司の鯛と、潮汁を見つめた。彼らが５０年かけて研鑽した養殖技術の結晶たる、鯛である。
「寿司と潮汁だけじゃ、なんだ。鯛の兜焼きも食べてみてくれ」
　大きな一皿に乗った、塩を振って焼かれた鯛の頭がドン、と二人の前に置かれた？そのお頭は非常に大きく、おそらくはかなりの大物だったと思わせた。
「これは見事な……。ここまで、育てるには並大抵の苦労では無いだろうに。そうか、あの時の漁師達の子孫が……」
　ほろり、とイスカンダルの厳めしい顔に、一筋の涙が流れた。ありとあらゆるマスターの事業の顔として彼は常に矢面に立って来た。無論、ロード・エルメロイ二世もで

ある。

時には恨まれ、時には歓迎され。様々な企業を買収し、様々な敵対企業を潰し。

「見果てぬ夢を遠きに見て未だ夢の途中、だが、これは……。なんと善き夢か。満足して消える、それ以外にこのように受け取るものがあったとはなぁ」

征服王は、鯛の兜に箸を伸ばした。

身をむしって口に運ぶ。

「うまい。だが……。これは塩が多くはないか？」

滂沱の涙、男泣き。

「ああ、嬉し涙の分を引いとけば良かったかな？」

「ははははは、抜かせぃ！ううっ、かように嬉しい事もあるとは。だからあの小僧のサーヴァントはやめられんのだ！」

エミヤは苦笑し、冷やの冷酒を出してやった。

「まぁ、酒無しでは片手落ちだろう。今日は好きなだけ食って、飲んでくれ。あんたの引退祝いなんだからな」

「うむ、うむ！食うとも。飲むとも。ああ、良い労いよなぁ、ウェイバー！」

「ははは、まぁ、そうだね。ライダー」

かつて第四次聖杯戦争で、『ライダー』と『ウェイバー』のコンビ、というかサーヴァ

ントとかつてのマスター、王と臣下、まぁ、この二人の関係はさておき。

カルデアに召喚された後も、聖杯戦争ではなく、人理修復後も、共に財閥運営の場で戦い続けた二人は、多いにエミヤの出す料理に舌鼓を打ち、楽しむのであった。

マスター語り。お風呂

おっぱい！

何を言っているのかわからないだろうと思うが、目の前にあるものを言えば、おっぱいなのである。

俺はしこたまキアラから母乳を飲まされた後、一緒に何故か風呂に入っているわけなのだが、俺の方は何というか、ザ・タライ！という感じの赤ん坊用の入浴タライに漬けられている。

キアラは裸である。裸エプロンがまだ俺の精神衛生上で遥かにマシだったというのがわかったわけだが、そんなのわかりたくなかったよ。

「ほうら、ちゃぷちゃぷ、良い湯でちゅねー？」

『だから赤ちゃん言葉やめい』

俺は今、心眼を閉じている。つまり何も見えていない状態である。なのに何故目の前におっぱいがあるとわかるのかと言えば、心眼を閉じる前に見ちゃったからだ。

いや、さっきさんざん見たのに今更、とか思われるかも知れない。あと、口で咥えて

ミルクを飲まされて今更とか言われるかも知れない。
だがね、それ以上の何かが見える可能性が大なのだ。だから……不安だけど目を閉じてんの!!つか見ちゃったらほら、ヤバいし!!
とはいえ、湯は暖かく気持ち良い。息を吐くと「ぷぁ～」と口から音が漏れる。しかし我が身体ながら赤ん坊の身体のなんと不便な事よ。言葉すら喋れぬ。……念話でカバーしてるけど。
だが、レッスンは必要だろう。声を出してみる。
「うぁー、うー、ぶぅ、」
……あいうえおすら喋れんのか。
「うぁー、うー♪ママも良い湯よ～？」
キアラの入っているのは普通の浴槽である。浴槽から、俺の入っているタライに手を伸ばして俺の身体をを支えてくれているのだが、その体勢だとおっぱいが風呂の縁から出ることになるため、見ないようにしている。
しかし人間だったならばまだあまり動いてはいけないはずなのだが、サーヴァントだからなのかキアラは特に不調などは見えない。それに出血もしただろうに、風呂なんぞ入って大丈夫なのか？とか思うが、マスターのスキルでキアラの状態を見てもなんの異常もなく、元のキアラの状態に……あれ？

『……なんか、スキルがやたら増えてないか?』

キアラの固有スキルが、通常のサーヴァントなら二つか三つほどなのになんか、１０ほどになっていた。

【母子の絆Ａ＋〈ママン・ラ・マン〉】

マスターに危険が迫った時に、力が倍増する。ママ属性を持つ味方の宝具、バスターアップ。

【清らかなる児衣〈コス・チェンジ〉】

マスターのオムツの交換時期がわかる。また、大と小の区別がつく。また、強制的にマスターの服を着替えさせられる。

【慈母乳Ａ＋〈ミルク・アップ〉】

マスターがお腹が空いた場合、自動的に胸が張りミルクが溢れんばかりに満ちる。また、マスターに拒否を許さない。

【慈母の手Ａ＋＋〈ママ・ハンド〉】

マスターを抱く時に必ずとらえて落とさない。また、安心と安堵を与えられる。

【母の香りＢ〈パフューム・オブ・キアラ〉】

マスターに母親認識を与える。効果・精神依存、安心。体力回復。

【母の声〈コール・オブ・キアラ〉】

マスターに母親認識を与える。効果・精神依存、安心。魔力回復。

……ナニコレ。

俺は絶句した。

『な、ななななな、なんつうスキルをつけとんじゃあああああああっ!?』

「はぁ、なんで御座いましょう？スキル……はて？」

キアラは自分に新たに付いたスキルをまだ知らなかったらしく、首を傾げ、そしてスキルチェックを始めて、そして。

「んふふふふ、ニヤリんぐ。なんという事でしょう、この身にマスターを宿した結果、このようなスキルを得るなんて……。もう、この身はマスターのママ、快楽天などではなく言わばママ楽天！」

『どんな楽天だよ、つか……全部効果が俺限定じゃねぇかよ?!』

「たーめるーならーららママ天ぽいんとー♪」

などとキアラは歌いながら上機嫌である。

というか、ママ天ぽいんと、ってジャガースタンプの同類か？つか溜めたらどうなんだよ。

「はぁ～っ、でもマスター、本当に私、マスターのお母さんになってしまいましたねぇ。カルデアに来た頃は全く予想もしておりませんでしたわ。全く不思議なご縁で御座い

ますわね」
『あの頃は正直、冷や冷やしてたよ。というかポケットに入ってた召喚符を使ったのが、ねぇ』
　そう、キアラを召喚した時に使った召喚符は、全く出所不明なものだった。そう、あのＳＥ・ＲＡ・ＰＨでの一件の後にＢＢがカルデアにやって来て、それでうやむやになっていたのだが、どう考えても俺は召喚符をポケットなどに入れた覚えは無いし、召喚符自体、このカルデアでは当時から厳重に管理されており、たとえダ・ヴィンチちゃんがうっかりしていたとしても持ち出せるものではなく、使用してサーヴァントを召喚する時にも書類を書いて持ち出さなければならなかった。
　そう、あの召喚符はどこから出てきたものなのか。
「うふふっ、そうで御座いますわねぇ、どこかの誰かが最後の力を振り絞って僅かな縁を頼りに、誰かの服のポケットに忍ばせたラヴレターのようなものかも知れませんね？」
『……え？』
　キアラは湯から俺を抱え上げ、抱き寄せた。むにっ、とした感触が俺の身体中に当たる。
「うふふっ、まぁ、甲斐有って来られてよう御座いましたが、とはいえマスター。魔性菩薩からは逃げられない、という事で御座います」

つまりあの召喚符は、どうやってもキアラを召喚するための……!?

「うふふふふ、まぁ、冗談で御座いますとも。ただの戯れ言、お気にならさず」

『いや、というか……。なんでもない』

考えてみれば、ものすごく有り得る話ではある。だが考えれば考えるほどそれは怖い話だ。

というか。

俺は背筋にゾクッと寒気にも似た、怖気を感じた。

「あらあら、マスター。お湯が冷めてしまいましたか?」

キアラは手桶で自分の浸かっている湯を掬うとゆっくりと俺の入っているタライに足した。

慣れてしまっているが、よくよく考えれば今、一緒に風呂に入っているのは、世界を滅ぼしかけた『殺生院キアラ』なのである。はっきり言ってとんでもないものと風呂に入っているわけで。

俺は何にも言えず、ただ『……うん、ありがと』とだけ言った。

「そうでちゅねー、もう少し大きくなったら、ママと同じお風呂に浸かれるんでちゅけどねー?」

『……いや、大きくなったら一人で入れるだろ』

ツッコミを入れるのも弱々しく、俺はこれから先を考えて、溜め息を吐くのだった。

新統括理事・ヴラド三世。

カルデア財閥の日本本社・統括理事に就任したヴラド三世（ランサー）は、ヴルード・クリストフ・ブランと名乗っていた。

なにしろ吸血鬼ドラキュラは非常に有名であり、ブラムストーカーの小説を読んだことは無くとも世界中でそのドラキュラを知らない者はいないほどなのだ。

そして、厄介かつ不本意な事にそのモデルとされたヴラド・ドラクリヤ、すなわち彼、ヴラド三世もまた知名度が高く、もしもヴラドが本名を名乗ったりすれば、本人だとは思わないまでも大抵の人間がドラキュラを思い浮かべられてしまう。

まぁ、これがバーサーカーのヴラド三世ならば、イメージ的にもそのものであるので驚かれるが、ランサーのヴラド三世だと、外国人のマッチョなゴツいオッサンとしか見られず、あー、同名の人なんだぁ、的な反応が返って来たりするだけだったりする。

しかし、本来のヴラド・ドラクリヤはどちらなのかと言えばランサーの方がより本人なのである。バーサーカーは物語に括られた姿で現界しており、フィクション寄りなのである。

全てはブラム・ストーカーが悪い!!と、ランサーもバーサーカーも断言しているが、ブ

ラム・ストーカーはまさか英霊化はするまい。

ブラム・ストーカーの吸血鬼ドラキュラは元々はとある人種問題や社会問題の暗喩として書かれた作品であると言われており、その辺を考察するのは、今の世界情勢からすればかなり危険である。

また、当時、吸血鬼ドラキュラが書かれた英国やヨーロッパ圏の時代背景などを考察するのも非常に危険なのである。

そう、けして最初に吸血鬼ドラキュラを題材にしたサイレント映画にしてその姿は原作に最も忠実と言われた『ノスフェラトゥ』の吸血鬼がなぜに嫌悪感を催すような姿であったのに対して、他の映画のドラキュラが身なりの良い貴族風かつダンディー風になったのか？という事も考察してはならないし、当時のヨーロッパ圏で大流行した疫病等の感染拡大ルートととある人種のヨーロッパ圏移動ルートを併せて見てはならないのである。

……そりゃあナチスが出てくるわけだ、なんてことも思ってはイケナイヨ？

故に、本物のブラム・ストーカー本人の英霊なんぞ出せるわけが無いのである。ぼかして、ならどうかはわからないが。

……まぁ、その辺を詳しく書くとかなりヤバいのでこれぐらいにしておこう。多分、これギリギリスレスレだし。

なんにせよ、最大の被害者はヴラド三世である。かなりの風評被害なので彼はブラム・ストーカーの遺族に名誉毀損で損害賠償を請求しても良いと思う。

それはさておき。

ヴラド三世は渋い顔、というよりもものすごいしかめ面をしつつ、加藤段蔵（アサシン）から渡された報告書を読んでいる。

「……許せぬな。我はあらゆる不徳、不義を許さぬ。だがこれは……」

報告書には、カルデア本社の幹部の一人がその娘を何者かによって誘拐されて、その娘の身柄と引き換えにカルデア本社の社外秘の重要書類を要求されているとあった。

「はっ、誘拐されたのはカルデア本社の専務の一人娘。彼は善良とも言える、幹部の中では社に忠実にして信に厚い、云わば忠臣とも言える方ですが……。早くに妻に先立たれ、家族と言えばその娘のみ。しかし……」

「賊は何者かわかっておるな？」

「はっ、中華マフィア『六世会』という最近大陸より日本に来たはぐれ者達です。引き込んだのは、エルメロイがわざと残していた『生贄』の幹部達だと判明しております」

「不忠なる者をわざわざ残すからこのような事が起こるのだ！何が生贄よ。ただの害悪ではないか！」

ヴラドは吼えるように叫び、ズドン！と木製のデスクに拳を打ちつけた。打ちつけて

もなお力は収まらず、ヴラドの身体の筋肉で着ているスーツがミチッ、と音を立てる。あまりの膨張にスーツの縫い目がはじけそうになっていた。

ベキベキベキ、とオーク樫の一枚板で作られた高級なプレジデントデスクが真っ二つになって砕かれる。

ヴラドは怒っていた。卑劣な手段を行う中華マフィアの連中に。肉親を人質にして非道な行いをし、裏切りを強要する、犯人共に。

「私自ら出るぞ！段蔵っ、場所を言え!!悪漢は許してはおけぬ!!」

ヴラドの目が赤く憤怒を宿す。が、段蔵は平然と

「落ち着いて下さい。とうに事態は解決済みです。先ほど柳生殿が誘拐された娘を救出に成功したとの事。また、天巧星・燕青殿が『六世会』のチンピラ共を始末、警備課のヘクトールが裏切った幹部達をすでに捕縛済みです」

と、答えた。

「なんだと?!……くっ、先に言え。これでは私の怒り損ではないか!!見ろ、デスクが壊れたぞ!!」

「いえ、ですから、あのロード・エルメロイが誰かを危険に曝すような策や計略は立てませんし安全をまず確保した上の……」

「ええい、それでも万が一という事もあろう!!誘拐された娘に何かあればどうする!!」

「サーヴァントに、普通の人間相手でそれはありません。というかあなたが荒事に出たならば、それこそ大量殺害事件になりかねません。聖杯戦争以外での殺人は御法度、です」
「……お前は私を何だと思っとるのだ。バーサーカーの私ならばともかく」
「カルデア財閥統括理事、です。荒事をやらかしてマスコミ沙汰にでもなったらどうするんですか！」
「うぐっ……、しかし柳生は出張っておるではないか！それはいいのか?!」
「柳生殿はこの手の仕事はお手の物ですので。スマートかつ隙もございません。万が一にもマスコミ沙汰にもならぬよう隠密に動ける方ですし」
「……まぁ、たしかにそうなのだが！そうなのだが!!なんか釈然とせんぞ?!というか私のこの怒りのやり場はどこへ持って行けばいいというのだ!!」
うがーーーっ!!と、ヴラドが頭をかきむしったその時、統括理事のオフィスのドアをノックする音がし、返答も聞かずに、秘書風のスーツを着たシバの女王がタブレット端末を抱えて入って来た。
「あ！」
ヴラドと段蔵は入って来たシバの女王を見て、固まった。
シバの女王は確かに表向きは統括理事補佐であるが、しかし、本当の役割はヴラドの

お目付役であり、監視役である。
シバの女王は本当ならばイスカンダルの次の統括理事の候補として挙げられていた程に経営の能力の高い英霊である。しかしながら彼女はそれを辞退した。
彼女が辞退した理由は、前統括理事のイスカンダルの路線を崩すべきではなく、さらに自分では難しいから、という事だった。
だが、他の王では尊大過ぎたり、働き過ぎてセルフブラックな労働時間により過労死しかけたり、責任感からストレスを溜め込んでオルタ化しかねなかったり、毒を盛りたがったり、アツモリ踊りまくりだったりノブノブうるさい小さいのとかデカいのとか呼びまくったり、と路線を崩す以前の問題児が多かったのだ。
故に、まだ人格として路線に沿って運営出来るだろうヴラド三世（ランサー）が満場一致で選ばれたわけなのだが、問題は非常に多かった。
まず、ヴラド三世（ランサー）はとにかく、悪行や不正をとにかく嫌う人物であり、彼が生前に統治していたワラキアでは、確かに平和ではあったし栄えはしていたが、とにかく悪行や不正を行った貴族達が処刑される事が多く、毎日のように串刺しの刑に処されていたという。そして、また今回のように怒りのままに行動しようとする危うさも持ち合わせており、とにかくそれを諌めるためのブレーキとして彼女がマスターの名代として付く事になったのである。

シバの女王は破壊されたプレジデントデスクを見て、一瞬目を丸くしたが、そそくさと秘書デスクに向かい、そして自分の椅子に座ってタブレット端末をクレイドルに差すと、

「はぁ、お高いデスクですのに。あ、弁償はヴラドさんのお給金から出していただきますから」

と、さらりと言った。そして懐、というか豊満な褐色の胸の谷間から計算機を出し、ピポパ、と数字を打ち出すとそれをヴラドの方に向けた。

「ちなみにぃ～、このような金額になっておりま～す！」

金額を見たヴラドの顔が、ウゲッ?!となった。

「な、ななな、なんとぉーっ?!」

「今時、オークの一枚板の無垢材のデスクなんてそうそうございません。それに、元々この部屋は理事長、つまり本来ならばマスターのお部屋。調度品もまさしく本来マスターの財産とも言うべきもの。おわかりですかぁ?」

「む、むむむむ、くっ、友の物であるならば、弁償も致し方ない。だが、シバの女王よ、その、せめて月賦で頼む……」

「はい、とりあえずマスターに謝罪してから、どうするか決めましょうか?」

「うぐぐぐぐ、すまぬ……」

がっくり、とヴラドはうなだれ、そして心に誓った。怒りに任せて何かを破壊するのはよそう、と。

なにしろ、シバの女王が見せた電卓の金額は。

ゼロが８つ。そう、日本円でゼロが８つつくお値段なのである。これが黄金王や太陽王、征服王ならばすぐさま払えるだろうが、ヴラドにはいささか辛い。まぁ、どこぞの腹ぺこ王……もとい、騎士王でも頭を抱えるかも知れないが、彼女には円卓の騎士達がおり、全員で弁償しようとするだろうが、ヴラドは実質一人なのである。もう一人バーサーカーの彼もいるが、二人とも自分にはあまり干渉しあわないのだ。

「ええ、反省するならばよしといたしましょう。とはいえ、マスターには報告しておきますねぇー？」

にっこり笑うシバの女王。マスターの名代であるだけではなく、この女王にはヴラドも敵いそうに無い。

なにしろカルデアの財務省と呼ばれたサーヴァント、こと、金銭的な事ではおそらくは彼女にかなう者はそうそうおるまい。

ヴラドの財布は、今後当分寂しい事になりそうだった。

マスター語り～生きていたマーリン。

「王の話をしよう、あれは昨日の事、いや、もう一昨日の事になるかな？まぁいい、私にとってはついさっきの出来事だが、君たちにとっては多分、それぐらい前の出来事だ。彼女はアーサーという名前があるけど、今は女の子にもどっているからなんて呼べばいいのか。確か最初に会ったときは、アルトリア。そうあの子は最初から言うことをよく聞くいい子だった」

マーリンは流石というのかなんというのか、生きていた。

カルデア内にいつの間にか作られたタイガー……もとい、ジャガーマン道場の特設リングで、ケツァル・コアトルやメディアさん、他、マーリンにさんざん迷惑をかけられた女性陣達に一方的にボコボコにされたと言うのに、ケロッとした様子で俺の前に姿を現したのだ。

不死身かコイツは。

というか何度王の話をすれば気が済むのだろうか。

「で、何のご用でしょうか？」

キアラがにこやかに、しかし思い切り、迷惑だからとっとと帰れ、と言う感じのどす

黒いオーラを放ちながら言った。
「いやだなぁキアラ。あの時、マスター君に約束したじゃないか。十月十日後にまた会おうって。だから私は来たんだよ」
　つれないなぁ、とか何とか言いながら、いつもの調子でヘラヘラと笑うマーリン。しかしコイツがこうして現れたならば何かしら厄介事を持ちかけてくるのはいつもの事なのだ。
「無事に産まれて何よりだよマスター君」
『で、何しに来た、というよりは何を企んでるんだ？』
「……つれないなぁ、君は。企むなんてとんでもない、新たに産まれしマイ・ロード。君の物語は望まれそしてまた紡がれる。ただそれだけだよ」
『マイ・ロード言うな。つかあんたを雇った覚えは無いし、あと俺は王でもなければここは宮殿でも無い』
「これだからなぁ。まぁ、だから君とマシュ君が結婚したときに嫌みでキャメロットの城壁と城門を贈ったんだけどね」
『あれは嫌みだったんかい!?』
　いや、不自然にデカかったし、カルデアに入るときには門の所を通らなきゃいけなかったので不便だったけど、何かとセキュリティー的にはかなり有効だったから有り難

く貰ったけど、嫌みだったとは?!

マシュとの結婚から数十年経ってから解った驚愕の……と言うほどでも無いけど……事実!!

「いやぁ、外堀から埋めていけばいつかは落ちるかな?とか思ってとりあえず城壁を贈ってみたんだけどね?」

『いや、埋めるために城壁を造るって聞いたことが無いよ?!』

マーリンはバビロニアでの縁を利用して、サーヴァントの自分をカルデアに送りつけて来た事があった。

無論、縁をやたらと強化しつつカルデアの召喚システムを通じてなのだが、小異変等で縁の出来たサーヴァント達などがこれにはかなり迷惑した。

なにしろ自分達が出ようかという風に英霊の座で待機していたのにそれを押しのけるようにしてマーリンがやって来るのだ。

しかも、１０連で回したらマーリンマーリンマーリン、マーリンが十人!!という感じで。

カードがライダーとかアサシンとかセイバーでも、銀カードでも銅カードでも関係無しに、そのカードが無理矢理に再びクルッと回って金カードのキャスターに変わってマーリン、マーリン、マーリンなのである。

そりゃあ来るはずだった他の英霊達も怒ると言うもんだろう。
円卓の騎士のケイ、アグラヴェイン、ガレスなど、マーリンのせいで来るのが遅れてしまったとか未だに根に持っているし、アキレウスとかケイローンとかもマーリンを見ればダッシュで殴りに来る始末。あと、他の英霊達に聞いたが、マーリンのせいで未だに召喚されていない英霊達も居るそうで、かなり怒っているとか。
その来れなかった英霊達は反マーリン連合を組んで、再び召喚システムが起動したならば最強のマーリンキラー達をカルデアに送ろうと画策している、という話だ。
……一体、何ガンさんと何ュエさんなんダロウネ？
まぁ、今は召喚システムは起動しないようになってしまったから英霊はもう呼べないし、そんな危険そうなサーヴァントは来ることはないからまだ安心なのだが。
だいたいモリガンさんが来たらマーリンよりも円卓の騎士達に危機が……いや、アルトリア・シリーズと円卓の騎士達が囲んでリンチとかするかも知れんし、この場合どうなんだろう。逆に被害者にされかねないな。
ミニュエさんについては諸説いろいろあるが、ブリテンの崩壊を招いた間接的な原因の一つであり、なんというか厄介な感じしかしない。
……二人とも来ない方が平和なのかも知れない。
それはさておき。

キングメーカーと呼ばれるマーリンのサーヴァントがそうしてやって来た事にもちろん円卓の騎士達はかなり警戒した。誰一人として暖かく迎えた円卓の騎士はいなかったという辺り、マーリンの今までの所業がわかろうものである。というか仲間だった彼らに超警戒されるってのはどんなけなんだよ、とか俺は気楽に思っていた。

なにより、ウルクで彼の行動や性格を知っていたので、また厄介事が増える程度だろう程度にしか認識していなかったのだ。

だが、それは甘かったとしか言いようが無かった。

マーリンは俺を王にする事を虎視眈々と狙っていたのだ。まぁ、詳細は省くが、俺はそれをことごとく拒否した。

なにしろ、このカルデアには王だらけで、その誰もが偉大な存在である。だが、考えてみてほしい。みんなかなり厄介な性格をしているわけで。

英雄王、太陽王、征服王、騎士王、ソロモンにシバにゃん、何かと綺麗な女性を見ればアビシャグアビシャグ言う羊飼いの王に、世界最古の毒殺女王、串刺し公、マッスル至上主義のスパルタの王に、ローマローマ言うローマ皇帝に、その子孫の赤セイバーとやたら赤セイバーを愛でたがるバーサーカーな皇帝、陰謀企てる銭ゲバ皇帝に、王ではないけどノッブに……と、やたら個性的で厄介な変人揃いなのだ。

当時の俺は、彼らと同類に括られたく無かった。

それが本音だった。

というか、王＝厄介、という認識が当時の俺の脳内で出来上がっていたのだ。多分、エミヤ（アーチャー）ならわかってくれるはずだ、きっと。

まぁ、今の王というものに対する認識は若い頃のそれとは違う。若い頃のそれはそれとしてずっと持ち続けてはいるが、そもそも俺が偉大な王なんてものになってしまったら、それこそカルデアに今も居続け、見守ってくれている王達に申し訳無いではないか。厄介なのは今も昔も変わらないけど!!

偉大というものから最もかけ離れているのが俺だ。成ろうなんてまーったく思ってはいない。

『王になる気は無いからキングメーカーとしてのあんたは不要さ。友達としてなら遊びに来るのは歓迎するよ。だけど、ウチに損害とか出すような事はごめんだからな?』

「あはははは、耳が痛いなぁ。だけど本当に君は美しい生を紡いでいるね、うんうん。王にならざりし王よ、まぁ、チャンスはこれからも出てくるから諦めないぞっ、と」

『つか、諦めろ』

マーリンはいつもの感じで俺の言葉を流した。非常に迷惑だから友達としての縁も切ってやろうか、という考えが頭をよぎった。

「まぁまぁ、もうある意味王みたいなもんなのに」

『経営者は王じゃないって。商売人はどれだけ大きい商いをやっても商売人だからな？』

そう、俺はカルデアのマスターではあるが、カルデア財閥の中核『カルデア商会』の社長……いや、会長なのだ。確かに財閥の理事長でもあるが、ようするに、あきんどである。商売人が王のように振る舞うなんて、しかも成金が。滑稽でしかない。商売人は、毎度ありがとうございます、と、実った黄金色の稲の如く頭を垂れるのが一番良いのだ。

帝王学なんぞ習った事もないしね。

「誰よりも王に相応しいのに、君って奴は。あのソロモン王をも超える偉業を果たしても欲が無いんだからなぁ。世界を何度も救いし救世王にして、数多の英霊達の主人なのに」

『成り行きと縁だよ。はぁ、システムフェイトが使えたらミニュエとか召喚してやるのにな……』

「……人の黒歴史を抉るの、止めてくれないか。というかミニュエは不味い。本当、勘弁してくれ」

マーリンは本気で嫌そうな顔をした。まぁ、伝説ではミニュエはアーサー王伝説に登場する湖の乙女である。

この湖の乙女はかつてアーサー王が選定の剣を折ってしまった後に、聖剣エクスカリバーを与えた人物と同一視されているが、その真偽は不明である。

まぁ、もしも同一人物だったとしたら、話はかなりややこしい事になる。

なにしろアーサー王を助ける一方でブリテンの崩壊を画策した人物、という二律背反な人物像になってしまうからだ。

おそらくは、かつての古の物語の事である。特にアーサー王伝説を書いた書物の中で最も古いものは翻訳者泣かせなぐらいに物の名前がごっちゃに混淆されていることが多く、剣の名前でも、カリバーがやたらと出てきて、ガウェインの剣とアーサー王の剣とがあたかも同じ名前で書かれている場面とか出てきたり、人物の名前も同名の他人がやたらと出てきたりするのである。

故にエクスカリバーを与えた湖の乙女（ヴィヴィアン）と湖の乙女（ミニュエ）は別人と考えるのが正しいだろう。

そのミニュエであるがアーサー王伝説のその後を書いた書物によればマーリンをアヴァロンの塔に封印した人物だとされている。それが本当ならばミニュエの英雄はリアルでの『マーリンキラー』と言える性質を持っているはずなのである。

なにしろ、アヴァロンの塔に引きこもった、というのはマーリン本人の自己申告であり、誰も真実を知らない。おそらくは自分に都合のいいように話している可能性大だと

思ったら、目の前のマーリンの反応から察するにどうやらそのようである。
マーリンがアヴァロンの塔にいる事にはやはりミニュエが関わっているのは確かなようである。
「……君の為でもあるけど、呼んではだめだよ。あれはとにかく好きになった者を誑し込んで閉じこめちゃうよおねぇさんだから。病んでるってレベルじゃないから。あれにはキャスパリーグだって閉じ込められたんだからね」
『そんなにヤバい人なのか？』
「キャスパリーグなんて、会って目が合った瞬間に気絶するだろうね。それぐらいに彼にとってはトラウマなんだよ、彼女は」
第四のビーストが気絶してしまうような人物の英霊なんて、どんなけだよ。というか、そういえばビーストⅣって出てこなかったけど、どうなったんだろうなぁ。他のビーストは倒したけど、うーむ。
と、見ればいつの間にか部屋に入って来ていたフォウさんが隅っこの方でガタガタ震えていた。
……小動物まで恐れるとは。湖の乙女恐るべし。
「……はぁ、まさかここに来てアレの名前が出るなんてなぁ。まぁ、いいさ。本題を話す気がしなくなったよ……」

マーリンはそう言ってなんというか、頭をうなだれさせた。
「本題はまた次回、さ。後編でまた会おう!!」
と、まるで空元気を振り絞ったようにマーリンはそういうとドアを開けて部屋を出て。
偶然に廊下で暴走したようにパカラッパカラッパカラッと走る黒いアルトリアにはね飛ばされて、どこか遠くへ飛んで行った。
「急に馬は止まれない。期せずしてマーリンを物理的に排除してしまったではないか。……まぁ、サーヴァントの方を囮にすり替えて生け贄にするという姑息な真似をしたのだ。天罰覿面、因果応報。本人にも罰が無ければな」
槍トリアは、そういうと部屋にいるこちらを覗くと。
「失礼した。悪は駆除したので、マスターは安心してくれ。……では、幾健やかに！」
そう言って、珍しくニッ、と笑うとパカッ、パカッ、と愛馬を進ませて去って行った。
『育ての親なのに、容赦ないなぁ』
「まぁ、アレの扱いは流石に手慣れているのですね、彼女は」
キアラは爽やかな笑みでそう言って、部屋のドアを閉じ、鍵をガチャリと締めた。
「はぁ、あの男のせいで母子の尊い時間が台無しでございます。はぁ、ママはもう待ちきれません。スキルのおかげで……」

ぽろり。

『……ちょ、まっ?!』

おっぱいを出すと、キアラは俺にそれを差し出した。

「ああ、こんなにお腹を空かせて。大丈夫、ママのおっぱいももうこんなに張って、痛いぐらいにミルクたっぷりぃ！さぁっ、貪るように吸ってぇぇぇっ!!ママのおっぱいぃぃーーっ!!」

『ぎゃーーーーーーす!!』

この後、たくさん授乳した。げぇっぷ……。

なお、後編なんて無い模様……うううう、おっぱい怖い。

番外編。フィニス・カルデアの所在地に関する考察。

【フィニス・カルデア】

南極にある、３００年以上にわたって魔術的に秘匿されてきた標高６，０００メートルの雪山にある斜面に入り口があり、そこから地下に向かって広大な施設が広がっている。初期の頃どの国家にも属していない場所、とされていたのだが、第二部においてそれが南極であるという事がわかったわけである。

しかし、ツッコミ所としては南極などという極寒かつブリザード吹き荒れる過酷な環境下においてどんな魔術師が秘匿していたのだ？と言うことになる。

また、南極には標高６．０００メートルなどという山は無く、一番高い山は南極横断山脈のカークパトリック山の４．５２８メートルであるという。

まぁ、秘匿されてきたのだから誰も知らない山、という話なのだが、ここではその『山』の正体について考察したいと思う。

もちろん、これは間違っているかも知れない考察である、と最初に付け加えておく。ただ、あり得そうだというだけの話なのである。

さて、カルデアの所在の標高６０００メートルという南極の山が登場する物語は実は

存在している。地下に空間が広がるという条件にも合致している。

その物語の名は『狂気の山脈にて』。Ｈ．Ｐ．ラブクラフト御大の小説である。

というか、セイレムが出てきた時点で有り得ない事では無い……のでは無かろうか。

まぁ、ｗｉｋｉによれば、

【狂気山脈（きょうきさんみゃく、英語：Ｍｏｕｎｔａｉｎｓ　ｏｆ　Ｍａｄｎｅｓｓ）とはクトゥルフ神話に登場する南極の架空の山脈。南緯８２度、東経６０度から南緯７０度、東経１１５度にわたって大きな弧を描いて南極を横断する先カンブリア時代の粘板岩で構成された山脈で、最高峰の山は高さ１万３６３メートルに達する。

洞窟の入り口が山脈の至る所に多数あり、地下に大空洞がある。かつて、この山脈は古のものや、旧支配者が支配していた。高度２万フィート地点にある台地には彼らのかつての居住地であった巨石建造物が規則正しく並んでおり、それら建築物の壁面に刻まれている浅浮彫や彫刻には古のもの達の歴史が描かれている。狂気山脈の奥深くには、古のものが奴隷として作ったショゴスが野生化して生息している他、コウテイペンギンより体が大きく、目は退化し、白化したペンギンが度々確認されている。

と、ある。

さて、カルデアの入り口の標高は６０００メートル。狂気山脈の最高峰の山で１万超であり、ｗｉｋｉの説明文にある、『高度二万フィート地点の台地』には『彼ら（旧支配

者）のかつての居住地』があったとされているわけだが、高度二万フィート＝約６０００メートル、つまりカルデアの入り口の高さであり、もしもカルデアが狂気山脈にあるならば、すなわち、旧支配者達のかつての居住区跡に作られた、とも考えられるわけなのである。

また、カルデアは『地下へ向かって広大な施設が広がっている』とある。それも、狂気山脈の『地下の大空洞』を利用したとすればその工事も掘削等もさほどすることなく工期も短縮出来たのでは無かろうか。

そのように考えてみると、カルデアの場所というのは元から外宇宙と縁があったとも考えられ、フォーリナーと縁が出来たとしてもおかしくは無いとも言えよう。

しかしそうなるとショゴスやその辺の遺跡群はどうなったのだろうか？という疑問は出てくる。

しかしこの考察がもしも正しいならばマスターやサーヴァント達はかなり物騒な場所にいるという事になる。

『フィニス・カルデア狂気山脈説』

……まぁ、流石にこの説は無いかも知れないけど。

話のネタとしては面白いかも知れませんね。

魔性ママ菩薩とは。

運命というものは非常にわからぬものである。

例えば、こっちの世界では善良だった殺生院キアラが魔神柱のゼパ……なんとかに無理矢理、他の世界のとてつもなくとんでもない殺生院キアラと繋げられ、変質し魔性菩薩として覚醒させられたり。

その殺生院キアラが海洋油田施設ＳＥ．ＲＡ．ＰＨにおいてマスター達と戦い、そして心残りゆえにサーヴァントとしてカルデアに召喚されたり。

善良だった頃の自分をある程度取り戻す事に成功し、そしてカルデアに来て約８０年。

マスターを生き長らえさせる為にアミデュって胎児にして自分の子宮に宿し、そして出産。

確かにかつて人であった頃、普通の女の子……まぁ、海洋施設セラフィックスでセラピストやってたときは成人だったがまだ若かったのだ。他の世界のキアラはどうか知らないが、まだ２０代!!しかし何故年上に見られたのか。自己評価ではまぁ、ゲフンゲフン……が、夢見る、優しい旦那様と結婚していずれは可愛い赤ちゃんを産んで育てて

幸せな家庭を、と思っていた。
旦那様とか結婚とかあれだが、戸籍上マスターと結婚した事になっており、現在は表向き後妻の未亡人で、それはそれでこう、妖しげでちょっと陰のある美女感が増す感じで良いかもとか思わなくも無い。
……歌にもあるではないか。ちょっと振り向いてみただけの未亡人。あれ？あれは未亡人だっけ？違法人だっけ？違法な人ってなんだ??
などとうろ覚えだったりするキアラであるが、そんな昔の歌はどうでもよろしい、とマイペースなキアラさんはそう思う。いや、何が言いたいんだあんたは。
まぁ、マスターは死んでおらず赤ちゃんになっているわけであり、全ては偽装なので悲しくともなんともない。むしろマスターを助けられてホッとしているのだ。むしろマスターを再生させて赤子として産むと決めたら、すんなりとそれが一番良い事だと腑に落ちてしまったのだから不思議なものである。
それどころかこれが自分の有るべき姿であるようにすらキアラは思ってしまい、さらにはある種の悟りのようなものまで会得してしまった。
則ち、魔性菩薩の行き着く先はママであり、快楽の先は私がママになるんだよぉぉ！な感じで魔性菩薩もやがては母性菩薩に至るのだ、と悟ったのである。
超暴論である。

殺生院キアラには誰が何を言ってもマイペースにとことん前のめりに突き進むような存在である。

キアラはあえて言う。「懐妊せずして何が魔性菩薩か！」と。そして「胎蔵とは胎に蔵めると書くのだ。孕んでなんぼなんじゃい!!」と開き直った。

もうその辺りでかなり変であった。変であったがそれがもっと変になったのはマスターを産んでからである。

産まれたマスターを一度抱けば、もはやキアラの心はママ菩薩、我が子を見ればもう止まらない。愛がずっきゅーんと来てたまらない。

元々、殺生院キアラは思い願うだけで己を聖人にも魔性菩薩にもビーストＩＩＩにも成れるような人物であった。そんな存在なのである。

何が厄介かと言えば、思い込みだけで殺生院キアラは魔性菩薩から自らを進化させてしまい、母性菩薩と成り果て、変成してしまった事であろう。

マイペースも極限まで行けばおかしな悟りに至るということだろうか。

我が子がお腹を空かせていると感じたならば、もうおっぱいが張って、衝動的に母乳を与えたくて仕方が無くなる。我が子のオムツが汚れていると感じたならすぐさま取り替えてその不快感を取り除きたくなる。我が子が安らかに寝ていたならばもう、見守るだけで幸せだし、我が子を抱いたならもう、頬ずりしたりキスしたりしたくなる。

食べちゃいたいぐらいに可愛いのだ。食べたりはしないけど。大人になったら食べちゃうかもだけど（意味深）。

中身がマスターで老人？そんな事は関係ない。いや、マスターだからこそなのか。主（あるじ）たるマスターを腹に宿し、生み出し、おっぱいあげたり抱っこしたりオムツ替えたり、オムツ替える最中に幼いぞうさんを見てキャーッ！としたり愛でたりすりすりしたり、なんにせよ我が子ラブ。子煩悩、ムスコン、ベイビーマスターラブ。なんとでも言うが良い、もうメロメロなのだ。

そう、もう誰かにこの気持ちを分かってもらいたい！むしろ盛大に自慢したい!!

と、言うわけでキアラはカルデアに来てから親しくなった知人の一人であり、いろいろと相談を聞いてくれる友人のメディアに言った。

「もう、可愛くて可愛くて仕方ないので御座います！」

キャーっ、と満面の笑みを浮かべて。だが友人の顔は困惑の表情だった。

おそらく、メディアがマシュを連れてベビールームにやって来たときになされていたキアラの授乳とかが原因なのだろう。

もはやレイプのように行われていた授乳の時のマスターの念で発せられた『みぎゃーーーっ!!』というある種悲痛な叫びがマスターの無念さを表していた。

けぷぅ、とげっぷと共にしくしくしくしく。

というか、本来ならば微笑ましいはずの授乳でしくしく泣く赤ん坊。異常である。
キアラにベビーベッドに寝かされつつも嘆くマスター。
『……１００歳近く生きて、授乳……。ほ乳瓶でええやんかぁ……』
何故か関西弁で嘆くマスターである。
「ま、まぁ、母乳の方が健康に良いと言いますから」
そんなマスターをフィギュアサイズのマシュがマスターをなだめる。
マシュはキアラの授乳を仕方ない事だと思っているようである。
マシュはマスターの妻であり、また、二人の間に子供を考えていたのだ。残念ながら授かることは無かったが、いざという時に備えて彼女は育児に関する知識をかなりの量で調べて得ていた。それ故であろう。
「それは仕方が無いのです。普段はさほど出ないので搾乳器で絞ってもストック出来ないので御座います。授乳の時間が来ないと出ませんし、飲んで頂かねば張って痛いですし、授乳が終わるとお乳が出なくなりますので……」
キアラはそう言いつつ頬に手を当てて困った顔をした。
「キアラさんは〈差し乳〉なのですね。意外です」
マシュはふむふむ、とキアラのおっぱいを見つつ言う。
差し乳とは、授乳期の女性のお乳の分泌のタイプの一つであり、授乳の際には母乳が

出るがそれ以外では分泌が少ないタイプのおっぱいの事である。
逆に、常にお乳が分泌し続けて溜まって行くタイプもあり、それを溜め乳とか溜まり乳と言うのである。
どちらの体質が良いか悪いかは別として、そういう体質がある。
「授乳する時に、一気に分泌しますので足りないという事は無いのですが、吸っていただけないと辛いので御座います。というか、ほ乳瓶に移し替えるよりは直接が早いですし、愛情的にもそちらの方がいいと思うのですが……」
「うーん、キアラのお乳は一般的な差し乳では無い気はするけど、出ない訳じゃないし充分な量なら直接が手っ取り早いのはたしかね。マスター、ワガママは言わない事ね。授乳期の間は嫌がらずお飲みなさいな。赤ん坊なら当たり前の事なんだから」
メディアはかつては子を持っていた事もあり、授乳に関しても経験がある。それに女性の体質的な悩みや育児の悩みもよくわかる。
『……粉ミルクで……』
「「ダメ（です）!!」」
キアラとメディアとマシュにダメ押しされる。
「お乳の栄養には充分気遣っております！」
「母乳で胸が張ると痛いんだからっ！それにお乳が出るなら粉ミルクなんて必要ない

わっ!!」
「きちんと吸ってあげないと辛そうです！」
何だろう、これではマスターが一方的に悪いような感じである。しかし羞恥心もあるのだ。中身が老人なのだ。喜んでおっぱいに吸い付いたら変態だと思われかねないのだ。これでもカルデアのマスターなのだ。体裁というものがあるのだ。
『ううう、俺は……老人なんだよ？中身。おっぱい飲むって、なんかやっぱり抵抗あるんだよ。想像してみてよ。よぼよぼのお爺さんがおっぱいに吸い付いてる所を。なんか変態的じゃないか？』
だが、そんなマスターに大きな声で叱るように言う、マッチョメンが現れた。
「だらしねぇなぁ！」
と、筋肉ムキムキ、ドリル状の大剣カラドボルグを担ぎ、堂々と女三人と赤ん坊一人の部屋に入って来る男。
フェルグスの兄貴である。
そしてフェルグスは大きな声で断言する。
「マスター。男はなぁ、女の乳吸ってなんぼだっ!!」
どぉぉぉん!!と、効果音が聞こえそうなほどに胸を張り、力説する。
「良いかぁ、赤ん坊の時から男って生き物は女の乳に生かされ、そして女の胸に帰るもん

だ。時には女の尻を追いかける時もあるが、抱き合うときは正面と正面だ。つまり、おっぱいから男は離れてはいけない!!間違うんじゃねぇ、おっぱい吸うのに年齢なんざ関係無い!!いいじゃないか、おっぱい。というわけで、どぉれこの中で俺におっぱいを吸わせてくれる……」

女はいないか？とフェルグスが言おうとしたその時、キアラのエクストラアタックが無情にもフェルグスに襲いかかる。

「応供・四顛倒!」

ずどーーん!ずどーーん!!

強烈な気を込めた打撃がフェルグスを部屋から文字通り叩き出した。

殺生院キアラは格闘技や体術においても達人クラスであり、その技の入りは例え歴戦の勇者であるフェルグスでさえも見切れず、一瞬の隙に数発重いのを入れられ吹き飛ばされた。

フェルグス轟沈。

「おととい来やがりませ」

キアラは何事も無かったかのように、静かに無表情でドアを閉めて、また部屋の中へと戻った。

「……そう、赤ちゃんなのですからおっぱいで育つのは道理で御座います。医学的に考

えてもそれ以外の栄養源は無いので御座いますし、何より私が吸って頂けねばおっぱいが張って痛いのですし。ここは目を瞑って甘受して下さいまし……と、皆様どうなさいました？」

「……いえ、ナンデモナイデスヨ？」

（そう言えばキアラってめちゃくちゃ強かったんだ……）

メディアとマシュは久々に見たキアラの強さにゾーッと顔を青ざめさせていた。キアラも伊達や酔狂でラスボスは張っていなかったのだ。その強さは今も現在である。

『……容赦無さ過ぎだ、キアラ。というかフェルグスの兄貴は何しに来たんだ？』

「さぁ？まぁ、そのような事はどうでもよろしいです。とにかくママのおっぱいは栄養！わかりましたね？マスター」

キアラはマスターにそう言いつつも、内心ニンマリとほくそ笑んでいた。

そう、おっぱいから突破口を開き、マスターから甘えさせるように持って行こうとキアラは思っているのだ。

マスターを自らの手の平にしっかりと捕まえ、そして甘々のママ生活を送る。そのために、今から教育を施して行く。

ママ菩薩となっても殺生院キアラの本性はさほど変わらない。愛する我が子を第一にしつつ、その我が子を絡め取って離れられないように。

魔性ママ菩薩。

その恐ろしさをまだマスターは知らないのであった。

……とはいえ、マスターが果たして気づくかどうかはまだ別の話であり、多分、平常のまま過ごして平々凡々としているのに違いないような気もするのだが。

コロンブスの卵とは、卵を立てる事ではない。

アメリカ大陸発見はだれにでもできると評されたコロンブスは、卵を立てることを試みさせ、一人もできなかった後に卵の尻をつぶして立てて見せ、だれでもできそうなことでも、最初に行うことはむずかしい、と、したり顔で言ったそうな。

『コロンブスの卵』として有名な逸話だが、そのような逸話を残したとしても、コロンブスはろくでなしである事には違いあるまい。

だいたい、アメリカ大陸発見というが、ネイティヴアメリカンのジェロニモからすればアメリカ大陸、いや、彼らの大地はそもそもからして、彼らが住まう場所にあり、ただ勝手に白人達がやってきただけの事なのだ。

未知のフロンティア、とか言うが、そこに住む人間からすれば未知でも何でも無く普通に自分達が住んでいる土地なのである。

正直、ネイティヴ・アメリカンの彼らにとっては白人とは大地を奪い、虐殺を行い、彼らの秩序もなにも考慮しない、ろくでなしの群れであったのである。

とはいえ、英霊となった上は歴史上の出来事であり、もはや過去の話なのである。大いなる大地のシャーマンであったジェロニモもそれはもはや受け入れている。

しかしながら人の好き嫌いというものはどうしようもない。ジェロニモにとってコロンブスは、白人の白人たる愚かさの塊という認識であり、その性質は正直なところ忌み嫌うものであった。

まぁ、嫌う者には関わらねばいいのであり、ジェロニモはコロンブスに対してはそのようなスタンスで無視していたのだが、とはいえ、同じカルデアにいるのだ。完全に関わら無いというのは不可能である。

と、言うかジェロニモは現在南極のカルデアの警備部のアドバイザーという立場にあるのだが、久方ぶりにコロンブスがろくでもない事をしでかし、そして逃げ出そうとした、という事から駆り出され、捕まえたのだが、そのコロンブスのやった事はと言えば、ジェロニモからすれば赤ん坊の服を盗んだ、という何とも下らない窃盗だった。

ある意味、平和は人を落ちぶれさせるのかも知れないとジェロニモは溜め息をつき、散々悪態吐きまくるコロンブスをエレナ・ブラヴァッキー女史やエジソン、テスラに引き渡したのだが、あとの事は彼女らが裁くだろうとそれ以上介入はしなかった。

彼にとって、卵が立とうが転がろうが特に興味は無い。その卵がある意味も。卵が卵であるならばそれが卵なのである。最初に誰が立てようが意味は無く、そのことで大地も海も変わりは無い。

罪が罪であるように、罰が罰であるように。

報いは必ず何事にもあるが、今回の件で誰か被害者はいるのだろうか?とジェロニモは多少思う。

なんとなくマスターに被害が及ぶような予感はしたが、どのみち些細な事なのだ、そう対して大事にはなるまい。

ジェロニモは肩をすくめて自分の部屋へと帰っていった。

現在、カルデアでは着ぐるみベビー服の先行大増産が行われていた。

ベビー服を大量生産せねばならなくなった発端はコロンブスが小遣い稼ぎに黒髭が作った着ぐるみベビー服を盗み、ネット販売サイトで売った事による。

何が厄介だったのか?と言えばこのコロンブスという男は、物を売るときに必ずその性質や性能をきちんと把握し、その上でそれに見合った値段をつけ、最大の利益を得る努力を惜しまないという、商人としての才能を多分に発揮する所である。

用意周到に商品の価値を上げるために、世のお母さん達に信用のある、カルデアブランドの名前を出し、そのベビー用品部門の、リサーチ用の商品だと偽って販売したのである。

可愛さと機能性を両立させた黒髭の着ぐるみベビー服は飛ぶように売れ、事が露見した時にはもう回収を諦めるしかなかった。

購入したお母さん達が非常に気に入ってしまって返却に応じなかったためである。

世界中の赤ちゃんを持つお母さん達から、カルデアのベビー用品部門に商品のリクエストのメールや電話が殺到し、その対応に部門の責任者であるアタランテがてんやわんやになるという事態に発展したのだった。

もはや事態の収集には、実際に着ぐるみベビー服を商品化して発売する以外に道は無い、と判断した統括理事のヴラド三世（ランサー）はその生産ラインを確保しようと思ったわけだが、そんなに早くに確保出来るわけもない。

故に生産ラインが確保されるまで先行注文分をこうして南極はカルデアの服飾室にてサーヴァント達で家内産業的に作るしかなかったのである。

ちくちく、ちくちく、ちくちく。

「とほほ、なぁんで俺が縫い物なんてしなきゃならねぇんだよ?!」

コロンブスがちくちくと布を縫いながらぼやいた。

黒髭の作ったベビー服を売り払った罰は、ベビー服を縫って償うべし、とエレナ・ブラヴァッキー女史が強制的にここに連れてきたのである。

故にコロンブスは自分が売り払ってしまった数の数百倍のベビー服を縫わねばなら

ず、もうその作業に数日間も従事させられといたのである。
しかし、コロンブスがそうやって作業させられるのは自業自得であるのだが、その作業をしているのは何もコロンブスだけではない。
「うるせぇ！口よりも手を動かしやがれ！ノルマ上げるまでは許さねぇからな!!」
黒髭もちくちくやりながら、いつもの口調ではなく、素の海賊の本性丸出しで怒鳴った。
「こっちゃあお前のとばっちりで何日も何日もこうして針仕事だ！つか、いい加減な仕事してみろ、ぶっ放すぞおらぁ!!」
そう、黒髭もこの作業に駆り出されていた。
オリジナルの制作者故に、であるが、はっきり言ってとばっちりとも言える。
黒髭もかなりストレスが溜まっているようである。正直なところ、黒髭はこのコロンブスという男に対して、あまりいい感情は持ち合わせていない。
「あんたらねぇ、赤ちゃんの服を縫ってんだよ？もう少し優しく心入れて縫いな！」
ドレイクも駆り出されてちくちく、ちくちく。
彼女も作業に駆り出されているが、彼女の場合はカルデアに来てからの友人であるエレナ・ブラヴァッキー女史に頼まれて付き合っているのである。
黒髭とコロンブスだけだと喧嘩になるのは目に見えていたからである。

ドレイクは黒髭にもコロンブスにも一目置かれており、抑えにも非常に頼りになる人物である。また、コロンブスはジェノヴァの出身であるが、彼が新大陸を発見する際に使った船はスペインの船である。故にドレイクとは相性が悪い。

何しろドレイクはかつてアルマダの海戦においてスペインの無敵艦隊を破っており、スペインにおいては悪魔とすら称された事がある人物である。

また、彼女は生前とにかくスペインが気にくわなかったようであり、スペイン海軍をとにかく徹底的に叩いた事でも有名だったりする。

英霊となった今ではさほどそのような感じは無いが、ブーディカがローマ特攻を持っているのと同様に彼女もおそらくはスペイン特攻を持っているはずであるし、持っていなくてもスペイン相手に彼女は一歩も退くことはなかろう。

エレナにとってはこの男臭くなった服飾室に誰か女性で手伝ってくれる人がいれば、と思っていたのでドレイクが快諾してくれて非常に助かった。

なにより、作業においてもドレイクの仕事は細かく丁寧であり、そして作業が早いのだ。

エレナはドレイクにだけ伝えたが、今回の作業にはコロンブス以外はお給金が出る事になっている。

無論、このベビー服の基本構造を作った黒髭にはそのパテント料やその他が入る事に

なっているが、エレナはまだそれを伝えてはいない。ドレイクがまだ伏せとけと言ったためである。

ドレイク曰わく、要らんコミケだかパイケだかで散財するだろうし、黒髭がいつもの調子でニヤニヤしていたら金の匂いに敏感なコロンブスが気づかぬ訳は無いからだ。

騙し騙され、が海賊稼業というものである。儲けは儲けた奴が後でパーッと使えば良いのだ。

「海賊ってのは盗った盗られたは当たり前、そいつぁ、盗られたモンが悪い！メンツ潰されたってんなら、これ全部縫い上げた後でケジメつけてやんな！つーか、シェヘラザードはコロンブスがいると出てこないし、ブーディカと頼光はベビー服のパンフの撮影だし、アンとメアリーは逃げてったし!!」

とは言え、こういう家内製造的な作業で貰える給金というのはささやかなものである。ドカンと一発やってどっさり、というのが好きなドレイクとしては、やはり性に合わないのは確かである。

ドレイクも愚痴の一つや二つこぼしてしまうのは仕方なかろう。

「あたしだってマスターを見に行きたいってのにさ」

彼女の場合、作業云々よりもやはりマスターの見物に行きたかったようである。

「ごめんねぇ、ドレイク。こんな事に付き合わせちゃって」

エレナは済まなさそうに頭を下げたが、ドレイクもこのむさ苦しい野郎二人の中にエレナを置いておくのは可哀想だと思ったので手伝っている。

「いやぁ、どうせここじゃ暇を弄ばせてたんだ。構いやしないよ。どうせしばらくすればマスターにはいつでも会えるようになんのさ」

現在、マスターには面会規制がされている。何しろ精神はともかく、身体は生まれたばかりの赤ん坊なのだ。まぁ、大抵のサーヴァント達の面会は大丈夫であろうが、一部のサーヴァントの中には少々、会わせて良いものかどうか迷うような者もいる。

例を言えば、清姫、静謐のハサン、オペラ座の怪人、ネロ、エリちゃん、メカエリちゃんシリーズ、などである。

清姫は行動的なヤンデレである。何かあればまだ赤子のマスターでは対処は難しい。まぁ、普段は理性的ではあるのだが、老齢のマスターが病床に伏せった頃に「いっそ、自分の手で……」などと発言していた事により、その当時から面会規制をかけられていた。

静謐のハサンはその毒姫の体質により、自主的に面会を控えているのでまだ安心である。ただ、細心の注意をせねばなるまい。

オペラ座の怪人は、どうも最愛のクリスティーヌとマスターを重ねているらしく、好意を抱く＝クリスティーヌ、という厄介さを持っている。無論、彼もなんとか理性を振り絞ってはいるものの、やはり危険であると判断された。

ネロとエリちゃんは子守歌の練習をしていた為、面会規制である。
メカエリちゃんシリーズは危険極まりなさすぎなので同上。
しかしマスターを慕っているのは皆同じであり、誰もが会いたいと思っているため、故に全体的な規制となったのである。
だが、今回のベビー服の撮影はスタジオになっている部屋の窓からの見学は誰でもOKとなっている。
故に、ドレイクも見に行きたかったわけである。
「エジソン達が自動ベビー服作製機を急ピッチで作ってて、あと1日で完成だ、って言ってたから……変な所で喧嘩してなきゃ、だけど」
「……エレナ氏、そりはエジソンとテスラの所に監督に行った方がいいのでは?というか、喧嘩をしていないわけはないで御座る故」
黒髭はいつものオタク口調でエレナに言った。
エジソンとテスラは犬猿の仲である。電気の直流と交流だけでも喧嘩をする。それだけでなく、細かい機械の構造や様々な方式などでもやはり喧嘩をする。とにかく何かにつけて喧嘩を始めるのである。
「バベッジ博士が付いているから、大丈夫だと思うけど……。まぁ、一段落したら見に行くわ」

いつも二人の喧嘩をエレナが止める、というのがいつものパターンである。
エレナは二人の共通の友人なのではあるが、オカルトの世界の一任者と科学の天才達が友人というのも奇妙なものである。
だが、英霊というものはある種、魔術によって現界しているわけであり、サーヴァントは充分オカルトその物と言えよう。それが生前、現実主義者だった者でも、オカルトを信じる者でも、神職者、悪魔崇拝者、善人悪人問わず、何らかの人々の願いや想いを受けて、英霊の座についているのだ。
「あー、あんたも大変だねぇ」
ドレイクが苦笑する。
「仕方ないわ。いつもの事だもの」
エレナはカタカタカタ、カタカタカタ、と昔の黒い足踏み式ミシンでベビー服のパーツを縫い長らく溜め息を吐いた。
なんだかんだ言っても彼女は面倒見が良く、また彼女と交友関係は広い。彼女を嫌うようなサーヴァントはおらず頼りにされているのだが、それ故に気苦労もまた多い。
「はぁーっ、今日のノルマ、あとどれだけかしら?」
「……俺ぁ、あと十着だな」
「拙者、あと九で御座るよ」

「あたしは、あと六かね」
「……もうちょっとね。はぁ、私で十二着か。ミシンよりも早い手縫いって、どんだけなのよみんな」
「んー？そりゃあ早くないとな。さっさと済ませたい仕事ではあるわなぁ、針仕事ってのは」
　コロンブスは頭を掻きつつエレナに答えた。この男は細かい作業をあまり好んでやるような男ではないが、それでもそれがやらねばならないことならばとっとと片付けたがるような所がある。めんどくさがりだが、やるときはキチンとこなす。
「……お前と意見が合うのは癪に障るが、たしかにそうだわな」
　黒髭もコロンブスに同意するが、黒髭はだいたい細かい作業は好きな方である。しかし、趣味でやるのと作業としてやるのとではやはり違うのだ。
「ま、年期かねぇ。……年増って意味じゃないからね？」
　ドレイクの言葉に黒髭がＢＡ…と言いかけたが、ドレイクに睨まれ押し黙る。言ったが最後、どうなるか分かっているからである。
「ま、お嬢ちゃんの分はこっちに廻して、エジソン達ん所行けよ。あっちの機械が出来なけりゃ、いつまで経っても俺ぁお針子さんの真似事をしなきゃならねぇからな」
　コロンブスは苦笑しつつそういい、「ほれ、寄越せ」と手でクイクイとそうするように

エレナに促した。
「え？いいの？」
「仕方ねぇだろう？完成してくれなきゃ、明日もこれだ。いい加減飽きてきたからなぁ」
「ああ、ＢＡ……ドレイクもマスターの所に行くといいで御座るよ。後の分は拙者がやっとくで御座るし。まだ撮影見学には間に合うで御座ろうし？」
黒髭もそう言ってニマッと笑う。
「大丈夫かい？あんたら二人だけで？」
喧嘩しないだろうね？とドレイクは訝しんだが、しかしマスターを見に行きたいという欲求には抗えないようで、迷っている素振りを見せた。
「「大丈夫さ（でござるよ）」」
二人はそういい、片や信用出来そうにない笑みを浮かべ、片やどうにも少し気持ち悪い感じと無邪気な笑みを浮かべて言った。はっきり言って大丈夫な気がしない。
「……喧嘩したら、マハトマの天罰が落ちるからね？」
「やらかしたら、ぶっ放すからね？」
だが、エレナは確かにエジソンとテスラが心配であり、ドレイクはマスターを見に行きたい。
こちらも心配ではあるが……。

彼女達は、二人の好意……なのか？を受ける事にして、服飾室を出て行った。

二人が出て行った、その後。

「ところでよぉ、エドワード・ティーチさんよぉ。この着ぐるみは『良い商品』だよなぁ」

「うん？そりゃあマスターん為に熟考を重ねて作ったからな。悪いわきゃねぇ」

「だが、新商品だろ？着ぐるみだけじゃちぃいっと商品としてラインナップが足りねえと思わねぇか？」

「ふむ？足りねえってどういうこった？」

「いや、あるだろ？遊び心でこう、統一感みたいなのでよ、例えばこれはクマだよな？じゃあ、ほ乳瓶もクマ、抱っこベルト？って言うのか、それもクマで合わせられるような、そういうグッズも併せて売れば、より商売の幅が広がるんじゃねぇか？」

「……なるほどなぁ。しかし、手間がかかるっつーか、テメェ、何考えてやがる？」

「いや、タダ働きじゃ割に合わねーからよ。プラスアルファでなんか金を稼ぎたいんだよ。だから、次のラインナップ考えて、発案俺で設計お前、でなんとかならねぇか？とな』

「そいつぁ虫が良過ぎじゃねぇか？」

「いや、アタランテのねぇちゃんにはもう話を持ってってるし、それに、もう案は考えてるんだ。これを見てくれねぇか？」

コロンブスは懐から何やら紙の束を出してきた。
それは、ほ乳瓶やら抱っこベルトやら、乳母車やらの基本設計図である。
「ファッションなんてものは統一感が大事だろ?」
ニマリ、とコロンブスはほくそ笑んで黒髭にそう言った。転んでもタダでは起きないその性格に黒髭は少しゲンナリしたが、確かにコロンブスの言うことには一理ある。
二人はちくちくちく、とベビー服を縫う手を休ませず、しかし、コロンブスと黒髭はこの儲け話をノルマが終わるまでみっちりと話合う。
それは、やがて様々なサーヴァント達の構想を取り入れ、今までに無かった新機軸のベビー用品として生み出される事になる。
コロンブスの卵とは、こうして生まれるのかも知れない。

マスター語り～どう足掻いても手のひらの上。

おっぱいに襲われる。

そんな毎日を送る赤子になったナイスオールドだったマスター、それが俺。皆様ごきげんよう、マスターです。

あれから何日も何日も、おっぱい。

おっぱいがいっぱい、心労もいっぱい。

でも人間って慣れるもので、まぁ、キアラのおっぱいにも慣れた。いや、慣れない。

どっちやねんとつっこまれそうだが、つまり授乳には慣れたけど、女性のおっぱいに対する恥ずかしさには慣れていないという意味だ。

吸う→おいしい（味覚として）。見る→はずかちい（視覚として）。

授乳の際、キアラはポロリなど目じゃないぐらいにモロリとおっぱいを出す。揺さぶるんと出す。非常に気前よく出す。すんごいおっぱいを。惜しげもなく。

正直に言おう。目の毒です。

酸いも甘いも噛み分けた、という表現があるが正直な話、女性関連では俺は全くそういう事は無かった。いや、妻のマシュと付き合う前もその後も。

それにマシュとは清い関係のまま過ごして、結婚したのだってカルデア買い取って運営出来るようになってからだし、浮気も何もしたことも無い。

つーか、そういう事したのだって結婚してからだし。

そりゃあ、清姫とか静謐ちゃんとか、色んなサーヴァント達に迫られたりとかいろいろしたけどさ。

裸なんて、そんなに見たことは……ないとは言わないけど、貞操を守りつつマシュとゴールインしたのだ。

故に、慣れない。おっぱいとか、おっぱいとか、そういうのは。

だから、心眼は使わない。まだ生まれて数日の俺の目はあんまし見えないから瞼も閉じる。これで何も見えない。

見なければどうという事はない！引いたら負ける、前に、前に出ろぉぉっ!!という感じで自ら咥えに行くスタイル。何に負けるかとかは自分でもわからないけど。

しかしなんだね、目を閉じてたら他の感覚がやたらと鋭く感じられるもので。

口に含む乳首の感触とか。頬に当たるさらりとしたおっぱいの柔らかな感触とか。

抱っこしてる腕の優しさとか。

非常に心地良いのだ。

なんかいい匂いだし、温くて安らぐし、柔らかいし。

ついついおっぱい吸いながら、うとうとと寝そうになることもしばしばある。
どうせね、妻にも秘書にもキアラの母乳を吸えなどと叱られた身だ。ほ乳瓶で粉ミルクなど以ての外！と言われ、おっぱいを吸うしか無い哀れな赤ん坊なのだ。
赤ちゃんがおっぱいを吸うのは浮気じゃない！と断定されたこの上は、ちょっとぐらい、そう、ちょっとぐらいおっぱいの気持ちよさとか安らぎとかそういうのに浸ってもいいじゃない、という気分になる。
いやいやいや、ダメだ、と頑張って意識を保とうとはするんだけど、いつの間にか寝てしまっていたりする。
あと、味。
キアラは美味しい母乳にするために日夜努力をしていると言うが、本当にどういう努力をしてんだろか？と思うほどに、ほのかに甘くて、のど越しすっきり、適度に飲み応えがある。つまり美味しい。
……キアラには内緒だけど、試しとしてナイチンゲールがほ乳瓶を試させてくれた事がある。
だが、ほ乳瓶の吸い口はちょっと感触が悪く、粉ミルクの味もなんか物足りなかったのだ。
くっ、認めたくはないけど、キアラのおっぱいが……至高だとはなぁ。

ちうちうちう。
それにほ乳瓶にはこの安らぎが無い。おっぱいの感触は非常に安らぐんだ。
はぁ、魔性菩薩の授乳に安らぎを得るなんて、なんとも恐ろしい事であろう。だけど仕方ないじゃない。
赤ん坊なんだもん。
今の俺は世界で最も弱い生命体の一つで、どうあがいてもキアラのおっぱいを飲むしかないし、それに優しくしてくれてるならそれはそれでいいじゃない。
いや、落ちたとか堕ちたとか言わないでくれ。成長した暁には、立派に離れて見せるとも。
などと散々、俺はエロく無いし、おっぱい吸うのは仕方ない！と言い訳しつつ、ちうちうちうあまあまうまうま。ええ、なんと言っても堪能してます。おっぱいおっぱい。にへへへへ。
「うふふふふ、だんだん飲む量も増えて……体重もだんだん増えて来て成長して御座いますわねぇ」
優しい口調でキアラが感心したように、そして嬉しそうに言う。その声には慈しむような色が混じっているが、なんというかそれが心地良くも照れくさい。
『ふっふっふ、そうだろうそうだろう。最近は物が掴めるようになってきたんだ』

照れくささを誤魔化すようにおどけていうが、実際身体を動かす感覚がちょっとずつだがしっかりとしてきている。その証拠にキアラのおっぱいをちょっともみもみ。

いや、単に感触が気持ちいいのだ。赤ん坊のする無邪気な甘え行為だ、多目に見てくれ。

「んふっ、マスターはママのおっぱい大好きで御座いますねぇ」

『うん、なんか手触りが良い。あと美味しい』

肯定する。うーむ、俺、こんなんでいいのだろうか。

『夢はやはり、エミヤの飯を食うこと!……キアラとかメディアさんとか、みんなうまそうに食ってんもんなぁ。俺も早く皆と飯とか食いたいよ』

「あらあら。でも、大きくなっても甘えても良いのですよ?このおっぱいはマスターのもので御座いますし?」

『……まぁ、離乳まで、な?』

「……まぁ、母乳出なくなっても、甘やかせて差し上げますけれど?」

くっ……なんという魅惑の誘いだ。だが、このまま流されるわけには行くまい。

『……小さいうちは、頼む』

「まぁ、そういう事で手を打ちましょうか。今は、まだ……うふふ」

心眼を閉じている為、キアラの表情は見えないが。

故に耳は鋭く、聞こえる声はやはりちょっとどころではない恐怖だった。
「どう足掻いても手のひらの上。掌（たなごころ）に捉えた子を……こぼす殺生院では御座いませんけれど」
ぞわわわわわわわっ!?
先ほどまでの夢心地が霧散し、俺は恐怖で身を硬くするのみだった。
そう、しかし俺の身体はキアラに抱かれたままであり。どうあれど逃げられない。
はやく、大人になりたい！怖い、怖い！マジ怖ぇえええっ!!

マスター語り～おっぱいと着ぐるみ。

《お久しぶりな気がします。皆様、ごきげんいかがですか？俺マスター。今日も元気だキアラママ大好き！おっぱい大好き！。
そう、いつもモミモミしたり、ちゅうちゅうして、甘えてるんだ！だって気持ち良くて美味しいから！ママ大好き！》
キアラがなんかさっきから寝ている俺の横でそんな事を言っている。
はっきり言おう。キアラが勝手に言っているだけで俺のモノローグではない。俺が寝かされているベビーベッドの横で、キアラが勝手に言っているだけだ。断じて俺のモノローグではない！
「あら？起きられましたか、マスター」
《目の前には、おっぱい。俺が大好きなママのおっぱいだ、もんでいいかな？吸ってもいいかな？》
『せやから変なモノローグを差し込むのはやめろ！つか、おっぱいモロリも止めれ』
『マスターはそう言いつつも、ブレないキアラに感心しつつ少し嬉しく思っていたりする。ああ、変わんないなぁ、この人などと思いつつ差し出される乳に食欲さえ感じる自

分をやや嫌悪しつつも仕方ないんや、俺、赤ん坊なんや、と心で泣いた』
「まぁっ、この説明文は……紫式部さん?」
「……ああっ、勝手に発動してしまいました!マスターすみません。あの、キアラさんに頼まれていた絵本をお持ちしたのですが。いえ、母と子です、赤ちゃんはやはりそういうもので……」
『ちょっと待て。今どんな説明文（ナレーション）が出たんだ?!』
「いえ、なんでもございません」
『キアラはニヤリと笑いつつもマスターが愛しくてたまらない様子である。もう一度アミデュってまた出産してやろうか、などと一瞬思ったが、それでは抱っこもおっぱいも出来ない。それに成長していく我が子を見るのが母の正義などと思いつつ、いつか成長した息子をピーーーーッ（放送禁止用語）したり、息子の息子を弄んだり、ピーーーーッ（放送禁止用語）したりしてやるなどと目論んでいる』
『怖っ?!つかなんて事考えてんだよお前っ?!』
「……と、とりあえず、ほほ、ほ、本は置いて行きますね?!あの、マスター、お元気でっ!」
　紫式部は顔を真っ青にして、本を床に置くと逃げるように部屋から出て行った。
『いやぁーっ?!式部さん待ってえぇぇ!』

手を伸ばすが、赤子の手である。紫式部に届くはずもない。
キアラはそれを、あらあら、という風に見送った。そしてマスターに向き変えると、
「食欲、ですか。はい、抱っこ抱っこ」
乳を仕舞わずに俺を手でひょいと持ち上げて抱っこして抱えた。
その一連の動作は自然であり危うげな所など全くない。まるで母親としてベテランの域に達した赤ちゃんの扱い方である。
『……なんか、手慣れてきたよな?』
「はい、マスターの扱い方はもうこれこの通り。そして以心伝心、はい、おっぱい」
『……こっちは、慣れないんだけど』
「慣れて倦怠期に入られても困りますので、丁度よろしいかと?」
『……なにかそれ、違う気がするんだが』
赤ん坊故に仕方ないんや、他に栄養源ないんや、と俺はキアラのおっぱいにむしゃぶりついた。
ちうちう、んくんく、と母乳を飲んでいると、部屋のドアが開いて、源頼光とブーティカ、シェヘラザード、ドレイクが入って来た。なんでも、カルデアの子供用品部門の新製品のＰＲの撮影に、俺にモデルになって欲しいという話は聞いていた。
ウチの会社の製品だから拒否は……まぁ、出来ないので了承したわけだが、彼女達は

その撮影の見学にかこつけて俺の様子を見に来たのだろう。
撮影の機材を用意するのに手間取っているとかでスタッフが遅れているそうで、時間は二時間ほど余裕がある。
だから俺もキアラもこうしてまだ、のんびり出来るわけなのだが、まさか授乳されている時に彼女達が来るとは。
『……（ただの赤ん坊の振り。ただの赤ん坊の振り。俺は全く無垢で無邪気な赤ん坊ですよ～）』
ただの赤ん坊の振りをするしかない。いや、赤ん坊なんだけどな？
「とても良い飲みっぷり。これはスクスク育つわね！」
ブーティカが挨拶もそこそこ、そう言ってキアラのおっぱいに吸いついている俺の様子を覗き込んで来た。
というかかなり恥ずかしい。いや、無心無心。
「……ううっ、母は羨ましいです。くっ、この身にマスターを宿せられたならば、私がマスターに乳を上げられた事でしょうに。しかし、とても一心不乱に吸うものなのですね」
頼光はそんな事を言いつつじーっと眺めてくる。
「まぁまぁ、仕方ないさ。というか赤ん坊に返ったって頭ん中まで返ってんのかい？モ

リアーティの話じゃ、頭脳は普通にマスターだって話だったけど?」
ドレイクがはて?と首を傾げる。
君のように察しの良い女海賊は嫌い……じゃないけど必死でただの赤ん坊のフリしてる今、それは言わないで欲しかったって思うよ。
「はぁ、死を免れる事は良いことです。生きるために乳を吸うマスターもまた、よろしいかと」
なんだろう、シェヘラザードさんがそう言うと生きるために仕方なく乳を吸うしか無いんだと言うのが悲壮感漂う悲しい運命のような、そんな感じに聞こえるんだが?
お腹いっぱいになって来て、キアラのおっぱいの出が止まる。なんというか、どうなってんだこのおっぱい、などとも思うが、多分そんな事は考えてはならないのだろう。
キアラはおっぱいから口を離した俺の背中を優しくトントントンと軽く叩く。そうしないと、まだ発達していない俺の胃はおっぱいを飲むときに同時に入った空気で母乳を押し出してしまう。つまり乳吐きをしてしまうのだ。
だから、背中を叩いてもらって、げっぷを出させてもらう。
『けぷっ』
「は〜い、マスターちゃん、たくさん飲みましたねぇ」
なんぞとキアラは笑って言う。いつもなら俺は、ええい、赤ん坊扱いすんな!的に返

すのだが、やはりみんなの前で授乳シーンなんぞ見られてかなり恥ずかしいのでただの赤ん坊の振りをしてるのだ。

そう、今の俺、赤ん坊。なんも話さないよ？

「うぷぅ、んにゅう」

幸いな事に、まだ俺の口は発語できるほどにまだ発達していない。何か言おうとしても赤ん坊のうにゅうにゅしたような意味のない音しか出て来ない。

よし、イケル！

「だーだー、うぴぁ？」

「うわぁ、マジでこれ、頭ん中まで赤ん坊になってるんじゃないかい?!」

ドレイクが何となく顔を青くして言う。

「はぁ、いつもは悪態ついたり、ノリツッコミをしたりするのでございますが、おそらく授乳を皆様に見られたのでただの赤ん坊の振りして誤魔化そうとしているのでございましょう」

キアラがあっさりとバラしたのと、ドレイクの顔色を見ていて俺は観念した。いや、ドレイクをそのままにしておくとおそらく、この後で騒ぎになりそうな気がしたからだ。

『……わかってんならバラすな』

「はぁっ、バカな事をするんじゃないよ、まったく。カルデアの危機かと思っちまったじゃないかぁ」

ドレイクはホッと息を吐き、俺を覗き込んで来た。

ぷに、ぷに、と指先でほっぺをつつかれるが、なんか嬉しい。

『久し振りだね、ドレイク。それに頼光さんもブーティカさんもシェヘラザードさんも。俺もこんな状態で自分では動けんのでなぁ』

「いえいえ。元気そうで何よりです。ああっ、母はとても嬉しゅうございます。いえ、産みの母はそちらですが、安心致しました」

うーむ、頼光さんはブレないなぁ。なんというか、どうなんだろう。今の俺は前の俺の子供ということになるのだが、前の俺の母だったら、頼光さんは俺の祖母って事になるような気がするが、そうなったら、頼光さんはキアラの姑？うーむ、ややこしい。

「はぁ、姿は赤ん坊だけど、確かにマスターだね。しかしやっぱりおっぱい飲むんだ？」

『……みんなね、ほ乳瓶で粉ミルクって言ってもダメだって言うんだ。キアラのおっぱいを飲まないとダメだって。マシュもメディアもそう言うんだ。でも、おっぱい飲まないと他に栄養源無いから……』

「はぁ、確かに赤ちゃんがおっぱい吸ってくれないと、お乳が張ってしまって痛いものですから。それに、マスターは今、赤ちゃんなのです。むしろ吸っていただかないと死ん

でしまいます……主にマスターが」
　シェヘラザードがそう言って、困ったような悲しそうな顔をする。このサーヴァントのそういう表情はなんというか見ているだけで悲しく切なくなるのでなんというか辛い。
『わかってるよぉ。わかってるんだけどさ、やっぱり抵抗あるじゃん！姿は赤ちゃんでも、脳みそは百年生きてる老人なんだし！それに、やっぱり百歳の老人がさおっぱいにむしゃぶりついてるって想像してみなよ。それ、なんて変態だ？って思うでしょみんな！』
　俺はそう言ったが、しかし頼光はさらりと
「いいえ？母と子の愛があれば、それは全く問題ありません！」
　と、大きな胸を張り、ゆさぶるん！と乳を揺らせた。
「中身云々じゃなくて、身体が赤ん坊だからねぇ。ま、あたしは子供産んだ事が無いからわかんないけどさ？マスターならいいんじゃない？」
　ドレイクは少し恥ずかしげに困り顔である。え？ドレイクってそうなん？！知らんかった！
「そうねぇ、まぁ、今はそうするしかないんだしね。おっぱいが出るならほ乳瓶はちょっとね」

ブーティカもあははは、と困ったような笑顔で言う。
「まぁ、マスターがどんなに恥辱を受け、そしておっぱいには勝てなかったよ、と悶えたとしてもたくましく生きて下さい……」
シェヘラザードは妙に同人作家の影響などを受けたような言い回しでそう言った。
『……女性サーヴァントのみなさんは、みんなキアラの味方なんや……しくしくしく』
「いや、マスター。中身が老人だからって、おっぱいは悪くないだろ？おっぱいは。むしろあやかりてぇぜ！」
どこからともなく、声がしたが当たりを念視で見回すが、その声の主はどこにもいなかった。
はて？と俺は思ったが、その声の主はひょこひょこっ、と俺の寝かされているベビーベッドまで登って来た。
『オリオン！』
それはオリオンだった。
「そうだ、マスター。久しぶりだなぁ。なんか撮影だかなんだかで呼ばれたんだが、ずいぶんとちっこくなって。……まぁ、俺もちっこいけどな？」
『アルテミスは？』
「ああ、もうすぐ来るだろ。というか。おっぱいは正義だぞ、マスター。それが向こうか

ら来るんだ。ヒャカムザジャスティス、なら、言うことねぇだろ？というかうらやましい！俺なんざ……！」

「俺なんざ、なにかなぁ？オリオン。というかマスターに何を吹き込んでいるのかなぁ？」

「いっ、いや、マスターが母ちゃん（キアラ）のおっぱいを飲むのが嫌だって言うじゃねぇか。それじゃ大きくなれないぞって。ほら、俺っちなんか大きくなりようが無いだろ？だからさ？」

あ、うまくごまかしやがった、コイツ（オリオン）。

「……え？赤ちゃんなのに？おっぱい飲みたくない？そんなのダメよぉ？うん、オリオンの言うとおりだよぉ。マスターちゃん、めっ！」

このぽけぽけ女神め。

『……月の女神までキアラの味方するんだ、しくしくしく』

と、その時ドアが開いた。筋肉隆々でカラドボルグを担いだ男、フェルグスがそこには立っていた。

兄貴再び！

「マスター、男が泣くなっ!!良いかぁ、前にも言っただろう。男は赤ん坊の時に、ぐはぁっ!!」

そういいながらドアを開けて入って来ようとしたフェルグスを、またキアラが今度は技名さえも言わずに吹き飛ばす。

巷ではＣＣＣコラボ復刻中で、さらに追加ボイスも増えたと言うのに、せめて技名とかセリフ言おうよ?!（これを書いてる今ＣＣＣコラボ復刻版でした）。

「おととい来やがりませ」

「なんで、いつもフェルグス、吹っ飛ばされるん?」

「くわばらくわばら、まぁ、マスターもおっぱいを好き嫌いせず、たくさんおっぱい飲んで、寝て、スクスク成長するんだな!」

オリオンの顔は青ざめていた。

と、そこへ黒髭がぱたぱたとやってきた。

「ああ、済まないでござる、少々手間をとったでござるが、これこのとおり撮影用ベビー服、用意できたでござるよ～マスター!」

黒髭が紙袋をたくさん持って、撮影用のベビー服を持って来た。

『あ、黒髭久しぶり。っていうか、ベビー服って黒髭が作ってたの?』

「いやぁ、みんなで縫ってたんでござるが、やっぱりみんなマスターに会いたいと思ってるだろうと?で、ちょっと自分が残って作業変わってね、仕上げたちゅうわけなんよ?」

そういいつつ、黒髭は紙袋の中から一着、ベビー服を取り出した。

「じゃーん！クマたん着ぐるみベビー服でござるよぉっ！そして、ママ用の着ぐるみクマたんもあるでござる！」

『ぎゃーーーーっ?!なんぞそれっ?!くくく、クマたん?!』

俺は、何故撮影にオリオンが呼ばれたのかを理解した。つまり、あのクマたん着ぐるみクマ服を着た俺と、オリオン、そしてあのママ用着ぐるみを着たキアラで、撮影する気なのだ。

『つか、ウチの新商品ってそんなんかよぉぉぉっ?!』

「はぁ、あれ？マスターご存知では無い？もうネットの注文、世界中からめちゃめちゃ来て、生産やらなんやら、もう予約分もとっくに在庫切れの再生産大忙しの大ヒット商品でござるよ？ベビー部門では今まで有り得なかった大ブームの嵐が吹き荒れているのでござる。ほれ、クマたんにうさぎさん、猫、わんちゃん、リス、シンドバッドにメジェドさま、と様々なバリエーション！なお、一番人気はやはりクマたんなのですぞー？」

あ、あ、悪夢だ。まさか百歳越えて、クマたん着ぐるみを着なければならないのか?!

俺はまだ抱えれないが、頭を抱えたくなった。

撮影とご開帳。

さて、着ぐるみベビー服の撮影にはお馴染みゲオルギウス先生と百貌のハサンが来ていた。

周りはギャラリーが集まり、その中には今まで面会禁止だった面々まで来ている。

ジルドレ（キャスター）やらなんか最近見なかったメフィストフェレス、ネロにエリちゃんに、オペラ座の怪人、エリザベートなどなど、もはやまるで見世物のようである。

「フォウ、フォウ、フォウ！」

フォウさんは立香のベビーベッドの上まで来て、なにか嬉しそうだが、しかし立香はとても赤ん坊とは思えぬ、この世の苦痛と恥辱を体現するかのような表情を浮かべていた。

クマたん着ぐるみベビー服。

１００歳超えて、クマたん着ぐるみ。

「……あんたはまだ良いぜ、マスター。それを脱げば人間の赤ん坊なんだから。俺なんざ英霊ん座に還えるまで、このみょうちきりんなクマなんだぜ？」

まさかオリオンに諭される日が来ようとは思わなかった立香だったが、だからといっ

てそれでこの恥ずかしい格好がマシになるでもない。
『……ええ歳して、クマたん着ぐるみは無いと思うんだ、俺』
「それ、オレに喧嘩売ってる？つかわからなくもないけど！」
　そんなやりとりをしているが、ゲオルギウス先生はバシャバシャとカメラのシャッターを切り続けている。
「はい、マスターとオリオン、こっちを見て笑って下さい。ああ、フォウさんも良い感じです。ええ」
　フォウさんはなんかノリノリである。
　仕事なんや仕方ないとマスターは無理矢理笑った。オリオンも笑った。ああ、俺達頑張ってるよな、となんとなく立香とオリオンは分かり合えた気がちょっとだけしたが、
「あ、用意が出来たそうです！お母さん入りまーす！」
　百貌のハサンの人格の一人がそう言い、キアラがノリノリで入って来る。キアラの格好はクマたんのフードの付いた、着ぐるみというよりは、パーカーに近い格好だった。胸の所にクマたんの刺繍がしてあり、クマたん着ぐるみベビー服を着た赤ちゃんと合わせて母親用にデザインされたものだろう。
「はい～、次はお母さんと赤ちゃんの撮影です、キアラさん、マスターを抱っこして～！」
　パタパタパタ、とキアラがベビーベッドにきた。

『……フード以外は普通だよなぁ、それ』
「ええ、フードは普通のフードとクマたんのと、ジッパーで付け替えれるようになってますわ」
『……こっちの着ぐるみベビー服は頭のとこ、外せないのにな』
「赤ちゃん用だと、ジッパーやマジックテープで取り外し式にすると、首の所がすれてしまうんでござる。それは仕方ないでござるよマスター」
黒髭が苦笑しつつそう言い、いろいろ考えたんだけどね～これが解決案出なかったのよ、とうーん、と唸る。
『……まぁ、デリケートだからな、赤ちゃんの肌は』
立香も肌がすれたりするのはやはり無い方が良いかと思う、というかリアル赤ちゃんなので実感している。
結構不快というか辛いときあるからなぁ、とかそんな事を思っている間にすっとキアラが立香をベビーベッドから出して抱っこしてきた。
キアラの抱っこは危うげな所が無く不安感が全くしない。というか立香を産んでから得たスキルのせいだろうか。むしろ立香が安心してしまう程に自然だった。
「ああ、良いですね。とても様になっています。そのまま、そのままです」
バシャっ、バシャっ、とゲオルギウス先生がまたシャッターを切る。

　こうして見ると殺生院キアラはまるで聖母の如く見える。というか何か後光でも放っているかのように美しく見える。クマたんフードを被っているのに。
「うん、とても良い。記念に写真を引き伸ばして飾りましょうかね。はい、マスター、もっと笑って下さいね」
　しかし、立香とすればそんな写真残されたら、しかも飾られたりなんかしたら、黒歴史を見さされ続けるじゃないか?!と思った。
『ゲオルギウス先生、飾らなくて良いです。ええ、そりゃあもう』
「はぁ、とても微笑ましいのに』
　なおもゲオルギウスはバシャっ、バシャっ。
「はい、次は抱っこベルトを付けます。キアラさん、ちょっとマスターを抱え上げて下さい」
　キアラが立香の脇を両手でもってたかいたかいの姿勢を取ると、百貌のハサンが綿のクッションの入った布製の、赤ん坊を抱っこする為の器具をキアラに取り付けていく。
「はい、マスターの足をここに通して取り付け完了です。ええっと、マスター苦しく無いですか?」
『ああ、大丈夫だが、こんなモンまでラインナップに入んのか?』
「ええ、トータルファッションとして統一できるベビー用品がコンセプト……だそうで。

ええっと、発案はコロンブスさんで、黒髭さん他、様々な英霊がデザインと制作をなさってますね。ああ、メディアさんの守りのルーンの意匠も取り入れてあります」

百貌のハサンは抱っこベルトをチェックし、問題が無いことを確認すると、また離れて行った。

『……コロンブスが、ねぇ。やっぱり売れると踏んだんだろうなぁ。全く、抜け目が無いなぁ』

転んでもコロンブスただでは起きず、儲け話を掴んで走り出す。

（まぁ、その商魂のおかげもあって初期のカルデア商会も何度か助けられた時もあったんだけどなぁ）

コロンブスも悪いことばかりをしていたわけではない。カルデア商会を立香が立ち上げた頃には彼の金儲けに関する嗅覚で資金難を逃れたり、ヒット商品を売り出せたりした事もあった。

ただ、コロンブスが見つけてきた儲け話の大半は大抵がトラブルだらけだったのは推して知るべし。

「はいはーい、マスター、笑って下さ～い！」

いかんいかん、と立香は努めて笑顔を作る。

『とは言え、笑顔も疲れるんだよ？赤ん坊には』

そう言いつつ、スマイルスマイル。

バシャッ！バシャッ！カメラのシャッター音は鳴り止まない。

まだまだ、撮影は続く。

――――――――――――――――

ようやく休憩である。抱っこベルトを外されキアラの腕に抱えられつつ立香はようやく息をついた。

抱っこベルトは快適だったものの、やはり撮影と言うのは疲れるものだと立香は思った。それに撮影用の照明は熱く、立香は汗をかいており、それをやや不快に思った。

「は～いマスターちゃん、着替えましょうねぇ？汗かいてちょっと気持ち悪くなっちゃったものねぇ？」

キアラがそのスキル【清らかなる児衣〈コス・チェンジ〉】で、立香が汗をかいて不快になっていることを察知し、甘々な口調でそう言う。

【清らかなる児衣〈コス・チェンジ〉】とは、やはりキアラが出産後に得たスキルである。

マスターの服の着替え時期を察知し、そして強制的に着替えさせられるというママス

キルである。
また、オムツが汚れたタイミングもバッチリ解るという、世のママさん達垂涎のスキルであるが、マスターにとっては、時として辱めとなったりする事もある。
「はい、キアラさん、これが次の撮影用のベビー服です！」
百貌のハサンがタイミング良くベビー服をキアラに渡し、そして新商品の赤ちゃんマット（床に敷いたり出来る、ふわふわのスポンジとモコモコの毛布状の抗菌繊維のついた肌触りの良いマット。クマたんの絵付き）を床に敷き、
「どうぞっ！それも撮影しますので！」
と、ニコニコ顔で言った。
キアラはにっこりと笑うと、そっと立香をそこに寝かせた。
やはり、カメラのシャッター音が響く中、
「はーい、脱ぎ脱ぎしましょうねぇ？」
キアラは手をワキワキさせつつ、
『やめっ、ヤメロォーっ！』
さっと黒髭が着ぐるみベビー服の脱がせ方を説明する。
「拙者の作ったクマたん着ぐるみベビー服は着替えも楽々！襟元のリボンについたボタンを外して」

プチっ。↑キアラがクマたんの飾りリボンのスナップボタンをはずす。
「クマたんのお腹の白い所の柔らかマイクロマジックテープをぺりぺりっと剥がして」
ぺりぺりぺりっ。↑キアラがマジックテープをささっと剥がす。
「おててとあんよを出したら、ほーら脱ぎ脱ぎ完了ですぞぉ？」
すぽっ。↑キアラが手と足を抜き、いとも容易く脱がされオムツ姿にされる立香。
「ほーら、ぱっ、ぱっ、ぱっ、のスリーステップでいとも容易く脱がせることができるんですお？」
『い～やぁぁぁっ、どんだけ楽々に脱がせてんだよぉぉっ?!』
「はいはい、オムツの中も蒸れちゃったわねぇ？」
キアラがいつの間にか取り出したシッカロールのポンポンを手に持ち、オムツのサイドギャザーに手をかける。
周りの見学に来ている群衆（サーヴァント達）が周囲に集まり、そして。
ぺりぺりぺりっ！とオムツがキアラの手によって剥ぎ取られた。
「御開帳～っ！」
露わになる、マスターの前しっぽ。
「「キャーーーーッ!!」」とか、「「かーわいい!!」」とか、「「ちっちゃい！」」
などという女性サーヴァント達の黄色い声や、

「「おおおおお～っ」」とか、「「これはこれは!!」」とか、「「お家も安泰ですな!!」」などという男性サーヴァント達の声が巻き起こる。

中には、「宝具・マスター前しっぽ!!」などというワケの解らない声もあったが。

『い～やぁ～っ!!やめて見ないで、つか摘まむなぁ～っ!!』

キアラが前しっぽを指で優しく摘まみ、シッカロールをポンポンしていく。

「摘ままないとシッカロールを満遍なくポンポン出来ませんし?うふふふ、ほぉら、可愛いたまたまもこれこの通り、股の間もキチンとパフパフと!」

『公衆の面前で、俺の股を開くなぁぁぁっ!あとたまたまをサワサワするなぁぁぁっ!!』

「ほ～ら御開帳～っ。大丈夫で御座いますわ?これは汗疹にならないための大切なケアです。ですよね?ナイチンゲールさん」

ぐっ!と何故かナイチンゲールがサムズアップして微笑んでいた。婦長さん御墨付きの手際の良さでキアラはシッカロールを立香にはたいて行く。

公衆の面前で、御開帳シッカロール。前しっぽやらたまたままで、みんなに見られて汗疹ケア。

『……しくしくしくしく』

もはや陵辱を受けたが如く、立香は泣くしか出来なかったが。

その間中、サーヴァント達はデジタルカメラやビデオカメラをずっと撮り続けていた

とさ。